
みえるもの・できること

マオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みえるもの・できる」と

【Zコード】

N4453C

【作者名】

マオ

【あらすじ】

五皇国セイリオス・裏神官である少女コイ・ヒガ。イグザイオの研究者である少年、ケイ・カゲツ。絶望を知った少年と少女は、世界を壊すために『破滅』を求めて所属国を裏切る。そして、禁忌の地で見つけた『破滅』とは？

世界は腐っている。世界は濁^{よど}んでいる。
世界は歪んでいる。世界は病んでいる。
世界は汚れている。世界は壊れている。
世界は苦痛に満ちている。

世界は 魄い。

大量に人を殺す兵器を作り、使う。
子供にも人を殺させる。

毎日どこかで人が死ぬ。

貧富の差、差別……どこにも必ず存在する。
世界に絶望する理由などそこかしこにあふれている。

そこに綺麗なものなどありはしない。

世界自体が醜いのだから、どこにも綺麗なものなどない。
この世界は、汚い。

彼女たちはそう思つている。それが紛れもない世界の真実なのだと、ちっぽけな世界の中で絶望している。

世界には絶望の道しかないのだと。

世界には希望など無いのだと……。

穏やかな昼下がり。今日は天氣がいい、ぼんやりと彼女はそう考えた。こんな室内ではなく、外を歩くとぞ気持ちがいいだろう。けれど、仕事中の身には酷な願いだ。

特に 彼女のような存在には。

「あれがセトラ・オウンゴンの後継者か。幼いな」

そんな声を耳にし、少女は内心でうんざりしていた。

外見には出さない。そう教育されている。感情は表に出すものではない。まして彼女のような立場では迂闊な行動は命取りになる。目の前にいるイグザイオ国の軍人に嫌気がさしても平然としなくてはならない。

彼女のそんな心境にも気付かず、セイリオスの高司祭は軍人の疑問にどこか自慢げに答えている。

「まだ16歳ながらユイ・ヒガはとても優秀です。だからこそ六芒星を身に着けることを法皇様に許されたのですから」

また始まつた、と彼女は呆れる。よくもまあ他人のことをこうも自慢げに語れるものだ。時折本当に不思議に思いたくなる。

あきれてわずかにうつむくと肩の上で切りそろえた髪が揺れた。髪留めは六芒星だ。襟元、スカーフの留め具、袖口、靴にまで六芒星がつけられている。

これらは支給品で彼女の趣味ではない。身に着けている物は一目で五皇國所属の者とわかる品だ。事実彼女　ユイ・ヒガは五皇國の一つ、神聖國家セイリオス所属の神官である。若干16歳だが、エリート中のエリートである証の六芒星を身に着けていた。

だが彼女は別段変わった力を持つていてはいけではない。強力な魔法士でもなければ、能力者でもない。呪文の勉強などしたことがないし、超能力という生まれ持つた力もない。手にした傘など柄の部分に可愛らしいクマのマスコットがついている。

見た目など本当に可愛らしい女の子だ。とてもエリートには見えない、おつとりした雰囲気の少女で、六芒星さえなければ制服とマントのせいで魔術学院の学生で通じるだろう。この外見ゆえにイグザイオの軍人も彼女の実力を疑っているのだ。もっともユイに実力を見せびらかす気など毛頭ない。

自分は言われたことをするだけだ。少ししてふうと息をつきユイは目線をあげた。さりげない様子で移動する。

ふと外の景色を見ようとでも言う動きだったので、司祭も軍人も気にとめなかつた。ユイが突然手にした傘を広げるまでは。

ここは室内、傘を広げる必要などない、はずであった。

「ユイ？」問い合わせに応えたのはユイではなく、わずかな音。窓ガラスに小さな穴が開き、一瞬後に彼女に向かつて炎が広がる。

ふつ、とかすかな息を吐きユイは傘を振り上げ、振り下げた。柄の先のクマがぼんやりと光る。持ち主の意思に反応して防御機能が働いたのだ。

広がるかと思われた炎は傘にぶつかり、しほむように消え失せた。何が起こったのか理解できたのはこの室内でユイだけだつたろう。軍人も高司祭も啞然としている。

ユイはかまわない。廊下側に声をかけた。

「狙撃されました。炎系の魔法弾です。外を調べてください。射角から計算して……狙撃位置はある建物だと思われます。このタイプの魔法弾は超遠距離射撃ができませんから」

ドアを開けて入ってきた警備の人間にテキパキと指示する。

警備の人間はユイよりも大分年上だが、彼女は臆することもない。それが当然のように指示をし、処理していく。その様子を頬もしげに見ながら高司祭は言つてのけた。

「セイリオス自慢の『神官』ですよ、彼女は」とても自慢げに。

指示を終えたユイはその言葉を聞いて蹴りつけたい気分になつた。自慢。自慢。

誰に対しても？何に対しても？ユイに身寄りはない。自慢したい相手もいない。大体こんなことを誇つてなんになる？

「いやはや、全くだ。強いのだな、彼女は」「軍人は感心した様子で頷く。

「さすがセイリオス秘蔵の『裏』神官だ。この腕前なら安心して座つていられる」

その言葉にユイは冷たく視線を向けた。

「あまり軽々しくその言葉は口にしないほうがよろしいかと」

『裏』その単語が指すものは一般人が知つていいものではない。どこで誰が聞いているのか解らないご時勢だ、腐つても軍人ならそ

のあたりのことなど分かりきつたことだらう。

わざわざ口にするとは、危機意識が足りないのではないか。

こんな男を何故自分が護らねばならないのだろう。今回の任務は本当に馬鹿らしいと彼女は思う。大体この高司祭もたいした重要人物ではないのだ。

わざわざ彼女がボディガードに就くこともないような男である。他の者で充分だったはずだ。狙撃とて分かりやすい位置からのものだつた。少々感覚強化の投薬を受けている者なら、感知はたやすい。

現にユイはたやすく感じ取つた。SP程度でも充分だつたらう。あほらしい、とげんなりする彼女の耳にノックの音。

「失礼します」

入ってきたのはユイよりも多少年上の少年だつた。目立つ灰色の髪と赤い目。上着の肩の部分に彼女と同じような六芒星が刻まれている。ユイと同じように五皇国の配下だ。

一度見たら忘れられない容姿の少年である。ユイも彼を覚えている。

以前イグザイオに何度か行つたときに会つたことがあつた。

「おお、ケイ・カゲツか。どうした」

「はい。狙撃されたと知らせを受けたので。閣下の『ご無事の確認に参りました』

殊勝にそう言つてのけるがユイは気づいている。ケイは馬鹿馬鹿しいと思つてゐる。

自分と同じように。

「まあ、セイリオス秘蔵の神官ユイ・ヒガが護衛についているのですから、心配はさほどしていませんでしたが」

などと愛想笑いを浮かべているが目が冷たい。

「ふむ、確かに彼女は強い。ケイ、お前も彼女に鍛錬してもらつたらどうだ?」

軍人はまったく何も気づかずにそんなことを言い出した。

「1」「冗談を」

ちつとも穩便ではない笑みを浮かべてケイは言つてのける。

「私はこんな野蛮なことには向いていませんので」

……いつかこの男をぶん殴ろつ。ユイは心にそう決めた。

「ふむ、お前はもっぱら頭脳労働ばかりだからなあ、軍に身をおく以上は鍛錬もしておくべきだぞ」

「ほつとけ、このハゲ」

素早く、微かにケイが口の中でそう呟くのをユイは聞きとめたが、口には出さない。どうせ聞こえたのは身体強化されている自分だけだ。突っ込んでもこの男は異常に猫かぶりが上手いので、結局ごまかされる。

「もつともです。いい機会ですので、少々ご教授いただきたいものです、ユイ・ヒガ?」

しゃあしゃあと言つケイにユイもなんとか笑いかける。

「イグザイオ秘蔵の人間スーパー・コンピューターに万が一のことがあつては大変ですよ、

考え直されたほうがよろしいのでは?わたしはここに警備が100%ますし」

彼女は任務にかこつけて回避したつもりであつたが、高司祭がそれを無に帰した。

「ああ、構わぬよ、ユイ。私たちは別室に移るから、彼の希望をかなえてあげるといい。警備ならほかにもある」

「おお!それはありがたい。なにせこのケイというやつは、機械を扱わせたら右に出る者はないので戦うことはからきしとして。仮にもイグザイオ軍に所属している者として情けなく思つておつたのですよ」

「ははは、そうでしたか。実はこちらのユイも機械はからきしでしてね。ちょうどいい機会です、ユイ、少し彼からノウハウを学んでいらっしゃい」

2人を無視して盛り上がり、高司祭と軍人は和やかに別室へ移つ

ていった。

置いていかれた形になつた少女と少年はしばらく無言で立つていた。

「……なんでだ……」

思わず頭を抱えるユイ。

「こっちのセリフだ」

ケイも表情が苦々しい。

「大体どうしてお前がここにいる！？一人暗い部屋で機械と格闘するのにお前の仕事だろー！ケイ・カゲツ！」

「そうだな、暴漢と格闘するのはお前の仕事だ、ユイ・ヒガ」

フツと皮肉げにケイは笑う。

「何が悲しくてあんな自慢好きの男にくつづいて外交に来なきやならないんだか。くそ、サボる口実になると思ったんだが……お前ももう少し上手く断れよ」

「わたしのせいにするな。先に言い出したのはお前だわ」

「あんだけやらせんなこのボケと言つても通じないんだからな。仕方ないだろ。最近の人間は言葉を理解しない阿呆が多い」

言いつつユイを見ている。彼女もその一人だといたげだ。ムカツときてユイも言ってやる。

「そうだな、最近の男が情けないの一縁だなあ」

室内にひんやりとした空気が溢れた。外はいい天気なのに室内は凍りつきそうだ。

やがて、どちらからともなくふふふふと含み笑いをし始め、2人同時に言い放つた。

『お前など大嫌いだ！！！』

綺麗に同じことをハモつてから睨み合つ。最初にあつたその瞬間から、こいつとは合わないと双方思っていたのだが、第一印象に間違いはなかつたようだ。

序章・1（後書き）

長編を投稿してみようと思います。原稿に換算して大体三百枚ほどですが、よければお付き合いください。

コイから見れば、ケイはいやみの固まりで、口を開けば腹が立つようなことしか言わない嫌な奴。

ケイから見れば、コイは腕っぷしばかりが強くて脳みそのない、阿呆な奴。

ようは互いが一番嫌うタイプがお互いなのだった。温和に話などしうが無い。

こいつがいるなら来るんじゃなかつた、と互いに深く後悔している。

本当なら同じ部屋にいるのも嫌だが、あんなことを言われた手前、実際に鍛錬する気は無くとも少し時間をつぶさなければならぬだろ。

「なんであんな男の護衛にわたしがと思っていたが……お前がいたからなんだな、ケイ・カゲツ」

ムスッとした表情を崩さないままコイが言つ。不本意な護衛は高司祭やあの軍人を護るためではなく、ケイ——この少年を護るためにものだったのだ。

「まあな、そうだろうな、俺が死んだらイグザイオの連中には大打撃だろう」

ケイはけろりと言い切つた。

「わざわざセイリオスの『神官』を派遣させるほど、か。迷惑な」

本当に嫌そうにコイは咳き、傘に手を添えた。見た目よりもずっと重いそれは、彼女が何であるのか否応にも感じさせるものだつた。

ケイは何も言わず興味も無いと言いたげに壁際による。視線は窓、小さく穴の開いたガラスを捉えていた。

「三流だな……」

彼がそう呴いたのを確かに聞いた。まあそうだろうなと、コイも

思つ。狙撃してきた犯人からもユイがいたのは見えたはずだ。おそらくはセイリオスの裏神官ということも分つただろう。ユイのあちこちに六芒星がついているのだから、想像するのは容易だつたはずなのに狙撃してきた。その時点で二流だ。

大抵は裏神官がついていると分つた時点で、一流の暗殺者ならあきらめる。かなうわけがないからだ。極限まで身体改造を受けている裏神官に普通の人間がかなうはずがない。

その防御を突破できる術も無い。それこそ魔法士か能力者でもないかぎり対抗することは不可能に近い。いや、魔法士や能力者でも難しいだろう。裏神官はそれらに対抗する術も叩き込まれる。いついかなるときでも、何者にも対抗できるように それが本人の意思かどうかに関わらず、機械のように。

「あまり窓辺に立つな、また狙撃されても知らないぞ」

そつけなく言うとケイは意外と素直に窓から離れた。まだ死ぬ気はないと見える。

「どこから狙撃されたんだ？」

そんなことを聞いてきた。

「窓から見て斜め右側の方角100mくらい先の建物屋上だと思う」「そこまで見えるのか、お前。目に望遠レンズでもはまつてんじやないか、化け物だな」

視力が悪いケイは眼鏡の奥で目を細めている。

「そこまではまだされていない。これから先は分らないけど」

視線を落とす。可愛らしい傘を兩の口でもないのに携帯している自分。傘としても使えるがこれは『武器』だ。自分のために造られた特製の『武器』。

……人を害するための道具。

それは自分も同じだ。裏神官としてのユイ・ヒガ。特別にあつらえられた『人間兵器』。

ユイはぼんやりと思い返す。つい先日、任務で五皇国のひとつ、ヒーラーを訪れた際のことを。そこで任務はちょうど今日と同じく

要人の警護だつた。

ヒニアでは貴族の反乱騒動が起つており、それを沈静するために同盟国セイリオスが協力体制を申し出た。それによつて派遣されたのがヨイと数名の裏神官であつた。

他のものがどんな任務についたのかヨイは知らないし、知らされてもいなかつた。

いつものことなので彼女はごく普通に警備をし、要人の安全を守り……そして刺客に襲われた。

難なく切り伏せ、撃退した彼女に要人はおおいに満足し、えらく褒めた。けれど彼女は嬉しいとは思わなかつた。少しも嬉しくなかつた。

切り伏せた相手は彼女より小さな少年だつたからだ。銃を持っていたからやむを得なく切り伏せたし、急所ははずしたので死にはしなかつただろうが、捕まつて死ぬよりつらい拷問を受けるのだろうと予想はできる。いつそ殺してやつたほうがあの少年には幸せだつたかもしれない……。

今それを思い出すのは、切り伏せた少年に言わたことと同じことをケイが口にしたからだ。

『（五皇國に造られた）化け物！』と。

間違いではない。確かに自分は化け物だ。自覚はある。そこかしこで陰口をたたかれるのを耳にするたび、全くだと自分で思つ。銃をつきつけられても脅えず、怯まず、あつさりと叩きのめす自分は化け物だろう。

腐るほど言われた言葉もある。嫌になるほどの事実だ。どうしようもないほどに事実だ。

じつと傘を見ているヨイに、不審に思ったのかケイが声をかけてきた。

「なんだ？ その傘相変わらず使つてゐるんだな、馬鹿げた武器なのに

「うるさい。わたしのような小娘が持つていて違和感がないものと

「うう指定で持たされたんだ、仕方ないだろ？」「う。

燐然とそう答える。ピンク色の傘は実に可愛らしいが、魔法技術・科学技術の粋を集めて作られた、れっきとした武器だ。

柄には仕込み刀、傘の部分は特殊な鋼糸で編まれており、防弾、防刃仕様になつていて。身にまといているマントと制服のスカーフも同素材で、うまく使えば切り裂くこともできる武器になる。ようは全身くまなく武装しているということだ。

「違和感がない？……あるだろ、違和感バリバリだ」

ケイは窓の外を視線でさす。外は日に鮮やかな青空で雲ひとつ無い。

「うるさい、上からの指示だ、わたしの趣味じゃない」

「セイリオスの開発連中は何考えてるんだろ？なあ、俺には理解できん……」

「しみじみお前に言われたくないぞ、機械オタク」

つんと傘でケイの懐をつづいてやると彼はあわてて退いた。

「やめる、お前の馬鹿力でつつかれたら」「くら俺が作ったものでも壊れる！」

渾身の力でつついてやろうかとユイは一瞬考えた。

ケイの懐には彼が作った端末がおさめられている。ようは小さなパーソナルコンピューターだ。いつも持ち歩いているらしい。

機械を扱わせたら天才らしいが、ユイはその腕前を見たことが無い。ただ噂では知っていた。イグザイオの天才児。彼が軍にスクワトされたから、イグザイオは飛躍的に技術を向上させたという。

いつたい何を作ったのだか興味も無いが、軍の中で作るものなど大体想像がつく。万人が幸せになるようなものではないだろう。

「つたく、これだから脳みそのしわが少ない奴等は……」

呴くケイに蹴つてやろうかと思うユイ。彼女の蹴りなら、骨の数本は折るくらい軽い。

「いじめてほしいのか、ケイ・カゲツ？わたしにはお前が蹴つてくれと言つていいような気がしてならない」

「気のせいだ」

「そうかな」

「気のせいだつ！」

「こころなしかケイの表情に焦りがあるので、コイの気は済んだ。本気で蹴り飛ばす気はない。やつたら国際問題になるだらつことは理解しているし、荒事にするのも馬鹿らしい。

人を化け物呼ぼわりするは、馬鹿扱いするは、不快な相手なのは間違いないが、国家間では重要人物なのだ。たとえ人格に問題があるうとも。

「イグザイオの人間はお前みたいなのばっかりか？だとしたらわたしは住みたくないな。いやみばっかり言われて気が狂う」「そんな纖細な神経持つてるとか？セイリオスの『神官』なんてやつてる人間が」

じろりと睨まれ、睨み返す。しばらくそうして睨み合つてから、長く見ていたくない顔だと思い返して互いに顔を逸らした。

やつぱりこいつとは合わない、死んでも合わせたくないと双方再認識している。

時間をつぶすのも苦痛になつてきた。大体和氣あいあいと雑談したい相手ではないのだ。

それでももう少しは時間をつぶさないとおかしいだらう。鍛錬やレクチャーをした、と言えるくらいは時間を使わなければ、あとで高司祭に何を言われるかわかつたものじゃない。

「……お前端末を持つていたな、ケイ・カゲツ」

「？ああ、それがどうかしたか」

「見せる」

彼女が言つた言葉にケイは愕然とした様子だつた。

「……熱もあるのか、いや、お前にそんな情緒ないよな……氣でもふれたか？」

「お前、わたしを何だと……いや、いい。それより端末を見せろ」

「いやだ」

……コイは無言で傘の柄を引いた。するすると銀の輝きが現れる。

ケイがひきつった。

「マテ。刀抜くこと無いだろ？」

「いやいや、必要だろ？」「ふふふ

不穏に含み笑う彼女にケイは苦い顔でしぶしぶ懷に手を入れた。

「何で見たがるんだ、機械オンチのくせに」

「一応機械操作のレクチャーを受けたという口実を貫くためだ、決まってるだろ。見るだけ見ておかないと言い訳も難しい」

「……本当に操作法を覚えるという選択はないのか、お前には」

ケイのつっこみは無視した。携帯すらやっとのコイに、それより扱いのややこしい端末を扱えといつのば拷問に等しい。

本当に機械は苦手なのだ。

「見せるのはいいが、代わりにお前の傘見せろ」

「傘？何故？」

「セイリオスの技術が見たい。あ、あと端末は見るだけだぞ。あちこち触るな。壊れる」

コイのことをよほど機械オンチと認識しているのか、ケイは慎重にそう言った。

「触る気はない。見るだけだ」

コイにもケイの端末をいじるつもりは無い。こじらつこじらつを触ればどうなるかの見当もつかないのだ。うかつに触つて壊して、彼に恨みごとを言われるのもごめんだ。

口が達者なケイのことだから、心をえぐるような嫌なイヤミを散々繰り返す可能性が高い。

いくら強化されている裏神官でもそれは心底ごめんだ。

ケイから端末を受け取り、かわりに傘を手渡す。

武器を手放すのは警戒心が薄いなと自分で思つたが、よく考えなてもケイにやられるとは思えないし、万が一ケイに襲われたとしても、この端末をブン投げてやればいい。

他の襲撃があつても素手で充分なんとかなる。よつは相手より早

く動き、相手を無力化すれば言いだけの話だ。

ケイの端末は、コイが知っているものよりもずっと軽く、手のひらより少し大きい。

「これはどうやって操作するんだ？ボタンもなにもないぞ？」

「どこを押せば電源が入って、どうすれば何ができるのか、コイにはさっぱりわからない。

「馬鹿にはわからない仕様だ」

傘を広げて、裏側を眺めていたケイはそう返していく。コイは無言で端末をかけた。

「わっ、分った！捨てるな！タッチパネル式だ、俺の指紋に反応して作動する！」

「……そんなことできるのか？」

端末をおろして見つめる。そんな技術があることなど全く知らなかつた。

「俺が開発した。もつともまだ発表はしていない。現物もそれだけだ」
さりげなく凄いことを言つ。新技術を盛り込んだものを無造作に持ち歩き、それをしゃあしゃと他国の神官に言つてのける　並みの神経ではない。

「いいのか、わたしにそんなこと洩らして。セイリオスの神官だぞ」「いいぞ、ばらしたかつたらばらしても。そのほうが世の中のためかもしけん」

ケイはぱちりと傘を閉じて暗い目をコイに向ける。

「どうせ軍に使われたら、ろくなことにならない」

この傘みたいに。コイにはそう聞こえた。傘は本来なら雨をしげもの、なのにこの傘は、人を傷つけるものとして使われる……命を害するものとして。

「それはわたしに言つていいのか」

『裏』神官のユイ・ヒガ。彼女の仕事は護衛だけではない。

「いや……別に」

ケイは苦笑いを口元に浮かべている。珍しい表情だった。少なく

ともユイは初めて見る。「こんな顔もするのか」「こいつとひょっと驚いていると、傘を差し出された。

ケイの好奇心は満足したらしい。交換に端末を返す。

どこがどうかさっぱり分らなかつた。大体電源すら入つていないのでから理解のしようがない。それでもレクチャーは受けたとの言い訳くらいはできるだろう。

「少し護身術らしき形でも教えてやるつか？」

彼女の申し入れに彼は首を振つた。

「いらん。お前の教え方は獸と変わらないだろ？」「からな」

「……お前のイヤミよりは優しいと思うが」

視線の間でばしいつと火花が飛んだようだつた。

ふつふつふつとかなり不穏に笑いあつ。お互に同じことを考えていることはよく理解できた。

『お前なんか大嫌いだ！！！！』

部屋の外まで響き渡る大声が発せられたのは一瞬後のことだつた。「な、なにがあつたのですか？！」廊下から警備兵が駆け込んでくる。いつたい何事かと表情が語つっていた。また襲撃されたのかと危惧したようだ。

「あ、いや、なんでもない」

いまにも剣か銃を抜こうとしている警備兵を手で制して、ユイはこほんと咳払いをした。

「たいしたことじやない、意見の相違だ」

ケイも目を逸らしてぼそりと言つ。

「はあ……そうですか」いまいち納得のいかない表情をしてはいたが、警備兵はとりあえず武器を納めた。

「さて、親交も深めたことだし、そろそろ閣下の話も済んだころだろう。行くぞ」

ケイはさつと部屋を出て行つた。これ以上ユイに付き合つて時間をつけす必要はないと判断したようだ。ユイも同感だつた。これ以上ケイといふと本気で彼の横つ面をはりとばしかねない。

「めずらしいですね、ユイ・ヒガ。あなたが声を荒げるなど」セイリオスの警備兵がそう声をかけてきたので、ユイは彼を見返した。

彼女の視線に警備兵はビクリと身をすくませる。

「す、すいません、軽口を」別段怒ったわけではなかつた。彼女はごく普通に視線を向けただけである。それでも兵は彼女を恐れた。彼女が裏神官と知つてゐるからだ。

ユイは無言で部屋を出た。じつじつ態度には慣れている。付き合うつもりも無かつた。

恐れられる理由は充分に理解している。

セイリオスの裏神官 一般的にはエリートと言われているが、実情は違う。

セイリオスのためならいかなることも厭わない、機械のように感情を持たない『道具』だ。

それこそ人を殺すこともためらわない、必要とあらば子供でも殺さねばならない。

セイリオス 五皇國のために。

そこに自分の意思など無い。必要ないからだ。

窓の外からの笑い声にユイは目を向けた。

青空の下、犬と戯れている少女と少年がいる。

知つてゐる顔だつた。もつともこちらが仕事上知つてゐるだけで、向こうは彼女を知らないだろう。セイリオス高司祭の子供たちだ。たしか年齢はユイと同じ16歳の双子。

同じ年だが、ユイと彼女たちは違う。決定的に違つた。彼女たちがいる場所は陽がさす場所。ユイがいるのは……影の中だ。それはケイも同じだろう。もつとも二人ともその場所から出て行く術を知らない。

ここから、陽のある場所へどうやって出て行くのか、それ以前に出て行こうという、そんな気持ちすら持つていない。

自分にその資格がないとユイは思つてゐる。

手にした傘が今は少し重く感じた。傘の柄の中には刃が隠されて

い。今までたくさん人の血を吸った鋭い刃が。

ついやんだことは無い。うらやんでも仕方ないとわかっている。

彼女には他にできることもなく、その選択肢もないからだ。

だからコイは背を向けた。そのまま歩き出す。自分には陽は当た

らない。当てる必要も無い。彼女は振り返らなかつた。

庭では高司祭の子供たちが楽しげに笑っている……。

序章・合縁奇縁腐れ縁・2（後書き）

ここで序章が終了します。

出会い最悪、仲も悪い主人公一人。

裏神官と人間機械。これから彼女らは?

続きます。

いつからだらう、コイはほんやうそう考えた。

暗い廊下を明かりも靴音もなしにすいすいと歩く。今宵は新月、月すら顔を出さない闇の日だ。夜の住人がひそやかに動く日。そんな中コイは静かに暗闇を行く。

手にはいつもの傘。外は雨。雨音だけがほとほと、ほとほと耳を打つ、静かな夜だ。

ぽつんぽつんとコイの傘からも零が滴っている。彼女が歩を進めるたびに廊下に染みが落ちていく。外の雨はかなり激しくなりそうだ。都合がいいといえばいい。雨が激しくなれば目撃者も減る。星明りのみの新月の日に雨が降るとは、ついていないことだ

この館の住民にとって。

コイは見えるものもないだらう暗闇の中でひょいと何かをまたいた。

もはや動かない何かを。同時にぐしゅりと濡れた感触が靴裏に伝わるが、彼女は意に介さずそのまま進む。目的は果たしたのだ。長居は意味が無い。

階段まで来たときふと思い出した。そういうこには息子がいたはずだ。両親は確認したが、息子の確認はしていない。するべきだろうか、と考えたとき視界の隅で何かが動いた。考えるより先に動いている。袖の中に仕込んでいた小さなナイフを投じていた。

「……ッ」悲鳴はなかつた。

闇をすかして見ると倒れている人影が確認できる。逃げようとしたのか、それともコイが何者なのか確認しようとしたのか分らないが、愚かなことだと彼女は思う。

コイの視界にこの暗闇はなんら妨げにはならない。暗視スコープ

など必要ないのが『裏』神官なのだから。

近寄つて何者なのかを確かめる。顔の造作からこの館のメイドの

一人だらうと判断した。すでに息は無い。コイのナイフは首に突き刺さっていた。無造作に回収、メイドのパジャマで血をぬぐって、彼女は階段下をうかがう。

……他に誰かが起きてくる気配はなさそうだ。

けれど彼女は階段をおりるのはやめにした。くるりと振り返り、すぐ脇の窓に手をかける。

3階の窓には掛け金すらかかっていなかつた。こんなところの防犯など考えもしなかつたのだろうか、あるいは警備システムを信用していたのか。システムなどすでに彼女の手によつて叩き壊されていふところだ。

警備室など真つ先につぶした。中にいたガードマンも同様に2度と喋ることはできまい。

いつからだらう、彼女は再びそう考える。雨がたたく窓を開きながら。

いつからわたしはこんなことが平気になつたのだろう。
ばしゃばしゃばしゃ。雨はひどくなり始めている。まず彼女は窓枠につかり、体をくるりと外へ出した。見る間に雨が体を濡らしていくが構わない。

片手の腕力だけで自分の体を支え、もう一方の手で窓を閉める。それからためらいなく彼女は雨の中に身を投じた。

数秒の自由落下の後、少女は難なく地面に着地している。ぱちぱち当たる雨粒にかまわず、コイは走り出した。裏庭を走りぬけ、すぐに館を取り巻く塀にたどりつき、足を止めずに跳躍する。

5mはある塀をコイは易々と飛び越えてのけた。外へ出てからようやく傘をさす。

もはやズブぬれの身には意味がないよつとも思えたが、証拠隠滅にはちゅうじいい。雨が全てを洗い流してくれる。

彼女のマントから滴る雨は紅い。制服は雨で濡れていたが、マントは違つた。傘から滴るものも紅かつたが、雨の勢いですぐに色を失い透明な雲になつた。

それを見届けてから、コイは手袋を外した。指紋を残さないため、けれど指先の感覚を鈍くしないために、外科手術に使うような薄手の透明な手袋だ。支給品のため捨てる』とはできないので、スカートのポケットに突っ込む。

これで見た目は普通の女子高学年だ。

もつともこんな時間に女子高学年の生徒がうらひうらしていたら、まず間違いなく補導だらけ。ややこしくなる前にせつと移動するに限る。

迎えが来る予定の場所は走ればすぐのところだ。彼女の足なら数分とかかるまい。

けれど彼女は走ろうとはしなかった。少し考えたかったのだ。湧いた疑問は瞬間的なものではない。もづづと前から、度々思つたことだつた。

『何故、こんなことをしなければならないのだらけへ。』

それは1人手にかけるたび大きくなる疑問だ。

『わたしはこんなことがしたかったのか？』

未来ある少女の疑問としてはあまりにも痛々しい。

『どうして、こんなことをしているのだらけへ。』

その疑問を抱くことすら今までしてこなかつたし、できなかつたのだ。

『わたしはこんなことをしていて楽しい？嬉しい？』

否。それだけははつきりと言える。

『なにがしたかったの？』

答えは出ない。彼女はその答えを己が内に持つていない。

ただ分るのは『こんなことは嫌だといつこと。今夜手にかけたのは、見知らぬ家族。

両親と祖父の三人。何故殺すのか、彼女はその理由すら知らない。任務だから詳しく知る必要もなく手を下した。それがおかしいことは気がついている。

『やりたくないこと』なのにやらなければならぬこと。

抜け出す方法をユイは知らない。

『裏』神官をやっていることに耐え切れなくなり、逃げたものが末路を知っている。

どうあがいても逃げられないのだ。機密を知っている『裏』神官が一般人に戻ることなど許されない。

結果は、自身の死だ。

逃げた者で逃げ延びた者はいない。少なくともユイの知るところではいなかつた。

いつたん裏神官になつた者が表の世界に戻ることはほぼ不可能。たとえそれが、なりたくてなつたものではなくとも、だ。

そしてユイには裏神官をやめてどう生きたらいいのか分らない。それ以外の生き方を許されないように、物心ついたときにはもうすでに訓練が始まっていた。売られたのだと、10歳になつたときに聞いた。貧しい家に生まれた彼女を生活に困つた親が売つたのだと。

よくある話だった。貧しくてどうにもならなかつたのだろう。その後自分の家族がどうなつたのか、彼女は聞こうとはしなかつた。どこかで幸せにやつている、それでいい。今会つても自分は家族と分らない。覚えていない。ならばいのと同じだ。

彼女はそう思つている。

それがどれだけ殺伐とした感情なのかも知らずにいる。

雨の中で、彼女の足はしばらく止まつた。

『このまま、迎えの車に行かずに、立ち去つたらどうだらう?』

そんな感情がふと湧いた。戻らずにどこかへ行く。

それはとても魅力的な考えに思えた。どこでもいい。何処か遠くへ。

ありえないことだ。ビルへ行つても五皇国内にいる限り、すぐには居所は知れる。

五皇国の大ネットワークは、彼女がアリの巣にもぐつても見つけ出しだろう。

セイリオスの裏神官だけならず、殺戮者セトラの後継者とまで言
われている彼女が、逃げることなど許されない。

……不本意だ。『銀の殺戮者』セトラ・オウンゴン。コイに技術
を教え込んだ女性。

いわば師とも呼べる存在だが、コイはセトラが嫌いだった。後継
など冗談でも嫌だった。

それなのに感情と相反するかのように任務達成率は高く、今回の
任務もその腕前を見込まれたからだ。意に反して『セトラの後継』
としてのコイの名は、どんどん回りの重鎮に知れていく。

そして回されてくるのは困難な任務だ。『セトラの後継』ならこ
のくらいは当然できるだろうと。

『……ここから出て行けるかな?』

しどしどと降りしきる雨の中、彼女は足を踏み出した。

向かう先は、一台の車が止まる場所。

外見はごく普通の乗用車、窓ガスマークになつていてのが少し不
自然だ。コイにはすぐ分つた。迎えが業を煮やして来てしまつたら
しい。

定刻など決めていなかつたはずだが、ひょっとすると何かあつた
のかもしない。

……もう次の任務という可能性もある。

傘で自身の顔を隠して彼女は息をついた。

まるで監視でもされているかのようだ。いや、実際されているの
だろう。どこで何が起こつても即座に無かつたことにするためだ。
彼女はセイリオスにとつて捨て駒だ。

代わりはいくらでもいる。身寄りのない子供をつれてくれればいい
だけのことだ。訓練に時間はかかるだろうがセイリオスにとつてさ
ほどの手間ではないだろう。

ただの駒。代わりは利き。いくらでもいる。彼女でなくてもいい。
足が重い。車に近付きたくない。こんな風に思うのは初めてだっ
た。

戻りたくない。

でも逃げられない。

どこへも、行けない……。

『ほんとうに?』心がせきやく。

『ほんとうに?』どこにもいけない?』問いかけは弱く、心もとない。初めての自身の疑問。

今まで任務ばかりで、自分では何も考えてこなかった少女の、想い。

『わたしは一体なにがしたいんだろう?』

夢も希望も抱くことが許されなかつた。今も抱いてはいない。けれど何かが確実に彼女のの中に芽生えつつある。

ヒニアでの少年の言葉。

いけすかないケイ・カゲツとの会話。

あの日庭で楽しげにしていた双子。

の人たちと自分の違い。

それは一体、なんだろう。

車が近付いた。窓が開く。

「おむかえにあがりました。ユイ・ヒガ。全て滞りなく済みましたか?」

無骨な男が顔を出し、彼女にそう聞いた。ユイはうなずくだけで、言葉は発さず後部座席に乗り込み、用意されていたタオルで体を拭う。

じんわりとわずかに紅く染まるタオル。まだ多少返り血がついていたらしい。雨は全てを洗い流してはくれなかつたようだ。

確かに、と彼女は思い返す。

確かに最初はこんなことは嫌だと何度も訴えていた。やりたくない。怖い、嫌だ、こんなことさせないでと子供心に必死に訴えた。血をみるのが嫌だつた。

いつから平気になつたのだろう。こんなに無造作にやれるよつこなつたのだろう。

多分自分はあの口庭で戯れていた双子でも任務となればあっさり手を下した。

そしてなんとも思わずには次の任務に向かっただろう。今夜のよう

に。

確かに化け物だ。

自覚しなくては。どうやってもこの生き方以外はできない。

人間兵器『裏』神官である以上、他の生き方など許されな

。

『……ほんとうに?』

わずかに頭を振つてささやきを追い出す。こんなことを考えても意味が無い。

タオルを投げ出し、差し出された携帯を受け取った。任務の最中には邪魔にしかならないからと預けておいたものだ。もつとも持っていたとしても彼女はめったに使わないし、使えない。本当に機械オンチなのだ。持ち歩くのもうつとおしゃべりである。

便利は便利なのだろうが、どうにもなじめない。これで監視もされているのだろう。

そのくらいの技術があることはいくらコイでも知っている。

「メールがきていたようですよ」車を走らせながら男が言う。「こんな時間にメールなんて、彼氏でもいるのですか？」妙に軽口をたたく男だ。バックミラーでちらちらと彼女を見ているのがうかがえた。興味があるらしい。

こんな少女が裏神宮なんてと思つていいのつだ。確かに珍しいだろ？が、珍獣扱いされているよつで気に障る。

コイは相手にしなかつた。男はしばらく彼女の氣を引いて話しかけてきたが、やがてあきらめたようだ。

しばらく車中に沈黙が満ちる。窓に流れる水滴を目で追いながら、コイはふと思い出した。

メール？ わたしに？ 誰から。彼女に恋人など存在しないし、メールなど使つたことが無いのでやり取りをする相手もいない。携帯は電話機能だけで手一杯だ。

もちろんこんなもので任務の有無のやり取りなどしない。メールの相手に心当たりなどまったく無かつた。携帯を手に取り、見てみる。

どいをどつ見、いじつたらいいのかも分らない。駄目だ、と彼女はすぐにあきらめた。

どうせいたずらか悪質な勧誘、詐欺メールの類だろ？^{たぐい}

そう見当をつけて携帯をしまった。その頃には降りる場所に着い

ている。

運転手役の男はここまでだ。何も言わずにコイが車から降りるのを男は興味津々で見ている。何か言つてほしいのかも知れないが、彼女に男の興味を満足させる義理も義務も無いので無視して傘を広げる。雨足は大分弱まつてきていた。水たまりをよけずに歩く。背後で車がなかなか去つて行かないのを感じ、あの男はダメだな、と思う。

好奇心が強すぎる。いろいろここまで聞きたがるタイプなのだろう。

そういう人間は裏に関わると早死にする。

今回ユイが手を下した家族のようにいざれ消される。

まあ、どうでもいいことだ。どこで誰が死のうが生きよつが、自分には関係ない。

ひたひたと歩きながら、雨の音に耳をすませた。他には何も聞こえない、夜の静かな雨。

今日泊まるところまではもう少し歩かねばならない。尾行をさけるためとはいえ、面倒なことだが、こんな夜なら悪くない。

ユイ意外誰も歩いていない。辺りは暗く、建物の明かりも見当たらない。

普通なら心細く感じるところだが、ユイは違う。

闇は彼女の友だ。長くそうである。闇にまぎれて彼女の存在はあるのだから。

雨も優しい。この冷たさすら、彼女には優しいものだった。それ以上の優しさを彼女は知らないのだから。

己が哀れな存在だと知らない少女。だが、知らなければなんとうこともない。

……ほどなくして、今夜の宿が見えてきた。教会である。

セイリオスがあがめる『唯一神セリオス』の教会だ。セイリオスという國の名はこの神からいたいたものだと教会は問いている。本当かどうかユイには分らない。大体、神学の教義などとともに聞

いたことが無いのだ。学位としては一応修めているが、単位ぎりぎりだつた。彼女が持つ学位などほとんど書類上のものだけで、実質、学など無いも同然だ。必要最低限のことだけ分つていれば良い、とあまり教えてもらえたかったこともある。

妙な知識を『えると、なまじ強化されている裏神官だけに、危険なことになりかねない』というのが教官サイドの言い分らしい。

別段不便は感じていないし、勉強が嫌いなコイにはむしろ願つたりだつたが。

「すいません、『子羊』です。一夜の宿をお貸し願えませんか」
コンコン、コンコンと一定のリズムでドアをノックする。ノックの仕方が合図になつてゐるのだ。すこししてドアが開き、老女が顔を出した。

「まあまあ、こんな時分に若い娘さんが……どうぞ中へ。まよえる子羊にセリオスの加護を」 そう言つてコイを招き入れた。微笑んでいるが隙がない。

鍵を閉めて老女は「こちらへ」とコイを案内した。

さほど長くも無い廊下を歩きながら、

「ちょっとアシタ」いきなり若々しい声で老女 いや、少女は言つ。

「聞いたわよ、ケイさんに会つたんですって?」老女の顔のままで。「うー・ソルト……わたしは今、仕事中」

一応コイはそう言つて注意を促したが、彼女は聞いていなによつた。

「ケイさんに会つたなら教えてつて前に言つたでしょ? メールもしたのに返事こないし」

「ああ、メールお前だつたの。見てない」

あつさり答えると「うーはふり返つた。『見てないいいいい?』

地の底から響くかのような声である。しかも老女の顔のまま。

恐ろしいことにの上ないが、コイは平然として、いくぶん砕けた

口調で言い返す。

「わたしが機械に弱いのは知っているでしょ」

「知ってるわよ。でも見るくらいはできるでしょ！？」

「できない。やつぱりだつた。一応見ようとはしてみたんだけどね」
キッパリ言つとラニは黙つた。気配から察して怒つていると言つ
よりは、呆然としているようだ。

「……アンタ、本当に現代人？」疑わしげにやつぱりてきた。

「そうだよ」

「いまどきメールもできない奴なんていないわよ？」

「いや、わたしできないけど」

「ここにいるじゃないかと自分を指差してみせるとラニはまた黙り
込んだ。

「原始人……？」しばらくしてからぽつりとそうつぶやく。失礼だ。
失礼だが、ユイには言い返せない。

「そんなにひどいのかな、わたしの機械オニチは」

本人としてはとくに困つたことが無いので、気にしていなかつた。
ビデオの録画ができなくとも任務に支障などないだらう。

「ひどいといつか……ふつうじやないわ」断言された。「おかしい
わよ」とまで。

むう、とユイは眉を寄せる。ケイに言われたぐらいではなんとも
感じなかつたが、同僚に言われるとまずい様な気がしてきた。ラニ・
ソルトはユイと違つて、情報収集が主な任務と分つていても。

「まあ、見てないのは仕方ないけど……アンタ裏神官がそれじゃまずいわ
よ。携帯くらいは使えるようになるのね」そう言つてラニは首の下
に手をいれ、マスクをはぎ取つた。

あらわれたのは、ユイとあまりかわらない年齢の金髪の少女だ。
なかなか美人である。

「アタシがケイさんのこと聞くとき便利だし」そう、強気ににっこ
り笑う。

「結局それ？」

ユイはげんなりした。ラニ・ソルトは奇特なことにケイ・カゲツ

に想いを寄せて「いるらしー」。コイとしては、あんなイヤな奴を好きになるなんて理解できない。

以前ラーにもそう言つたことがあるのだが、ラーは「そこがいいんじやない。コイはまだ子供だからわからんないのよ」とハート乱舞で言い返してきた。

……わからなくていい、と思ったことはラーには内緒にしている。「で、ケイさんどうだつた？ いつもどおりかっこよかつた？ 素敵だつた？」やつざばやに質問していくラーの勢いに、少々ビビりでなく引きながらコイは首を振った。

「わからない。いつもどおりだつたとは思うよ。イヤミ言われたし自分がケイに関して言えるのはそのくらいだ。大体嫌いな相手だ。犬猿の相手もある。

「いいなあ、コイばかりケイさんに会えて」唇を尖らせるラーは普通の男なら、じれりと転がりそつなほど愛らしい。

「そのうち会う機会はあるよ」

コイはそう言って会話を終わらせるつもりだつたが、ラーは離してくれなかつた。

「ねえ今度ケイさんに会つたらアタシのメルアド教えてきてよ」と携帯を取り出している。

コイはため息をついた。

「他国の男とメール交換するつもり？ 知れたらどうなるか考えている？」

「大丈夫よ！ 同盟国だし！ なんたつて相手はケイさんだし！」と理屈になつていてるのかいないのかよく分らないことを語つ。

「……一応、わたし達は『神官』なんだけど、わかってる？」

念のため、そう訊いた。「わかつてるわよう」とラーはまた唇を尖らせる。彼女のクセだ。

「ケイさん相手なら文句も無いでしょ。だつてあの人をセイリオスに引き抜けたらすごい功績よ？ その可能性を考えると反対もされないとと思うわ。べつに情報もらすわけじゃないし、ただ個人的にメ

ール交換するだけよ。それでケイさんがアタシのためにセイリオスに来る気になつたら万々歳」うふふと幸せそうに言つラニにユイは突つ込めなかつた。

……ケイ・カゲツが断るといつ可能性は考えていないのか、と。あまりにもラニが幸せそのので、水をさすのも悪いような気がして黙る。夢を抱くのはいいが、巻き込まないでほしい、とも思った。あまりケイには関わりたくないのだ。任務ででも嫌なのに、この上個人的にまで関わるのはまっぴらだ。

「のままラニがケイとメール交換を始めて、あまつさえうまくいって、ヤツがセイリオスに来て仕事仲間なことになつたら

「…………つ！！！」

寒氣がした。しんそこ嫌だ。

「ラニ・ソルト」

「なに？」

「もういいだろつか？ 休みたいの。寒氣がしてきた」

寒氣にかこつけて話を終わらせようとする。

「あら、珍しい。雨に濡れたせいから」さすがにラニも話を打ち切つて部屋に案内してくれた。

「シャワーがついているから、浴びてあつたかくして寝るのよ？ アンタに風邪でもひかれたらアタシがアンタの代わりしなくちゃならないんだから、風邪なんかひいちゃだめ」実際にラニがユイのかわりに任務につくなどありえないだろうが、彼女なりの心配の仕方なのだろう。言い方はあまり可愛くなかったが。

「あ、それから明日携帯の使い方レクチャーしてあげる」などといらんことまで言い出した。

「いいよ……使わないから」

ゲンナリとそう答えるとラニは眉をつりあげた。

「だめ！！ アンタにはケイさんにアタシを紹介する義務があるのよ！！」いつからわたしはそんな義務を負つたのだろう？ ユイは心にそう問いかけた。

答えは無い。あるわけがない。ラードが勝手に、かつ強引に決めたのだから。

「じゃ、明日ね。おやすみ、いい夢をセリオスが与えてください」とを「祈りの言葉を残してラードは退室した。閉められたドアを見て、

「わたしに選択権は無いのか……？」

コイはつぶやいたが、もう遅い。ラードの勢いに押し切られてしまった。あの強さはどこからくるのか、時折真剣に聞きたくなる。彼女を見ていると恋するというのはすごいこと思ひ。かつてのラードはあんなに明るくなかったし、氣も弱かつた。今からは考えられないくらいだ。

「……あの男のどこがいいんだろう……？」

マントを外しながらコイは心底からつぶやいた。自分はまだ恋の一度すらしたことはないから、よく分つていらないだけなのだろうか？しかし、あんな男に恋するくらいなら分らなくていいと思うのもまた事実だ。

『裏』神官などやつていて恋なんてしている暇など無いことも思うが、同僚のラードは立派に成立させている。片思いでも恋は恋、ある意味超人だとコイは思つた。

よく両立せる力があるなあと、感心してしまつ。

「ラニー・ソルトは、すごいな……」

彼女は機械による身体改造を受けていない。もしケイと交際を始めてうまくいくともなんら支障はないのだ。普通の交際というのは難しいだろうが、もともと裏神官をやっている彼女と、軍の要職についているケイなら、お互い多忙なことは間違いないがさほど違和感などなく付き合つていけるに違いない。

コイが橋渡しをしてやるのは、セイリオスのためになることだらうが、はつきり言つて気は進まない。

携帯をいじるのも、ケイにラニーの連絡先を知らせるのも、ひたすら厄介なこととしか思えない。大体、ケイが素直にラニーに連絡するだらうか。

「……うまくいくと思えない……」

あの冷血男が、にやけた顔でラニーにメールするところとか、データでラニーと腕を組んで歩いているところなんかを想像しようとして、できなかつた。

「き、氣色悪い」

真剣に鳥肌を立ててしまつコイだ。比喩でなく寒気がしてきたので、考えるのをやめた。

まあラニーが本気というのは良く分つてるので、メールのあて先だけでもケイに教えるくらいはやつてもいい。それから先は当人たちがすることだ。

なにせコイはこうこうとにひびく疎い。今だ初恋すらしたことがない辺りで知れよ。

ラニーに相談を持ちかけられても答えようが無い。もつともラニーも相談というよりはケイに関する報告を聞きたいだけのようだが。

しかし、あの熱意はまるで芸能人でも追いかけているかのようだ。裏神官の任務を、ひと時でも忘れないからではないのか、ともちら

りと思つた。

ラニーのような娘には裏神官の任務は酷すぎる。彼女はユイと違つて人を傷つけることを怖がる。人の痛みをきちんと感じることができる娘だ。

壊れているようなユイとは違う、優しい娘なのだ。だから特性なし、特殊戦闘には向いていない、と情報収集にまわされた。それでいろいろ苦労があるのでどう、時折泣いていることをユイは知っている。

他の人に心配をかけないように、一人静かに声を殺していた彼女はとても優しいと思つ。

自分とは違う。ユイはそう思つた。自分は人のためには泣けないだろう。

そもそも泣き方も忘れてしまつた。この先泣くこともおそらくない。

「ラニー・ソルトはすごいな」

もう一度そうつぶやいて、ユイはベッドに横になつた。制服は着たまま、スカーフや六芒星の髪飾りを外す。特にスカーフは外さないと寝ている間に首が切れる可能性があるので。スカーフを枕の下にいれて目を閉じる。

眠気はすんなりやつてきた。いまさつき人をこの手で仕留めてきたのに、ユイの心に罪悪感はない。そんなのを感じる心すら田々の任務で削り取られていつた。もう残つていないので。この心には、罪の意識すらない 壊れている。

ユイはそれを自覚していた。眠気の中、うつすらと思つ。

なんとも思わないことは、果たして幸せなことなのだろうか？
心の痛みも、他人の苦しみも、悲しみも、わからなくなってしまうのは幸せか？

(それはほんとうに『 』?)

寸前に思ったことは既にかき消された。

翌日、早朝いつもの時間に目が覚め、シャワーを浴びてから身支度をしているとドアがノックされてラニーが顔を出した。金髪美少女ではなく老女の顔で。

「おはよう。食事の用意ができるわ」顔は老女、声は少女で話しかけてくる。違和感はどんなにも程にあるが、コイは平然と応対した。

「ありがとう。少し待って。すぐ支度する」

支度といつてもスカーフを巻き、髪飾りをつけ、マントを羽織るだけだ。制服は寝巻きとして使っていたにもかかわらず、しわ一つない。特殊素材でできているだけあって、めったなことでは着崩れないのだ。それでも一応パタパタと手で軽くはらつて整える。

置かれていたブラシで髪をさつとかして、支度は終了。

「おまたせ」

「早いわね……」あきれたような口の声にコイは少し首をかしげる。

「早いのが悪いの？」

「悪くはないけど」まじまじと顔を覗き込んでくる。

「な、なに？」

「かわいい顔してるのに……」ぶつくさと呟く。

さすがにコイも眉を寄せた。何が言いたいのか良く分らない。

「何の話」

「いくら神官だからって、アンタもうちょっとおしゃれに気を使いなさいよ、年頃なんだから!」……どうリアクションをとればいいのか。

人間兵器がおしゃれ?そんなことをしてどうする。

コイは明確に必要性を感じないのだが、ラニーは熱弁をふる。

「こつ見^{みそ}初めてられるかわからないのに! 特にアンタは各国の偉い

人と会うことが多いんだから、こいつプロポーズされてもいいように身だしなみには気を使わなきゃ……」「ブシを振り上げる彼女の熱意はどこからくるのか。根拠はないだろ？、間違いなく。

「いや、ラニー・ソルト？、ちょっと待て？」

「とめても無駄かなと感じつつ、声をかけてみる。

「ありえないだろう、それは」

「なんでよ？、アンタ可愛いもの、絶対その内ひつかからお声がかかるわよ」妙に自信たっぷりに言いつつしている。理解できないほどの自信だ。

「まあべつたり化粧しろっていつわけじゃないから。でもちょっととくらには化粧も覚えたほうがいいわよ。せっかく可愛いんだから」老女の顔でウインクしてそんなことを言つ。

さっぱり理解できなかつた。裏神官がおしゃれなどして意味があるのか。

情報収集ならば色仕掛けなどを考へたが、コイの仕事は『暴漢』の『排除』だ。言わば肉弾戦闘ばかりである。自分より遙かに大きい男でも躊躇なく叩きのめしてのけるコイを、どこの誰が見初めるというのだ。こんな化け物を娶りたいといつのならばよほど奇特な人物だろう。いるわけがないし、コイ自身にそのつもりなど毛頭ない。微塵もない。

「ありえないと思つが……」

部屋を出て、キッチンに向かいながらつぶやくと、ラニーは反論してきた。

「だから、なんですよ？」こいつは理解できないと言いたげだ。

「神官だぞ、わたしは。しかもセトロ・オウンゴンのなんぢやらとか言われてるくらいの」

「いいじゃない、別に。機械改造受けないんでしょう？、セトロ・

オウンゴンは機械化してるだろ？けど、アンタはまだ投薬くらいでしょ？なら子供産むのだって支障ないはずだし、……どうも会話にずれがあるようと思えてきた。ラニーの視点と自分の視点とではそもそも

そもそも見てる角度が違うようだ。

「だーいじょうぶよ、アンタは可愛いー。アタシが保証してあげる」などと言われても困るだけなのだが、反論するのも無駄のよつた気がして黙つてラニーの背後で苦笑した。

まあ、悪口ではないし、あまり拒否するのも悪い気がしてきたので、とりあえず礼を言つことにする。

「そうか、ありがと」

「……無感情に言われてもあんまり伝わってこないわねー……ってアンタ本当にそう思つてる？ めぢやめぢや棒読みだったわよ？」疑わしげな声が返ってきた。

「わかった、もう言わない」

「……それもいやだわ……」今度はムツとした声が返ってきた。
どうしろと言つのだろう。対応に困り、無言で通す。

キッチンでテーブルについて、ようやく違うことができると思つたが、ラニーは離れなかつた。テーブルの上では野菜たっぷりのコンソメスープ、とろけているチーズが乗つたパン、カリカリのベーコンエッグなど質素だが味は悪くないだろう食事が並んでいるのに、食べられない。

「アンタ好きな人とかいないの？」……話題を変えたい。コイは心底からそう感じていた。

これみよがしにぶつぶつと普段はやらない食前の祈りをささげてごまかそうと試みる。

「ねえ」ラニーは許してくれなかつた。仕方なく答える。答えないればいつまでたつても食事にありつけそうにない。

「いよいよ……前にも言つたじゃないか、興味がないって

「それじゃ困るのよ」唇をとがらせる彼女。

「困る？ 何故」

コイの異性観で何故にラニーが困るのだ。これはおかしい。さすがにそう思つてラニーを睨む。

「上層部からか？ わたしの何を調査している？」

「なにも。これはアタシの個人的興味」うつふつふとラーは異常に楽しそうだ。

「ほんとうに？」

「ほんとうに」うそだな、とコイは確信した。ラーの目がわずかに泳いでいたからだ。コイの強い視線に気の弱いラーが隠し通せるわけがない。

しかし、これ以上彼女を問い合わせても彼女を追い詰めるだけだろう。上層部の命令で何かを調べているのなら、口にできないことのほうが多いはずだ。

コイはわかつたと答え、食事を始めた。心中には疑問が広がっている。

上層部に調べられるようなことは何だらう？ わたしは気がつかない内に目をつけられるようなことをしたのだろうか？ 調査が入っているのなら遠からず聖都に召集されるだらう。査問会を受ける羽目になるのだろうか？

しかし一体何をした？ 任務はごく普通に行つておなじいる。失敗もしていない。大体失敗はそのまま死を意味するのだ。ここにこうしている以上失敗はありえない。

2日に一度の定期報告もちゃんと入れている。命令無視もない。

調査を受ける理由は全く思い浮かばなかつた。まして自分の異性観など調べてどうするのか、さっぱりわからない。

食事が終わるころにはコイは考えを捨てた。調べたければ調べるといい。

困ることはないし、言いがかりで処罰されようと構わない。

自分にこだわりなどなかつた。人の命をなんとも思わないようにコイは自分の命もなんとも思つていなかつた。いずれどこかで死ぬだらう。早からうが遅からうが構わない。

どうせ他にやりたいこともない。ならば命に価値もない。

こそ、どちらりとテーブルの隅に置かれた聖書に視線を向ける。

聖書にある一説が頭に浮かんでいた。

禁忌・破滅・ふれてはならぬもの。それはありふれた終末の伝説。五皇國のどの国にもある、けれどどの国でも解釈が違う、禁忌の存在。

セイリオスでは、太古に繁栄していた「銀砂の民」が生み出した、世界を滅ぼすほどに強力な最終魔術だと言い伝えられていた。

そんなものが禁忌の地には封じられている、と。

『禁忌に触れて全てを無にしてしまおうか』

そんな考えがユイの心にするりと入り込んだ。一瞬後には彼女自身によつて否定されたが、世界を滅ぼすほどに強い魔術などありえるはずがない。大体、禁忌の地にはなにもない。『裏』神官になつてから一度行つたことがあるのだ。

五皇國の中心、ラグドラリヴと名付けられた土地だが、本当に何もない場所だつた。

あるいは森、川、草原と自然だけだ。住んでいる者もいない。禁忌の地と言われている所に住む奇特な者などいないのでない。たとえそれが迷信でも、やはり気持ちのいいものではない。

『全てを滅ぼす力が眠る地』などと眉唾がいいところだ。それでも行きたがる者はまずいない。住むなどもつてのほかだ。

ユイとて好きで行つたわけではなかつた。

指名手配になつていた逃亡犯が入り込んだせいで、立ち入り禁止のラグドラリヴに行く羽目になつたのだ。行つてみればなんと言つこともない、ただ自然の広がる場所だつた。

バカンスや休息には向いているだろう。宿泊施設などはないから、アウトドアの心得がないと不便だらうが。

行つてみてなんでこんな所が立ち入り禁止区域になつてゐるのか、しみじみ疑問に思つたものだ。その時の指令も『逃亡犯を見つけてもラグドラリヴ内で排除はまかりならない。必ずラグドラリヴから出てから処分すること』などという不可思議なものだつた。

裏神宮にはどうじだるうと犯罪者を『排除』する資格があるといつ
のに、その時はその特例すら認められなかつた。

『ラグドラリヴを血で汚してはならない』 そもそも言われた。
何もない場所をなぜそこまでして護るのか？

大体、各国の言い伝えがバラバラな時点ですでにあやしいだろ。セイリオスでは前述の通り、『銀砂の民』が残した最終魔術。イグザイオでは百年前に存在した天才科学者が発狂し、発明した恐るべき兵器が封印されている、らしいとのこと。

女王国家シルメリアでは古代の血まみれ王子に生け贋にされた者たちのミイラが、死してなお呪いの声を上げている場所と言われている。

これだけすでに眉唾なのに、あとの一国でも言い伝えは全く違う。

和の国ホマレでは荒ぶり猛る火の神が眠っていて、眠りを妨げたものには灼熱の業火で答えるという。

そして水上国家ヒニアでは決して触れてはならない致死の呪いがかかった宝玉が安置されているという言い伝えだ。

各国実にバラエティに富んでいる。富みすぎていて、かえつて疑わしい。

共通しているのは『世界を滅ぼす力』のみだ。

そんな言い伝え今時子供でも信じない。大方国の威光を示すための作り話なのだろう。

世界を滅ぼすようなものでもちゃんと封じているのだよ、だから我が国はすごいのだ、と。

笑い話だ。ラグドラリヴには何もない。彼の地に破滅の力など存在しないのだろう。

「……ラニ・ソルト、一つ訊きたい」

食事を終えて食器を片付けながら、そつそつとドアへはわずかにぎくりとした。

先ほどの話を蒸し返されると思つたらしい。

「な、なに？」視線を逸らしている。

「ラグドラリヴがなぜ禁忌の地のか知つている？」

突然そう質問されたのはラニーの予想外のことだつたのだろう。話題としても全く関連性がないのだから当然だつて、それがおかしく思えるほど彼女は目に見えてうろたえた。訊いたコイのほうが驚いたくらいだ。

「な、何よ急に？」動搖を隠そつとして紅茶を口に運ぼうとする手がかすかに震えていた。

「いや、別に意味はないの。ただなんとなく聖書が目に付いたから。あの中でラグドラリヴのことが禁忌の地だと表記されているのに、前行つたときそんなふうには見えなくて」

取り繕うようにそう言いつつ、コイは彼女の様子を觀察していた。コイの言葉にラニーはほつとし、動搖はすぐ消えたようだが、彼女もこちらをうかがつてこいる。

何かの含みがあるのでないかと。

コイにはその反応だけで充分だつた。今の今までラグドラリヴのことは全て迷信、世迷言よまとことだと思っていたが、情報収集が主のラニーがああいう態度を取るということは、あそこには何かがあるのだ。伝説とは笑えないものが存在しているのだ。

「あそこはいいところだつたよ？ ほのぼのしていて牛でも飼つて牧場をやるのによそそう」

「そ、そり……アンタ凄いこと言つわねえ、禁忌の地で牧場なんて

なにかを恐れている。裏神官のラニーが。

「一体、何を。

「ともかく、あそこに興味を持つなんてことやめときなさい。いいことないわ」ひらひらと手を振つてラニーは会話を終わらせた。

逆効果だつたことを彼女は知るまい。

コイは今までの自分の考えが幼かつたことを知つた。ありえないと思うことにこそ真実があるのでないか？

子供でも信じないようなでたらめを並べ立てて、五皇国は何を考

……

えていいる？

ラグドラリヴ……あの場所にはなにがあるのだろう。
もしや本当に世界を滅ぼす何かが存在しているのか？
魔術、兵器、ミイラ、神、呪いの宝玉……そのいずれかが本当に
存在していたら。

それを解き放つことで本当に世界が終わつたら。

……ありえない。そう思いつつもユイはその考えを捨てるこ
とができなかつた。

世界が無くなるという考えは何故かとても魅力的に思えた。何も
期待していなかつたから、何もかも無くなつてしまつことはとても素晴らしいことなのではないか、と。

食器を洗いながら、ラグドラリヴの風景を思い起こす。

あの時は平和な場所に見えた。それはごく表面だつたのかもしれ
ない。見えないどこかで何かが行われているのかもしれない。

調べてみたら、眞実がわかるだろうか？

どう調べよう？

自分は情報収集には向いていない。他人に協力など頼む気はなか
つた。

後ろでテーブルを拭いているラニーにはもちろん駄目だ。へたをす
れば彼女から本部に洩れる。ラグドラリヴを調べているなどと知れ
たら、どんな処罰を受けるかわかつたものではない。最悪、処刑だ
ろう。

ユイがそんなことを考えているとは知らずに、ラニーが声をかけて
きた。

「ユイ、本部に連絡入れときなさいよ、まだアンタから報告してな
いでしょ？」言われてああ、と思い返す。そう言えば任務成功の報
告をしていない。昨夜の迎えの男とラニーから報告は入つていいだろ
うが、一応ユイ本人にも報告の義務があるので。

「わかった。しておく」

答えたとき、玄関の方からノックの音がした。今日は礼拝の日で

はないはずだ。敬虔なセリオス信徒なら、休日平日関係なく訪れて祈るので、誰かが来ても不思議はないが。

「アンタは奥に行つてちゃんと報告するのよ」先ほどとは一変して老女の声をつくり、ラニーは玄関に行つてしまつた。

報告は端末を使わなければならず、本人がやらなければ意味もない。機械オーナーには気の重い作業だ。

仕方なくといった様子で廊下を歩き、端末が置いてある地下へ向かう。ドアには暗証番号が必要な鍵がかかっている。これはどこへ行つても共通だ。死ぬ氣で暗記した19桁の数字を入力する。個人個人にあてがわれている番号でこれが入力されると誰がどこにいるかそれで皇都本部に知れる。ようは首輪だ。強力な力を持つ裏神官を野放しにしないためのもの。

「……面倒くさい……」

呴きながら中に入る。コイが足を踏み入れた瞬間に室内に明かりがともる。先ほどどの暗証番号と人の体温に反応する仕組みらしいが、機械オーナーに理解することは至難の技だ。

魔法的な技術も絡んでいると聞いたことがあるけれど、魔術師でも能力者でもないコイにはやつぱり理解できない。少し奥に入つたところに仰々しい機械がどつしりとかまえている。あちこちにパネルやボタンがついていて、一見何の機械か分らないようになつている。一定の順序を踏まないと起動すらしない。どこか一箇所を押せば起動するような市販品の機械とは違う。

機密情報をやりとりするわけだから当然と言えば当然なのだろうが、このとつつきずらさはどうにかならないのか、と触るたびにコイは思う。

「ええと……まずは、ここからで……」

こここのパネルにさわり、あっちのボタンを押し、隙間から指を入れて外からは見えないスイッチを入れて 起動させるだけで順序が7ついる。

それからさらにドアを開けるときに入力した19桁の数字を入れ

て、ようやく起動できるのだ、やり終わるまでに『ヨイはいつもゼ』
かを間違えてしまう。

間違えたらもう一度最初からなのでげんなりする。間違えたこと
も本部には伝わるため、大概繋がったときには怒られる羽田になる
のだ。

「何年『神官』をやっているんだ? ヨイ・ヒガ。いい加減に端末の
使い方を覚える」

今回も本部のオペレーターに言われてしまった。反論できないの
でさっさと済ませようと手短に報告する。

「目標の『排除』は完了。なお、目標以外の『削除』は……」

淡々と昨夜自分が行つたことを述べていく。そういえばあの家の
息子はどうしただろう。

命じられた任務は両親と祖父の『排除』だったから、とりたてて
気にしていなかつたがひょっとして一緒に『排除』したほうがよか
つたのだろうか。

なんなら今からちょっと行って後を追わせてやろうか。残る
よりはシアワセかもしれない。人の命などなんとも思っていないよ
うなことを考えながら、言葉を続ける。

「『苦労だつた』報告が終わり、あとはいつものセリフ「追つて次
の指令があるまで現状で待機」が来て終わりだらうと予想していた。
「ヨイ・ヒガ。次の指令だ」しかし、休みなく次の任務があるとい
う。

「次? ……なんです」

珍しい。いつもなら一日から一週間は待機時間が『えられるのに。
別段動くことに不都合はない。ないがムツとする。いいように使
われているのが分るのだ。

「今すぐカンジユーラへ向かい、そこで次の任務まで待機せよ」カ
ンジユーラ……隣町だ。

「? いますぐ、ですか?」

「そうだ。この通信を終えたらすぐに向かえ、とのことだ。これは

厳命である「腑**ふ**に落ちない指令だ。

待機ならここでも充分だらう、わざわざ隣町で休暇をとりぬけならない理由とは何なのだらう？

「わかりました」

了解を伝え、通信を切る。それ以上の情報など訊いても答えてはもらえない。

聞く必要はない、といわれて終わりだ。

道具に答える義務などないということなのだらう。使われる身だ、仕方ない。

指令に従つて隣町に移動しようとコイは地下駅を出た。出たところでラーニにばつたりでくわした。

「あ、済んだの？」訊かれてうなづく。

「隣町に移動する。世話になつた」

「へ？」ラーニはひびく驚いたようだ。ただコイが移動するということだけで。

「？」指令があつた。おかしい？

「あ、いえ、おかしくないけど……」唇を尖らせてくる。

「急だなあと思って」何かが不満らしい。彼女が何を不満に思つているのかコイにはさっぱり分らなかつた。

「なにか都合が悪いの？」

ふくれつづらの彼女にそう問う。

「うー、わるくはないけど……」歯にものがさまつてこいるかのような物言つた。

「なに？」

無表情でラーニにつけめより、さつきり答えると雰囲気が促している。オーラ

「……アンタに携帯のレクチャーとあと彼氏のタイプを訊こうと思つたのよつ！」つめよられてラーニは悲鳴のよつな声で答えた。コイの指先が傘の柄を握つていたからだ。

「かれし？」

目が点になるコイである。そんなもの訊いてビビつするのだ？

「何故？」

「個人的興味……」消え入りそうな声でラニーが言いつ。目線は落ち着きなくユイの手元を（つまりは傘の柄を握る手を）見ていた。ユイに本気で抜く気はないが、充分すぎるほどの齧しになつていてるようだ。

「ふうん……『じんてききょうつみ』ねえ」

納得したわけではないが、指令を受けた身だ、ぼんやりしていろいろない。

「まあいいや、今度聞かせてもらつから」

「こ、こんど?」「どもるラニー。」

「そう、今度。じゃあまたね」

笑いかけてユイは身を翻した。ラニーには肉食獣の笑みに見えたのかもしれない。

笑顔を返そうとしてひきつっていた。

かまわずにまず昨夜泊まった部屋へ向かう。

任務に向かう前に自分の荷物を置きっぱなしにしていた。ベッドのわきに放り投げておいたクマのついた（これも上からの配給品。どうやら上はユイにはクマグッズと決めているようだ）ウロストポーチをつけて、それから裏口へ向かう。

ラニーはぶつぶつ何かを呟きながらついてきた。耳を澄まさなくても「武器に手をかけることないじゃないのよ」とか言つているのがわかる。さつきまで自分のことを可愛いとほめていたのに完全にふくれてしまった。

同じ裏神官なのに、自分はそんなに怖いだらうかとユイは内心首をかしげた。確かにユイとラニーとではユイのほうが圧倒的に強いだろう。受けた訓練量が違うし、経験も遙かに違う。ラニーのほうが2歳ほど年上だが、実戦経験量はユイのほうが遙かに上だ。

しかしそれは単に向き不向きというのがあるだけの話で、ラニーが弱いというわけではない。一般人から見たら充分ラニーだって強い部類だ。ただ、上には上がいるということ。

「コイにもまだ勝てない相手がいるよつに。」

「氣をつけてね」なんだかんだいいつつも、ラーメンは裏口まで見送りに出てくれた。しわがれた老女の声でまたねと言ひ、コイに紙袋を渡した。

一見すると、なにかお菓子でも入つていそうな質素な紙袋だが、本部からの給付金 よつは給料が入つてゐる。一定の任務をこなす度にこつやつて支払われるのだ。

普通は現金でなく口座に自動的に振り込まれるのが一般的だが、コイはいつも半額を現金でもらつことを希望している。銀行などに行くヒマがないからだ。安全に引き落とすことができるといつもいられるとも限らない。

内乱が続き、銀行などがまともに機能していない地域にいくことだつてあるのだ。引き落とすことができずに裏神官が飢え死になどしたら笑えない。現金は必要だ。こんな仕事をしているといつ何が起きてても不思議はないから。

……自身の死も。

無造作に紙袋をウロストポーチに詰め込んで教会を後にした。「あとでメールするからちゃんと見なさいよ?」とのラーメンのセセセキは悪いがかなう事はないだろう。

その時はそう思つていた。

自分が機械オンチだから。

ただそれだけのつもりで、そう思つていた。

手を振るラーメンの氣配を感じながら、振り返りもしないで教会を後にした。

移動手段は特に指定されていないので、じく普通にローカルエリア線を使って隣町カンジューラへ向かう。

切符を買って改札を抜け、適当な席を見つけて座った。平日の車内はすいている。通勤や通学に速度の遅いローカルエリア線を使う者はあまりいないのだろう。

ただ、料金は安いので急ぎの用がないときはこれを使う人は多い。ユイも今は特に急ぎではないだろうと見越してハイエリア線でなくこちらを使った。

六芒星がついてはいても、よく知らない人から見れば、彼女の見た目はどこかの学校の女生徒で通るだろう。マントをつけているので魔術校の生徒とも見える。ほぼ寮生のため、ほとんど外に出てこない魔術校の生徒と勘違いして、物珍しげに眺めてくるような失礼な者もいたが、声をかけてくるほどでもなく平穩に隣町に着いた。

着いたはいいがこれからどうしようとエリア前で考え込む。ここには裏神官の滞在している教会はないので、滞在する場所は自分で調達しなければならない。

幸い、給金が入ったばかりなのでどこに行こうと余裕はあるが……カンジューラに行くのは初めてなのでどこになにがあつてどの程度の施設で値段はどのくらいなのか、目安がわからない。

エリア前にはたいてい街や市の案内魔術板があり、訊きたいことがあればたいてい答えてくれるのだが、この案内板は壊れていた。何を訊いても「イラツシャイマセ」を繰り返すばかり。人に尋ねるしかないが気は進まない。以前家出ではないかと疑われたことがあるからだ。

平日。

しかも制服姿。

そのうえ女の子一人。

あまつさえ少し大きめなウェストポーチをつけて宿泊施設の有無を訊く。

その軽装な格好から旅行などの様子でもなく、保護者もついていないようだ。

おまけに曇つてもいいし、天気予報でも雨が降るなどとは言つていないので傘を持つて。

どう見ても変である。

まともな大人なら保護しようとするだらう。

これだからこの武器（クマさん傘）嫌なんだ、とコイは肩を落とした。

晴れている中で傘を持ち歩くことがどれだけ違和感があるものなのか、上層部の連中は考えたことがないに違いない。クマ傘自体は可愛らしいからそれほど嫌いではないけれど、どうにも普段持ち歩くにはちと変だ。

せめて折りたたみ風ならまだ「雨が降つたときのために」と言い訳もできるだらうに。

「……ここでこうしていても仕方ないよな」

つぶやいてコイは歩き出す。人に訊くのはやめにした。補導されるのはまっぴら御免だ。

裏神官ともあろうものが一般の人間に補導された、などと笑い話にもならない。

下手をすれば再訓練だ。それも御免である。あの厳しい訓練をもう一度やれとこないうら補導しようとしてくる人間を切り捨てて逃げる。

始末書や査問会のほうがずっとましだ。

歩いているうちにどこかで案内板があるだらうと見越して、適当な方向に向かつ。

指令が「どこのホテルで待機」というものならもう少し楽だつたなと今更思い返した。

それにしても、今までにない妙な指令だった。何かをしろという

わけでもなく、ただ移動しろなどとは。

そのうち任務が言い渡されるのかもしねりないが、それならば滞在先が指定されるはず。

連絡先も分らない所で待機など異例である。一応携帯もあるし、定期連絡は入れるつもりだが、ここでは端末を探すのも骨だ。

自分で端末は持ち歩いてはいな。過去何度か壊したことがあり、それ以来上層部は彼女に端末を持たせようとはしていない。やたら高価な端末を壊されるよりは懸命な判断ではあるが、どちらにせよ機械オンチのユイには不便にさほどの差はなかつた。

携帯でいろいろ検索をかけられるのは知っているけれど、機械オニチには荷が重い。

結局案内板を探して歩き回るのが彼女にとって一番無難なのだった。

歩き回っているとやがて観光案内所と看板が出ているところを見つけた。これ幸いと中に入つてみる。

小さな町だが観光できるところはそれなりにあるらしく、中は観光地のみやげ物が並んでいた。休憩もできるようにスペースがとられていて休めるようになつていて。

宿泊施設を探す前に、少し見ていいつかといつ気になつた。ヒマだし、やることもないでの、時間つぶしにはいい。

ジャムらしい瓶が置いてある棚を覗き込んでみる。この町の名産はポポロという果実のようで、瓶にはポポロジャムとあつた。りんごのような梨のような形の黄色い果実の絵がラベルに描かれている。ジャムも黄色い。なんとなくすっぱそうな印象を受けた。

「試食してみますか？」売り子に声をかけられ、首を横に振る。ジャムなど買っても持ち歩くのが億劫おっくうだ。たいがい大概一人で行動する上に、ひとつ所に留まることは少ないのでから、全部食べ終わる前に傷んでしまう。食べ物など日持ちすれば味は二の次だ。

ひどく味気ないことを考えていると知らずにユイはみやげ物を見ていぐ。ほとんどが食べ物だ。乾物なら買ってもいいかなとぼんやり

り考えたが結局何も買わなかつた。

買い物にあまり執着はしていない。同じ年頃の同僚などはふところが暖かくなると、嬉々として買い物に出かける。

ところがユイは違う。別段欲しいものもなく、やりたいこともないでの金の使い道もない。服なども動くのに邪魔にならなければそれでいいという観念の少女なので、金の使い道は任務時の宿泊先や飲食、交通費くらいだ。

任務での出費は経費で落ちるような代物ではないので、その分給与は高くなる。

高くなるとはいって、使い道がないと楽しみもない。同世代の少女がはしゃぎ、楽しそうにショッピングをしているのを見かけるたび、なぜあんな風に楽しめるのかユイには理解できなかつた。

自販機でお茶を買い、休憩スペースに座る。平日の午前中に何故学生が?と奇異の視線を売り子などから感じた。いろいろ想像しているのか、こちらを見ながらヒソヒソ話している者もいる。

……そのうちどうとかへ通報されそうだ。長居しないほうがよさそうである。

平日に未成年が行動するのはいろいろと厄介だと痛感した。

そうかと言つて大人になるのは嫌だ。

この国の大人に限らず、あちこちでいわゆる『立派な大人』であるらしい要人を見てきたが、尊敬出来るような者は一人もいなかつた。こんな人間を守る価値があるのかと感じるような者ばかりだった。

大体にして、未成年に裏神官などをやらせるような大人がいると、いふことからして世の中が腐っている証拠だろ。自分たちの手は汚さず、年端のいかない少年や少女にやらせる。そのくせ富を蓄えることはいとわず、どんな手でも使う。

政敵を『排除』させるなど珍しくない。昨夜ユイがしたように。

彼女は世界に絶望していた。特定の誰かが憎いとか、恨んでいるとかではなく、ただ世界が嫌いだつた。とても醜いものだと認識し

ている。

シルメリアで薬もなくやせ細つて死んでいく幼児を見た。そこの高官は毎晩、高級酒場で豪遊していた。高価な酒を飲み高価な食事を食べ、贅沢の限りを尽くしていた。死んでゆく子供など知らぬと言い切つて。

イグザイオでゲリラ相手に戦つたことがある。ゲリラとは名ばかりの、実際は貧しい家族を守るために戦っていた農民で、武器を持ったこともないような相手はいともあつてなく『排除』されていた。例をあげればきりがない。どこにでも腐った人間はいる。ゴキブリと一緒にだ。いや、叩く者もいないからより性質が悪いかもしない。そういう人間はたいてい『権力』を持つている。そして自分の身を守ることに恐ろしく長けているのだ。

この世界には醜いものしかない。裏神官の彼女はそう思つてゐる。腐りきつた人間が導く国など綺麗であるわけがないのだ。そこに住む人間もやがて腐り、壊れていくのだろう。自分のように。

ちっぽけな世界だ。ちっぽけで醜いことこの上ない世界だ。どうしてこんな世界でみな生きてゆこうとするのだろう? 自分も生きているのだろう。

大切な何かがあるわけでもないのに。全部が醜く暗いと知つているのに。

馬鹿らしい。生きていて、何か意味があるのか。

手にしたお茶はじんわりと温かいがコイの心までは届かない。

……そして、少女の絶望を深める出来事は次の瞬間起つた。

休憩スペースに置かれた通信画面に速報が流れたのだ。文字が流れ。少しして画面が切り替わり、速報ニュースになつた。

あわただしく司会が急を告げる。

それを見てユイは画面に釘付けになつた。

司会者が告げてゐる場所。告げてゐる名前。

「本日9時33分、ラクリマ・ラニ市セリオス教会が何者かによ

つて襲撃されました。

礼拝日ではなかつたため、一般市民に犠牲者はありませんでしたが、教会の関係者が一人犠牲になつた模様です。詳しいことが分り次第、順次お伝えしていきます……

放送は続いていたがそのほかはどうでもいい。

ラクリマ・ラニ市。

セリオス教会。

それは隣街だ。先ほどまでユイがいた街だ。つい一時間前までユイが滞在していた教会だ。

同僚のラニ・ソルトが情報収集の足がかりにしていた教会だ。

彼女が滞在している間は他に教会の人間はいなくなる。一時的に

『教義を広める』との名目で他国や遠方の町へ出張させられる。

だから今あの教会にいる『関係者』は……彼女一人だ。^{ラニ}

誰かが犠牲になつたのならそれは間違いない彼女だ。

他に人がいないのだから、結論はそれしかない。

そして不可解な指令の謎も解けた。

今すぐに移動しようと厳命したのはユイにこの襲撃を避けさせるためだろう。

上層部は襲撃があるのを知つていたに違いない。そうでなければあの指令はおかしい。

知つていて、なおかつそれを『阻む』のではなく『避ける』ように指示したのは何故だ？

納得がいかない。阻むことのほうが簡単のはずだ。ユイもラニも裏神官。二人もいるなら普通の兵士一個中隊が来ても立ち向かえるくらいの技量は余裕である。そこらのグリラやテロリストでも一人ならどうとでもできたはずだ。

それなのに上層部はユイを教会から退けた。

結果ラニが犠牲になつた。調べるまでもなく唯一の犠牲者は彼女だろう。

上層部はラニを見捨てたのだ。ユイにはそこから離れると厳命し

ておいて、ラニーは何も言わなかつた。そこには向うかの思惑が絡んでいるのは間違いない。

なんにせよラニーは上層部に殺されたよつなものだ。彼女を守る意思が無かつたのだから。

コイよりよつほど忠誠心のある彼女がどうして見捨てられたのだ？ まがりなりにも裏神官の彼女が何故やすやすと殺されたのだ？ 上層部はいつたい何を考えている？

「……所詮、捨て駒か……？」

低くつぶやく。ラニーにはもう会えない。

それほど親しい仲ではなかつた。ラニーは面倒見が良く、誰に対してもあんな感じだつたから、特に感慨はない。ケイ・カゲツ関連のことに関する話題をあれこれ思つていた。

それでも見捨てられるよつな少女ではなかつたはずだ。見捨てられるならコイのほうこそふさわしことを思つのに、現実に見捨てられたのはラニーだつた。

納得がいかない。疑問が残る。

どこに問いただしても答えなど得られないだらうが、それでも解ることはある。セイリオスはいつもたやすくラニーを捨てたということだ。

裏を返せば、それはコイもこいつなる可能性があるところだと。

「やうか……そんなにまで腐つてゐるんだな」

空の紙コップを握りつぶし、コイはしおり出すよつに呻いた。

自分はいつか死ぬだらうと思つてゐる。くだらない理由で死ぬだらうと感じていた。

どうせ死ぬのなら。

「……ラグドラリヴ……」

コイは決心した。

「世界など滅んでしまえばいい」

壱章・発端……始まり・5（後書き）

ついで壱章が終りました。
彼女の絶望は深く、大きい。そしてその果てに待つものはない。続き
ます。

武章・破滅の地……厄災の間・1

武章・破滅の地……厄災の間

ラグドラリヴ　そこは五皇国のほぼ中心に位置している。どの国からも行けるのにどの国からも入ることは許されない。そこは禁忌の地だからだ。
破滅の力が眠っているからだ。

『眠るそれに触れてはならぬ。
起こすことなどまかりならぬ。
それが目覚めてしまえば世界は滅ぶ。
何人たりとも彼の地に近付くことならぬ。……』

五皇国の住民は子供のときからそういう言い聞かされて育つ。
どこの国でも同じだ。ラグドラリヴに関する『禁忌の地』という認識は同じだつた。

眠る『何か』の言い伝えは各國でそれぞれ違つとこゝのと、それが破滅を呼ぶということに変わりはない。

古くからの言い伝えなどあやしいものだ。どれが正しいという保証もない。

だが、ラグドラリヴには何かが確かに存在している。一般人には知らされないような何かがあるのだ。
魔術か、兵器か、それとも未知のものか？
いずれにせよ、ろくなものではあるまい。

国が隠すようなことなど、知つても得にはならないようなことばかりだ。國の中枢部にいたため、そのことをよく理解していたが、行動に迷いはなかつた。

世界を滅ぼすと決めた。こんな腐った世界など、一から見切りをつけてやる。

もし何もなくとも、五皇國に一泡吹かせるくらいはできるだろう。その後おそらく自分は消されてしまうだろうが、それならそれでいい。こんな醜い世界で、長生きなどしたくない。なにひとつ希望などないのだから。

『それに触れてはいけない』

眠るもののが何なのか、それすらもうどうでもいい。

これで世界が終わるなら、破滅のスイッチがそこにあるなら。

……押してやる。

……問題はどうやってラグドラリヴへ入るか。

コイ・ヒガは地図を手に悩んでいた。セイリオスへの反乱で、ラグドラリヴに眠る『破滅』を起こすことに決めたが、潜入する手段でまずひっかかる。国境には厳重な警備が敷かれているし、交通手段などもちろん整備されてはいない。以前に行つたときは任務だつたから時間制限付きで送り迎えがあった。

今回それを期待することは当然できないので、自力潜入するしかない。とにかく次の定期報告までにラグドラリヴに潜入しないと、機会はなくなるのだ。新しい任務が言い渡される前、そしてまだ本部に自分の離反が知れる前に、迅速に行動しなくては。

ウエストポーチに常備している国境付近の地図を睨みつける。警備の状況なども書かれている裏神官専用の地図だ。警備は詳しく書かれているが、観光目的には使えず、ホテルなどで掲載されているのは国営のものだけである。

これに観光ホテルなども載っているならいつも案内板を探すこともないのだが、そううまくいかない。これ一つがすでに國家機密の塊かたまりである。

あまり余計なことを書き加えるわけにはいかないのだ。もつとも、彼女のような少女がそんなものを持っているとは誰も思わず、通行人は気にも留めていなかつた。

旅行なのか家出なのかと眉をひそめている者は多少いたようだが、ユイは気にしていない。しばらく眺めて、警備に数箇所の穴を見つけた。無論、普通の人間なら全く気づかないほど穴である。もし気付いても、決して実行する気にはならないし、まずできないだろう。

身体強化をされているユイだからぐれる穴である。

なんだか見直し、やれそっと見切りをつけ、ユイは地図をしまった。

まずやることは才前までの交通手段の確保。行くまではさほど時間はかかるない。

この町からなら半日もかからず着けるだろう。あとは一日分の水と食料だ。世界が終わるスイッチを押すまでは、ちゃんと考えなければならない。たどりつく前に阻まれてもいけない。行動は慎重に、かつ敏速に。

ユイは何気なく歩きながら、小さな観光ホテルの脇までたどりつく。そこから路地裏に入り、リュックから携帯を出す。人目はない。2mほど跳躍して携帯を壁のでっぱりの上に置いた。ここなら人目にはつかないから誰かに拾われるということもないだろう。そしてこれで、もし携帯からユイの居場所を探せばこのホテルにいる、とじまかせる。機械オンチな彼女は機械にあまり期待はしていないが、ちょっととの時間稼ぎくらいにはなるはずだ。

携帯を置き去りにし、次はハイエリア線に向かう。急ぎなので朝ののようなローカルエリア線は使わない。こうなつてみると給金が出たばかりなのはタイミングが良かつた。

気にせず使うことができる、そう思つてユイは苦笑した。

世界を滅ぼすための交通費を五皇国の一ツ、セイリオスが出したとこう皮肉に気がついて。

一生懸命に自國を守るために鍛えた裏神官が離^{ハシ}反し、世界を滅ぼそとしていると氣がついたら、上層部はさぞ慌てるだろ？

適当な座席に乗り込んでそんなことを考えたら、少しおかしくなつて小さく笑つてしまつた。

向かいの席にいた中年の男がこちらを見ていぶかしげな表情をしていたのも、なんだかおかしかつた。おそらくは学校をさぼつてどこかへ遊びに行こうとしている素行不良の少女とでも思われているのだ。

違うよ、と言つてやつたらどうするだろ？

わたしはこれから世界を滅ぼしに行くんだよ。

……正氣扱いはされないなあと、コイはうつむいて苦笑した。たしかに正氣とは思えないようなことをしようとしている。

存在すら怪しい『破滅』を田覚めさせるために行動するなど、普通の人間なら考えまい。ましてそのために命をかけるなど、どう考えてもおかしい。

行けばまず確實に自分は死ぬのだ。『破滅』があるなしに関わらず、禁忌の地に入り込んだ罪は重い。たとえ裏神官であろうと消されるのは間違いない。

自身の死を目前にしても彼女の心はそよとも揺らがなかつた。さんざん他人を手にかけておいて、今更自身の死が恐ろしいなどとう神経はないのだ。

これで全てのじがらみから開放されると想つと、こゝで氣が楽になつた。

どんな形であれ、自身が選んだ終焉が待つてゐる。

ラグドラリヴで何もかも終わるのだ。

ゆるやかに列車が発車する。タベの雨が嘘のよつて青く晴れた空が見えた。

雲はわずかで、晴天といつてもいい天氣だ。

世界が終わる日とは思えないが、いざ滅亡する日とこゝのはこんなものなのかもしない。

何の変哲もない日が世界の終わる日。

誰も予想しない終わりの日。

普通の人は洗濯日和と思うだろう。そんな日だ。

窓から入つてくる陽射しがやわらかく暖かい。「うつかりすると眠つてしまいそうだ。

コツンと窓に頭をもたれて、コイは外を眺める。スピードにのつて景色はめまぐるしく流れていぐが、彼女の目には支障なく見えた。町並みは整つていて、歴史的な価値もあるのだろうが、彼女には美しいと思えなかつた。

ぐんぐんと町は遠ざかり、次の町、また次の街を通り過ぎてゆく。灰色の世界。どれだけ花に彩られようと、華やかに飾られようと彼女には全て無意味だ。

裏側で生きてきたコイに、表の美しさはどうしてもまやかしに見えてしまつ。

さほど楽しくもない列車の旅は一時間ほどで終わった。
ついたのはオーパスというちょっとした規模の街である。国境に近いため交通の便が良いところだ。

国境まではまだもう少し距離がある。ここいらで食料などを買い込んでおこうと、目に付いた店に入った。全国的に展開しているチーン店のひとつだ。弁当などが多彩で、コイも何度か利用したことがある。どうせ長い間食料を持ち歩くわけでもないので、保存のことは考えなくとも良いだらう。

手軽に片手で食べられるものがいいなとケースを覗き込む。

スマートサーモンとハム、チーズのサンドイッチが目とまり、それにした。あとはお茶と果汁を一本ずつ。

一応念のために、保存に適していて栄養価も高いチョコレートを一つ買っておく。どれもクマウエストポーチに詰め込んだ。準備はこんなものだらう。忍び込むのだから身軽なほうがいい。武器はいつもの傘と自分。

それで充分。

買い物を済ませ、店を出るのに要した時間は10分ほどだった。

混んでいなければ5分もかかっていなかつただう。年頃の娘にしてはすごいぶんと決断力があるが、味気ないことこの上ない。

とうのコイ本人はなんとも思つておらず、さつさと店を後にした。のんびりしてては、時間が過ぎるだけ無駄になる。

前を見据えて歩き出す。彼女の先にあるのは希望ではなく終焉への切望だ。

国を守るべき者が滅亡を望むなど笑い話としても質が悪い。なお悪いことに彼女は本気だ。現実の中で滅亡を引き起こそうとしている。

あるかどつかも分からぬ『破滅』に自分の全てをかけて。

……愚かなことだ。彼女自身も馬鹿なことをしていふと感じてはいる。

それでも、止める気はない。戻る気もない。

歩みには何の迷いもなく、惑いもなく、目的に向かつて進むだけだ。

オーネスの街中で案内板を見つけ、国境近くまでの移動方法を探す。幸い、交通の便はいい。方法はいくつもあつたが、やはりラグドライヴに入るまでは行かない。

この際近くまで行くことができれば充分だ。そこからは自力で国境を突破する。

エリア間をつなぐバスに乗る。これが一番早い移動手段なのだ。30分ほどで国境近くのエリアについた。他の乗客に混じつてバスを降りる。

一旦エリア内に入つてから、別の出入口から出る。あとは国境に向かうだけだ。

エリアが近い場所は土産物の店が多くつたが、歩いていくうちに店は少なくなり、ごく普通の民家が続くよくなつてきた。

平日のためにあまり人の姿はない。好都合ではあった。わき田もふらずに歩くコイの様子はどう見てもおかしいだろう。思いつめた

様にも見えるので、下手をしたら自殺でもするのではと心配されそうだ。

まあ、これから彼女がすることは、間接的な自殺でもあるので間違いではない。

世界を道連れにしたえらく迷惑な自殺なのだが、成功するかどうかも分からぬ不確実なものだ。彼女も成功するとは考えていらない。五皇國に一泡吹かせてやりたいだけとも言える。

セトラの後継者などと黙つてくる、上層部の勝手な者たちがこの自分の裏切りを知つたら、少しはあわてるだろうか？それを考へたら愉快だ。

捨て駒のように自分たちを使うのに、その捨て駒に噛み付かれる事など考えもしないのか。噛み付いてやるのではないか。喉首を噛みちぎつてやる。

捨て駒にも意地があるのだと思い知るがいい。

そんなことを考えて歩いていたら、すぐに目的地に着いた。国境近くの森である。ここを抜けると隣国シルメリアにたどりつき、森を抜け切る前に脇に逸れるとラグドラリヴだ。

方向さえ間違えなければ、ラグドラリヴに入ることは可能だろう。森の中には定期的に国境警備が巡回しているが、こちらは一人で身軽。まして森の中だ、隠れようはいくらでもある。その上、巡回の間隔、警備状況なども分かつているのだから抜けるのは容易だ。コイは何の迷いなく森に踏み込んだ。山歩きには到底向いていない格好ではあるが、彼女にとつて不都合はない。

歩いているうちに一度国境警備に出くわしたが、すぐに伏せたために気づかれることはなかつた。

裏神官である彼女には国境警備など倒すのは容易だつたが、この時点で体力を消費するのは良くないと判断し、回避を選んだ。ラグドラリヴで何があるか分からぬのだから、無駄に体力を使うのは良くない。山歩きというのは意外と神経を使って疲れるものだし、用心するに越したことはない。

やうにひして、やがて森の中ほどに達したころ、一時休憩をとることにした。

背の高い木に遮られて日は高とは分からぬいが、昼はとうに過ぎてこらだらう。腹具合もとう告げてゐる。

国境警備に見つかると厄介なので、風上を選び、丈夫そうな木に登つた。視界の通らないそこそこ高くまで登り、腰掛けて傘を脇にひっかけ、ウエストポーチからお茶とサンドイッチを取り出し食べる。時間がたつてゐるのと生ぬるくてあまりおいしくないが、文句も言わず平らげた。

お茶を飲み乾いた喉を潤し、一息入れる。ここからまたしばらく歩くのだ。彼女の足なら、日が暮れる前にはラグドラリヴに入ることができるだらう。

問題はそこからだ。一晩にラグドラリヴと言つても古い。ビニヒ何があるのかさえ分からぬいのだ。『破滅』がどこで眠つているのかも分からぬ。手当たり次第探すことになるのだろうが、骨が折れるのは確かだ。

厄介だ。調べよつてもいいではないようもないし、そもそも機密情報だ、ただでさえ頭を使うのが苦手なコイにはラグドラリヴの詳細を調べることなど至難の業である。こんな調子では、セイリオスの追つ手がかかる前に問題の『破滅』までたどりつけるかどうかも怪しい。

せめてどの辺りを探せばいいか日算でもあればいい。大体この辺という目安があれば、大分体力の配分が違つてくる。帰ることは考えていない。一旦ラグドラリヴに入つてしまえばまともな体で出でくることはありえないだらう。

世界ごとなくなるか、あるいは死ぬのは自分だけか……そのどちらかだ。

どちらでもいい。彼女はあつさりと割り切つて木から降りようとし、思いとじまつた。

人の気配を感じる。とくに気配を消そうともしていないので、山

菜でも採りに来た一般人があるのは密入国を図った者か。さつき巡回したばかりなので、国境警備の者ではないことは確実だ。

逃亡犯という可能性もある。まともな人間ならこんな森の中を通りはせずにちゃんと整備された道を通るはず。

ユイは油断なく周囲をうかがつた。自身の気配はこの森に入つたときからずっと消している。彼女の姿は森の梢じょうが隠してくれているので、むこうからこちらは分かるまい。

一体何者だ？ ガサガサと木を搔き分ける音がする。森の中を歩くことに慣れていない様子がうかがえた。地元の人間が山菜取りに来たというわけではなさそうだ。

梢の隙間をすかして見ていると、やがて姿が見えてきた。まず見えたのが、森の縁にまぎれない灰色の髪。

「……？！」

思わず呻きそうになつたのをなんとか噛み殺す。こんなところにいるはずのない人間だ。

そしてユイの会いたくない人間ランキングTOP3確実な男である。

ケイ・カゲツ イグザイオの軍人が何故こんなところにいる？！

武章・破滅の地……厄災の闇・1（後書き）

いよいよ第一回です。今しばらくお付き合ってください。

ケイは樹上のユイに気づきもしていないようで、森の中を歩くのに四苦八苦している。不慣れなのが丸分かりだ。大体、部屋で機械をいじるのが仕事のケイなのに何故セイリオスの森の中を歩いているのだろう。

もう追っ手がかかったのだろうか？ それにしてもケイが来るとうのはおかしい。

イグザイオの軍人、しかも武闘派とは対極にあるようなひ弱な彼が追つてきて、武闘派裏神官のユイを止められるわけがない。

かと言つて何らかの任務で彼が護衛もなしにこんな森の中を歩くだろうか？

現に今だつて木に引っかかるて転びそうになつてゐる。山歩き、森歩きなどしたことがないのだろう。

機械の虫なのだからありえない話ではないが、だとしたらおさらここにいる理由が分からぬ。

一体何の用があつて他国の軍人であるケイがセイリオスの森の中を歩いているのだ？

それも、たつた一人で。

……ユイはしばらくケイの様子を見ていたが、彼はこちらに全く気づいておらず、ユイがいる木の下にたどりついて息をついている。いつも格好だ。肩に六芒星^{ふつりあ}がついたひざ下まである上着、六芒星のイヤリング、メガネ。珍しく不釣合いな大きいリュックを背負つている。それが重いのか彼は息を切らしてゐた。腰をおろしてふところから端末を出し、起動して覗き込んでゐる。

真下のため、端末に何が映つてゐるのかまではさすがに見えない位置だが、これを利用しない手はあるまい。一応もう一度周囲をうかがつて見たが、やはりケイは一人だ。

お供も警護も連れていらない。これはチャンスだ。

彼と彼の持つ端末ならラグドラリヴの情報も手に入る可能性がある。

警備のついていないケイなど彼女にとつては赤子も同然。すぐさま捕まえる決心はついた。

ひつかけておいた傘を手に取り、迷いなく飛び降りる。

梢の揺れるザザザという音の後、彼女の姿はケイの目前にあつた。

「ツ？！」

さすがのケイも驚いたらしい。あわてて立ち上がるうとして、瞬時にユイが突きつけた傘に阻まれる。

「久しぶりだな、ケイ・カゲツ。一週間ぶりくらいか」

無表情にそう言つ彼女に、ケイは苦いものをまとめて噛んだような顔になつた。

「もう来たのか……」

しぶり出すように呻く。ユイには意味が分からなかつた。のび元に突きつけた傘は外さないで訊いてみる。

「もう？何のことだ」

言つとケイは眉を寄せた。

「……俺を追つてきたんだろ？」

「は？」

ユイも眉を寄せた。二人揃つていぶかしげな表情で向かい合つている。

「何故わたしがお前を追わなければならんのだ？」

ケイの言つている意味が分からぬ。

「何故つて……待て、本当に俺を追つてきたんじゃないのか？」

ケイも彼女の言つていることが分からぬらしい。

互いに互いの言つていることがかち合つていないと気がつくまで、そんなに時間はかからなかつた。

「俺を追つてきたんじゃないなら……なんでここにいるんだよ、セ

イリオスのエリート神官が」

「それはこっちのセリフだ、イグザイオのエリート軍人。なんでこ

んなところにいる。」
「セイリオスだぞ」

お互いの会話がかみ合つていないと分かつても、会話が成り立つかどうかはまた別だ。

「どうやらケイは事情を話したくないらしい、言葉を濁す。その態度から何かの任務を受けているのではと予想できたが、それとユイの都合とはまたまた別の話だ。

彼女に彼を解放する気はない。」
「自分で自分に見つかったのが運のつきだと思ってあきらめてもらう。

「まあいい。お前の都合などわたしには関係ない」

言い捨てて、傘で彼の喉を軽くつつく。

「協力してもううそ、ケイ・カゲツ」

「……何にだ」

少しのけぞつてなんとか傘の先から逃れようとしながらもケイは問い合わせ返してきた。

「ラグドラリヴに入るため」「

逃さずユイはそう答える。

「ラグド……ラリヴ？ 入つてどうする」

警戒しているのだろう、彼の声は低い。

「世界を、滅ぼす」

淡々と彼女が告げた言葉に、彼は目を見張り、それから彼女をまじまじと見返した。

「……お前、正氣か」

当然の質問だ。ユイがケイの立場だったら同じことを聞いただしただろう。

「さあな。おそらく正氣ではないんだろう。だが、わたしは本気だ」
キッパリと言い切る。ケイがどこかに連絡を取ろうとするそぶりでも見せれば、即座に殴るつもりもある。とりあえず昏倒させて、などと物騒なことを考えていると、予想外の反応が帰ってきた。彼は真顔で訊いて来たのだ。

「本当に、本気か」

問い合わせといふよりは確認のような「ユアンスだ。彼女のその意
思が確実なもののがどうかを確かめるように。」

「本気だ。そうでなくてなんでこんなところにいる」

とくに意識もせずそう返したが、ケイは腕を組み考えはじめた。
つきつけられている傘など、もつ氣にもしていない様だ。

「おい？」

この態度は一体どういう意味なのか測りかねて、コイもちょっとと
戸惑った。なにせ重要な情報源だ。少し不審だからと聞いて、いき
なり切り捨てるわけにもいかない。

コイではケイの端末は扱えない。端末だけ奪うとこう手は意味が
ない。ましてラグドラリヴでどんなことが起きるかも分からぬの
だ。ケイの頭脳はあつたほうがいい。

いけ好かない男だが、頭だけは本当にいいのだ。本心ではあまり
頼りたくないけれど、好き嫌いを貫いてラグドラリヴ内で遭難する
のはさすがにあほらしい。

「……馬鹿だな、コイ・ヒガ」

突然そう言われ、傘で突き殺したくなつた。

「殺してほしいのか」

半眼で睨みつける。この手にあとも少し力を入れたらケイは即
座に死ぬだろう。彼もそのことは良く分かっているようで、おとな
しく両手をあげた。

が、口は止まらない。

「だつてそうだろう？ あるかどうかも分からないよな『厄災』の
ところへ行つて世界を滅ぼそうとしているんだ、あほだろ。この（
検閲削除）」

殺すか、とコイは正直にそう思った。ケイがすぐこいつを言わなか
つたら実際に手を下していたかもしれない。

「……俺と同じことをしようとしている馬鹿が他にいるとは思わな
かつた」

。

沈黙が森に満ちる。長い沈黙が過ぎてから、ようやくコイは口を開いた。

「ちょっと待て。今なんと言つた？」

「（検閲削除）か？」

「切り殺すぞ」

真剣に殺氣をこめた視線を向けられて、ケイは肩をすくめた。

「聞いたとおりだ。他に意味はない、他意もない」

ふざけた風を装つてはいるが、ケイは本気だ。それはコイにも理解できた。自分と同じものを感じたからだ。

本気で世界を壊そうとしている コイと同じように。そんな馬鹿なことを馬鹿と分かっていてもやむを得ないほど、世界を見限つている。

「本気か」

先ほどされた質問を今度はコイがした。

「正気ではないだろうが、本気だ」

同じよひにケイも返す。その手を見て、コイはよひやく傘をおろした。

「……お前と同じことを考へていて死ぬほど不快だ」

「ひつちのセリフだ」

「でも、世界が終わるまでなら協力してやつてもいい」

「それもひつちのセリフだ」

じつとじつと睨み合づ。火花が散つたような一瞬の後、戦いは始また。

「なんで素直に助かるとか、よろしくとか言えないんだ？！お前といふ男は！？」

「それもひつちのセリフだッ！素直に助けてくださいとか言えんのか、お前という女は？！」

「口が裂けても貴様には言わんっ！…やつちいそ十下座でもして一緒に連れて行つてくださいとか言えんのか？！」

「お前だけには死んでも言わねえッ！…」

セイリオスとイグザイオのHコートの口論としてはやたらと長い。

ベルだ。

口げんかなどとこゝもののはそんなものなのかもしない。
しばらく立場を忘れてぎやあぎやあやつっていたが、先に我に返つたのはケイだつた。

「待て、こんなことやつてる場合ぢゃないだろ」

それもそうだとコイも思つたが、彼に言わると腹が立つ。そもそも先に腹が立つようなことを言い出したのは誰だ、などとも思つたが口には出さなかつた。時間が惜しいと思い直したのだ。

息について気持ちを整えてから、落ち着いて話をすることにした。
「……まず最初に言っておく。わたしは『破滅』の存在する場所を知らない。ラグドラリヴ内に入つてから探すつもりでいた。ケイ・カゲツは『破滅』の情報を持つているか？」

正直にそう告げると、ケイはあからさまなため息をついた。だが、馬鹿にするつもりではないらしい。

「あー……まあそういうな、国家間でもうううの機密だ。いくら裏神官でも知らなくて当然か」

じりこりとこめかみの辺りをかきながら、持つている端末の画面をコイに見せた。

覗き込むと地図が映し出されてゐる。小型の画面なのに、画像は信じられないくらいにクリアで見やすかつた。さすがケイの自作である。おそらくはまだどこの国にもない技術だ。

イグザイオにも公開していないと彼は言つていた。

「これは今いる場所……セイリオスの森だ。で、こつすると……」
なにやら画面を操作すると、立体映像になつた。見たことのない地図が目前に出現する。

コイにさえ見覚えのない地図。とこゝとは、これは公的に存在しない地図だ。

裏神官さえ知らない地形。

「これ……ラグドラリヴなのか？」

「1」名答

自信たっぷりに笑いケイは映像の一点を示す。セレは小さく紅く光点がともっていた。

ラグドラリヴのほぼ中心地だ。
「ここか」

「俺の見立てでは、な」

ケイはそう言つてから説明を始めた。不可解な熱源反応、魔法反応があること。何もないはずのラグドラリヴの中心地で、そんな反応がありえないことだというのはコイにも理解できる。

そこには何かがあるのだ。確実に。

「ラグドラリヴでそんな反応があるのはここだけだ。ほかにはない。だから十中八九ここだろ?」

「ダミーである可能性はないのか?」

至極当然のことをコイは問いただした。そう簡単に反応が出るなどかえつて怪しい。偽の情報を流して、本物は隠すという手はよくあることだ。

「それはないな。そんなことする必要もない」

ケイは断言した。

「なぜなら、誰もここに入らないからだ。一般人はもちろん、各国の『裏』さえもここには入れない。入るものがないといふにダミーを作る必要もない」

「……誰も入らないのに地図はあるのか? それともそれはお前が自分で作成したのか」

指摘するコイを意外そうにケイは眺めた。

「……ちょっとは考えるんだな、驚いた」

本人としてはほめているつもりらしい。けなしていふようにしか見えなくても。

「そうだ、地図はある。俺が作成したんじゃない。これは俺が軍のコンピューターにハッキングをかけて手に入れた。誰も入らないはずの場所なのに地図はあるんだ」

ケイの言いたいことはユイにも分かった。

「地図が必要な誰かがいるんだな？ 中に入る誰かが存在しているの

か……」

「そういうことだ」

ではやはり何かが存在しているのは間違いなさそうだ。
限られた人間のみが知る、何かがある。

武章・破滅の地……厄災の闇・2（後書き）

なんとか合流しました。でもやっぱり仲の悪い主人公たちです。

「イグザイオがからんでいるのか？ イグザイオのコンピューターにデータがあつたということは」

軍事国家イグザイオならなんらかの兵器だろつかと考えたユイだが、ケイは首を横に振った。

「いや、他の国でも同じだつた。念のために他国のあちこちにハッキングかけて調べたから確かだ。どの国にも同じ地図が存在している。セイリオスでも、ヒニアでも。だから、どこの国が率先して兵器開発や魔術開発しているわけでもないらしい」

どこの国にも同じデータが存在していたということで、ケイは何かの存在を確信したと言つ。五皇國のどれもが恐れる あるいは敬う、何かがある、と。

「何かが存在しているのは間違いない、か……問題はその『何か』が何なのかだけど」

「ま、他人を救うものではないだらうな

あつさりとケイが断言する。その点ではユイも同感だつた。万人の役に立つようなものなら隠す必要はない。隠すということはその時点ですでにやましいということだ。

「公にできない何か。きな臭いことこの上ない。

「お前でもそれが何なのか調べられなかつたのか？」

「無理だつた。そもそもデータが存在していない

「？ どういう意味だ」

汲み取れずに聞き返す。

「データ化しているなら俺の手にかかるば間違ひなく見つけることができる。俺が見つけられなかつたんだからデータ自体がないってことだ

「だから、どういう意味だ？」

「……脳みそ使えよ、データ化すらできないってことだろ。いいかことだ」

? データとして残すのもやばいってことだ

そう説明されて、ようやくユイも理解した。痕跡も残せないほど
のもの。少しでも残つてしまつたらまずいもの。

「なるほど。それは確かに『破滅』っぽいな」

ケイが断言するだけのことはあるのかもしれない。

なにはともあれ、これで向かう先の見当はついた。ケイのナビが
あればさほど迷うことないだろう。ここで彼の手を借りることが
できたのは幸運だった。世界には気の毒なことだろうが。

「……そう言えば、お前何故セイリオスにいたんだ？ ラグドラリ
ヴィに行くならイグザイオからだつて行けるのに」

方角を確かめてから、ふと気づいてそう訊いた。

「あ？ ああ、一応カモフラージュだ、休暇とつて旅行を装つた」

「それで大荷物を背負つているのか？ 置いて行け、邪魔になるだ
けだ」

親切心からそう忠告した彼女にケイはかえつていぶかしげに返す。
「お前は何でそんなに身軽なんだ？ まさか食料とか用意してない
のか？」

「……ってそれ、食料なのか？！ 一体何日かける気だつ？」

「いや、着替えとかも入つてる」

あきれて脱力しかけたユイだが、かろびじて問い合わせる。

「……なんのために」

「ここに入るまでは私服だつたんだ！ 旅行の名目で来てんだから
当たり前だらう！」

森に入つてから制服に着替えたということらしい。何が起こるか
わからないのだから、防弾、防刃の制服に着替えるのは間違つてい
ない。間違つているのは他のことだ。

「……ケイ・カゲツ」

「なんだ」

「お前山歩きとかしたことないだろ？」

「……ねえよ」

ため息をついてコイは言った。

「悪いことは言わん、荷物は置いていけ。置いていくのがいやなら、もう少し持っていく物を絞りこめ。途中でばたお前を背負つていくなんてわたしはいやだ」

先ほどとは立場が逆になつた。今度レクチャーを受けるのはケイだ。

不要なものは置いていくに限る。帰つてくることを考える必要がないのだから、身軽に動くことのみ考えればいい。ようは『破滅』のもとへたどりつき、それを田覚めさせれば終わるのだ。世界も、自分も。

後のことを考える必要はない。『破滅』を田覚めさせた瞬間に終わりは訪れるのだから。

田覚めなくとも自分たちはそこで終わる。どのみち先などない。「水と食料は最低限でいい。あと、着替えも必要ないぞ。いくらなんでも今日中にはつくだろう」……まあ、上着の一枚くらいにしておけ

「わかった、そうしよう」

ケイは素直にコイの言葉に従つた。得意な分野が違うところは理解しているのだろう。変に意地を張るのも馬鹿くさいと思つてゐるようだ。

「武器のたぐいは……お前がいるからいいな?俺は銃とかナイフとかの扱いは、はつきり言つて素人だからな、あてにするなよ」「あてにしろと言われても絶対にしない」

コイは断言した。ケイに格闘などを期待する気は毛頭無い。「お前は頭だけ使つていればいい。戦うのはわたしの役目だ」

「……男前だな……性別間違つてないか?コイ・ヒガ」

「殴るぞ」

「やめる。お前に殴られたら軽く死ねる」

まがりなりにも軍人のクセに、体力に自信のないケイはあつさりと白旗をあげた。

大体、体を鍛えたことなどない少年だらう。鍛える暇があるなら、そのあいだに機械を作り上げるはず。もちろん山歩きなど初体験に違いない。

「それから、俺が足手まといなのは確実だ。だからって置いていくなよ」

「そうしたくてもできない。お前のナビがなければ遭難しかねないから」

殺伐とした相談をし、お互いちれんたくい一蓮托生いちれんたくじょうだと再確認した。

ユイの戦闘能力、ケイの頭脳、どちらが欠けてもたどりつけないだろう。

「よし、こんなもんか」

さほど時間をかけず、ケイの荷物整理は終わった。リュックから出した物は茂みの中に押し込んで置いていく。

方角は大体ユイの身体感覚で分かるので、森の中で迷うことはないが、万が一ということもある。ケイが彼女の後ろからフォローするということで前後に並んで歩く。

見た感じは、華奢きやしゃな少女の背中に背の高い少年が庇われていると、すごく情けない光景である。実際は少女のほうが遙かに強いのだが、いかんせん見た目が可愛らしいためとてもそれは見えない。親鳥を離が守つているような印象だ。

本人たちには違和感はあるでなく、当然だと思つてゐる。適材適所という言葉通りに。

自分たちの得意分野をきちんと自覚しているのだ。迷いはない。

深い森の中二人連れ立つて歩く。時折時間を計りながら、国境警備とかち合わないよう気をつけた。無駄を省き、ひたすら先を急ぐ。一人のときは違い、体力的に劣るケイが同行してゐるため、時間のロスは増える。日が暮れる前にはラグドラリヴに入るつもりだったが、このペースでは日が暮れてからの潜入になりそうだ。

かえつてそのほうが都合は良いだらうという氣もする。潜入は視界が利かない暗闇の内に、というのが彼女にとつての常識だ。夜の

闇は裏神官の彼女にとつて妨げにはならない。

問題は同行者ケイの夜目がきくかどうかだが、最悪、手を引いて引きずつてやればいい。

触るのは嫌だが、用が終わるまでならなんとか辛抱できるだろう。

「……変な感じだな」

後ろを歩くケイが不意にそう呟いたのが聞こえた。

「なにがだ？」

振り返らず、歩みも止めずに訊き返す。

「よりによつてお前と世界を滅ぼしに行くとは思わなかつた」「それはそつだらう。わたしだつてお前がいるとは思わなかつた」最初は自分一人でラグドラリヴに行くつもりだったのだ。ケイの力は確かにありがたいが、あまり口に出したくない。ユイはそう思つてそう言つたのだが、

「……本当に知らないのか？ ユイ・ヒガ」

ケイは心から意外そうにそう訊いて来た。

「……？ なにを」

問われる意味が分からぬ。

「……いや、知らないならいい」

「何だ？ 気になるだらう、言え」

気になると言いつつも振り返らないユイである。彼女が振り返らないのでかえつて安心したのかケイは話し出した。とんでもない爆弾発言を。

「……あと何日か後に俺とお前の結婚が決まる」

バランスを崩してユイは転びそうになつた。

かろうじて踏みどまり、傘に手をかける。刃を引き抜きたくなとのを必死にこらえながら、なんとか声をしぶりだした。

「な……ど、どういふことだつ？」

「俺が知るか。セイリオスとイグザイオの上層部が勝手に決めたんだろう。当然俺の意思じゃない。お前の意思でもない……よな、その様子だと」

ケイは心底からほつとしたようだった。その心境はユイにも分かる。

「当たり前だつ……」

「良かつた……どうしても俺と結婚したいとか言われたら、俺はここで舌を噛んで死のうとか思つてたぞ」

失礼この上ないことを言う男である。しかも心底安心した様子で言つている。

「こつちのセリフだ……なんでお前なんかと……うわああ、冗談でも嫌だ！」

ユイはユイで鳥肌を立てている。しかし一人とも足を止めないのはさすがだろう。

「どこから出たその話つ！？　どこのどいつが企んだつ！？」

「企んだのは両方の国だと言つてるだろ。で、話が始まつたのはこの間の一件からだ」

ケイが指した『この間の一件』といつのは先日の護衛の話だろう。本来ならユイが行く必要もない仕事だったアレだ。高司祭と軍人の護衛は名ばかりで、実際はケイの護衛だったのだと思つていたあの一件。

「アレがすでに見合いの一環だつたらしい。変だとは思つたんだよな……やたら簡単に俺を置いていつたし、護衛のお前を連れて行かないで別室に移つていつたりして」

言われてみればおかしいことだつた。護衛として連れてきたユイをあつさりと置いていつたことも、体を動かすのが苦手なケイに少し鍛えてもらえなどと言つうのも変だつた。

あの時はどうでも良かつたのでいい加減に受け流していたが、こんなことだと知つていたら断固として拒否したものを。

「そういうわけで、俺は世界を滅ぼそうと思い立つたわけだ。世界が滅びるかどうかが死なない限り結婚の話は消えないだろ。お前が死ぬのを待つよりは世界を滅ぼそうとしたほうが早い。どっちも駄目なら最後に自殺を考える。イグザイオにもいい加減うんざりし

てたしな、ちょうどいいきっかけだった」

人から見ればいい加減極まりない理由だ。本質はそれだけではないのだろう。だが、きっかけの一つになつたのは間違いない。

「恐ろしいこと考えるよな、俺の頭とお前の身体能力をかけあわせようと思んだんだろうが、逆だつたらどうすんだ？ 頭ぱーで体も鈍いなんて最悪だろ」

「ヤメ口。想像させるな。おぞましい」

ユイの拒絶にケイは乾いた笑い声で答えた。

「はつはつはつ、俺だつて知りたくもなかつたわこんな話！ だが一人で鳥肌立てるのも嫌なんでな！ おまえも味わえこの悪寒を！」
「い、いらんことを言いやがつて……！ ほんとうに嫌な男だなお前は！」

ざかざかと乱暴に進みながらユイは自分の腕をさすつた。本気で鳥肌をたてている。

おそらくは背後のケイも似たような状態なのだろう、足音が乱れている。

こんなことをきいた以上、後戻りはできない。絶対にしない。帰れば待つているのは心底嫌な奴との結婚だ。彼女の意思も彼の意思も関係ない、政略結婚というのも生易しいほどの強制だ。ただ優秀な兵士を作り出すためだけの道具。

五皇國は簡単にユイ達を切り捨てるうえに、簡単に左右するのだ。人生も、生き死にも、何もかもを全て。

「……しかし、どうやって知つたんだ？ わたしはまだそんな話かけらも」

言いかけて、ユイは言葉を飲み込んだ。

そういうえば、と思い当たることがあつたのだ。

今朝方、ラニと交わした彼女との最後の会話。

彼女はユイの異性観を訊いて来た。

その前の晩、送迎をした運転手も彼氏がどうこうと言つてきた。

ラニは個人的興味と言い、運転手もそうだろうと思つていたが、

実は上層部からの命令だったのではないか？

ラニーの態度はあからさまにおかしかつたし、運転手も今考えると

あんな態度は変だ。

どうやらコイ本人の知らないところで国はちやくちやくと準備を進めてきたようだ。

「……アレがそうだつたのか……」

「？ なんかあつたのか？」

「なにかというか……調査はされていたらしい。今朝方同僚に異性観を訊かれたばかりだ」

ゲンナリと答える。ケイも似たような心境らしい。脱力したような声で言つてくる。

「うわ。直球か」

「本人は個人的興味とか言つていたが……」

「なわけないな、このタイミングで」

断言された。コイもそう思つ。

「ちなみに俺は日課のハッキングでその情報を拾つた。ガセじやないぞ。信じられなくていいだけ調べたからな」

嘘や冗談ならどれだけ良かつたか、などとも呴いている。全く同感だつた。冗談にしては質が悪すぎる。訊いた本人たちが死にたくなるようなことを企むとは。

おそらく互いの恋人の有無を調べていたのだろう。素行調査もかねていたはずだ。ふさわしくない相手とつきあつていなかどうか、いわゆる不純異性交遊といつやつ。

そんなヒマなどないような生活をしているところとくらい分かつていそうなものだが。

「……ラニーは知つていたのかな？」

ふとそう思つた。あれだけケイさんケイさんと騒いでいたのに、コイとケイの結婚話のためにコイの異性観を訊いてくるなどおかしいではないか。

「ラニー？」

「ああ……同僚だ。午前中に事件に巻き込まれて犠牲になつたと丁
々で見た」

お前に惚れていた奇麗な娘だよと言つてのける。今はもういない
彼女。ケイに連絡してほしいと願つていた彼女。

「……ラニー・ソルトか？」

「？ 知つているのか」

「いや、直接は知らん。ただ、今朝のハッキングで見た名前だつた
セイリオス国内の情報を探つていた時に見た、とケイは言つた。

「……『処分』の筆頭にあげられてたぞ」

「？！」

武章・破滅の地……厄災の間・3（後書き）

本当に仲悪いな、この主人公たち、と作者でも思います（笑）

彼は続ける。無慈悲に無造作に。

「理由は一つ。俺とお前の結婚の障害になりそうだというだけだった」

ケイに恋していたラニ。どうしても彼と連絡を取つて、恋人になりたいと望んでいた。

結ばれたいと願つていた。その橋渡しをユイに頼んでいた。ユイ本人は知らなくても結婚話の当人に。

ユイとケイを結び付けようとしている各国の上層部には邪魔な存在だったのだ。

「じゃあ……彼女は消されたんだな、セイリオスに」「イグザイオにも、な」

裏神官の彼女がやすやすと殺されたわけが分った。事件を装つて襲ってきたのはおそらく同じ裏神官だ。ラニを『処分』するように命令された裏神官。戦闘に向いていない彼女には過ぎた相手だったう。国に見捨てられたのだ。どこからも助けは来ない。

ユイへの命令の不審さも紐解けた。確かにユイに滞在されずからう。ラニと違つて実戦に慣れている上に、結婚話の当人だ。もし負傷、あるいは万が一死亡でもしてしまえばすべて水の泡である。だからこそあの不可解な命令が下された。

今すぐにそこを離れて隣町で待機せよ。あれはユイを遠ざけ、確実に邪魔な存在を消し去るためのもの。

ラニは情報収集専門の裏神官だったため、補充はすぐにきくと判断されたのだろう。

そして彼女はあっけなく消された。

前夜、ユイに送つたたつた一通のメールのために。

ユイが見もしなかつたあのメール。任務中に送られてきたそれを盗み見たのはあの運転手しかいなし。始めから携帯をチェックする

密命を帯びていた運転手は、着信を知つてすぐに内容を見たのだろう。

何食わぬ顔をして任務を終えたユイに携帯を返し、彼女を送った後で本部に報告を入れた。

ラニ・ソルトはケイ・カゲツに好意を抱き、どうやらその橋渡しをユイ・ヒガにさせようとしているらしい、と。

確實なことではない。コイが橋渡しをするかどうかも分からないし、したとしてもケイがOKするかどうかも分からない。

そもそも結婚話からしてまとまるわけがないと言うのに、『邪魔になるかもしけない』そんな理由で彼女は殺された。

不確定な未来のための理不尽な死。

仲が良かつたわけではない。少なくともユイから見たラニは親友とかそんな関係だつたわけではない。ただの同僚だ。

自分に任務が言い渡されていたら、ユイはラニを『処分』しただろう。

その程度の仲だ。けれど世界の腐敗を理解するには充分な『死』だった。

世界に見切りをつけるには充分だつた。彼女の死がユイに世界との決別を促したのは間違いない。

「友人だつたのか？」

ケイが背後から訊いてくる。

「いや、ただの同僚だ。でもいい子だつたよ。わたしと違つてとてもいい子だつた」

それは心底から思う。ラニはいい娘だつた。こんなくだらない理由で死んでいい娘ではなかつた。死ぬべき者は他にいっぱいいるはずなのに、どうしていい人から死んでいくのだろう？

悪い人間が殺すからだ。自分のことしか考えない人間がいるからだ。腐りきつた人間が大半を占めるからだ。

間違いなく自分もその中の一人だと、ユイは知つていた。

やはり世界は滅びるべきなのだ。ごく一部の心正しい人間だけが残ればいい。

夜の中を風が駆けていった。草原を撫でてゆくざわめきは、やがて闇の中へ飲み込まれていくのだろう。そして訪れるのは静寂だ。ここにはなにもないから、雑音も存在しない。至極当たり前に山があり、谷があり、川があり、人がいない。

あるものは自然だけ。それがなによりの宝だとと思う者はこの世界には少ない。

だからここには人間はない。

ラグドラリヴには誰もいない

表面上には

「さて、ここからどう進む？」

人のいなはずのラグドラリヴの平原で、深い草に隠れて少女と少年は顔を見合せた。コイは油断なく傘を手にし、ケイは端末を起動させている。

ラグドラリヴにはすんなりと潜入できた。あっさりすぎて拍子抜けしそうになつたぐらいだ。事前にコイの持つている地図から国境の人的警備の穴をつき、ケイがすみやかに機械警備を無効化した。さすがに天才児と他人から言われるだけあって、ケイの機械操作はコイから見れば神業にも思える。死んでも口には出さないが。

「問題は魔法だな。機械や人間なら俺とお前でどうとでもできるが、魔法はなあ……こればっかりは魔法士でないとどうにもならん。一応知識としてある程度のことはわかるが」

「わたしも似たようなものだしなあ」

「お前、任務で潜入とかしてなれてるんじゃないのか？」

「魔法的な警備をしているところはあまり行っていない。大体そういう困難なところより、もっと簡単に『処分』できる場所を探す」「そりやそうか、好きこのんでわざわざ困難なことする奴はいない

わな

「そういうことだ」

魔法的な警備、トラップがしかけられていたら一人には少々荷が重い。

ならばどうするべきか？ 答えは単純なもの一つ。

「……ひつかからないように注意するしかない」

幸い、ケイの端末には感知機能も搭載されている。さほど広範囲を感知できるわけではないので、かなり至近距離まで近付かないと反応しないのが不安だが、コイの反応速度ならひつかかるまえに無効化、破壊することは可能だ。彼女の傘には魔法に対する防御機能もついていることだし、なんとかなるだろう。

「がんばれ。お前の反射神経にかかるぞ、コイ・ヒガ」

ひつかかってしまえばそこで終わる。一緒にいるケイもいわずもがな。

仕方ない、と再びユイが先に立つ。

月の光だけがある平原を少女と少年が歩いていく。時折、遠くで狼か何かの遠吠えらしき声がする。おどき話の中に入り込んでしまったかのようだ。

穏やかで優しい夜のお話。

けれど主人公の彼女たちが望むのは世界の終わり。
そのために幻想的な夜の中を歩いている。

「……月つて意外と明るいもんだな」

背後でケイが呟いた。夜なのに、照らすものが必要ないほど明るい。それはユイも同感だ。ここはとても綺麗だとも思つた。
ラグドラリヴは美しい。以前来たときもそう思つた。昼間も夜も、どちらも綺麗だ。

どうしてだろう？ こんなに腐つた世界にも綺麗と思えるといふ
があるなんて不思議だつた。

しばらく歩いて、目的地についてから理由が分かつた。
あきらかに人工的な建物が視界に入る。不愉快だつた。こんなに

綺麗な場所になんて不恰好なものを建てるのだろう。そう感じてから、ラグドラリヴを美しいと思ったことを理解した。人間がいなかつたからだ。今まで歩いてきたところは人の気配が微塵もなかつた。人工的なものが何もなかつたから、美しいと思つたのだ。

「醜い」

はき捨てるようなユイの声に、ケイも同意した。

「ああ、この場所にはそぐわないな」

ラグドラリヴにそぐわない人工的な建物。そここそ二人が目指す『破滅』がいふとされる場所だ。何も存在しないはずの場所に、あるはずのない建物。

それなのにカモフラージュもされていない。塀も門もない。警備の人間が立つているわけでもなく、また、機械や魔法の反応もない。何の警備もされていないようだつた。かえつて怪しい。

「本当にここなのか？」

「そのはずだ。地図を見ても場所は間違つてない」

「……警備網も何もないように見えるぞ？」

「そう見えるな……何でだ？」

「聞いているのはわたしだ、ケイ・カゲツ。お前もしかしてガセネタをつかまされたんじゃないのか？」

「それにしては何もないのは変だる。ここまで俺たちを野放しにするわけもないだろうし」

そもそもとかとユイは改めて建物を眺めた。人の気配はしない。少なくとも目に見える範囲にはない。やはりどう考へても警備はされていないような気がする。

「どうする？」

背後に問いかけた。これは罷かもしれない。中に入つたら一瞬で囮まれて殺される可能性がある。

「今更だろ」

ケイの返答は明確だつた。ここまで来て何もせずに帰るなどあほらしい。

「そうだな」

軽く息をついて、ユイは足を踏み出した。ケイもすぐに続いてくる。今更死を怖がるようなら始めからここには来ていない。

それでもできる限り油断なく進んでいく。自分が緊張しているのはわかった。何が有るのか分からぬ場所。何が起らぬのか未知の場所。

一步一歩進んでいく。遅すぎず、早すぎず確実に。たどり着くまでにそれほどの時間はかかるない。拍子抜けするほどあつけない到達だ。

扉が目の前にある。監視カメラさえついていない。一応鍵はバスコード式らしく、何ヶタかの数字を入れるものだつたが、ケイが自分の端末とコードでつないでなにやらいじるとすぐに開いた。あつけない。

「ちょっと待て、ここから中を調べてみる」

ケイはそう言つて端末を操作し始めた。その間ユイは油断なく周囲をうかがつている。

「……変だな」

少しして、そんなことを呟く。

「何が？」

「何も作動していない。結界や自動砲の反応はあるんだ、でもどれも作動していない……」

警備の機能はあるのに、そのどれもが動いていないという。おまけに言えば中には人の反応もあり、警備の人間も存在していることを示しているのに、動きはないのだという。

「いい加減な警備なのか？それともやっぱり罠？」

「わからん。入つてみないとなんとも言えん」

ケイは少し端末を操作してから、コードを外した。

「妙なんだよなあ、監視カメラもあるのに全部中なんだ。外には何一つ警備がない」

「？ 普通は外に向けるだろ？」「

警戒すべき侵入者というのは外から来るものだ。

「だらうっ。でも中なんだ。まあ映像に細工したからじしまくは力メラも役立たずだけどな」

自信たっぷりのケイを信じてコイは扉を開けた。自動ではないので押し開ける。

中は暗かつた。窓がないため月の光も入らない。コイには不自由ないがケイには問題だらう。

「も・の・す・ご・く!! 嫌だが、手をつけないでやうか

「いらん。暗視スコープを持つてる」

あっさりそう返され、すこぶる安心した。しかし、何でも持つている男である。持つていくものは絞れといったはずだが、一体何を置いてきたのか。

「そんな物まで用意してたのか

「備えあれば、ってホマレでは言つだらう

他国の言葉だ。コイは知らなかつた。答へず歩くこととする。

武章・破滅の地……厄災の闇・4（後書き）

いよいよ、ハグダラニガです。

今までどおりケイがナビ、ユイが斥候だ。時折監視カメラが動いているのを発見したが、ケイの細工はうまくいつているらしく、確実に自分たちは映っているだろうに警備の人間が何らかのアクションを起こすことは無かつた。

「下へおりるぞ。作動していないとはいえ地下のほうの警戒が厳重だ。なにかある」

ナビに従つてエレベーターを見つけるが、動いていない。ケイの腕ならすぐに動かせるだろうが、動いたら動いたで問題がある。「乗るのはさすがにまずい。いくらなんでも気づかれるだろうし、他に下におりる方法は？」

「ない。階段もない。ここだけだ」

簡潔に説明され、ユイは仕方ないとエレベーターの扉に手をかけた。

「開けるから、乗れ」

言ひなり頑丈な扉がメキメキと開いていく。華奢な少女が顔色も変えずに重い扉を開けるのを、背後で少年が唖然として見ている。

「なにしてる？ 乗れ」

「あ、ああ」

ユイが支えている間にケイは中に入り込んだ。続いてユイも入り込み、扉を閉める。

「どうすんだ？ 中に入つても動かせないのは一緒だぞ

「こうする」

傘の柄を引き抜き、刃を露出させ、彼女は迷わずに床に突きたてた。

強化されている人間ではないケイが視認できたのはそれぐらいだろ？ 気がついたときには彼女はすでに刃を納めており、できた切り口に手をかけて床をひつぺがしている。

「うつわ、力技。怪獣かこの女
やかましい。蹴り落とすぞ」

外した床を壁に立てかけ、コイはウェストポーチのベルトから鋼線を引っ張り出した。

「……まさか、それを伝つて降りる気か？」

恐る恐る問い合わせてくるケイににんまりと笑つてやる。それから天井をひつペがして鋼線を上のワイヤーに結びつけ、準備完了。

「おい、本氣か」

「他に方法が？」

「つたつて下まで五十㍍はあるんだぞ？！」

「田をつぶつてわたしにつかまつていろ。不本意だが守つてやる。五十㍍くらこならこのワイヤーは足りるし、死なん」

「死ぬ！ 下につくまでにお前はともかく俺は死ぬぞ！」

なあもぎやあぎやあわめく彼の襟首をコイはしつかりつかんで、につこりした。

「突き落としたほうが良いならそうするけど？」

……ケイはおとなしくなつた。突き落とされるよつはコイにつかまつて下におりたほうが『破滅』にたどり着ける確率があると判断せざるを得ない。

「……たどり着く前に死ぬのは嫌だぞ、コイ・ヒガ」

「つるさい、分かつてる」

会話はそこまで。手のひらを焼かないようマントを巻きつけ、コイは迷わず床の穴に身を躍らせた。勢いよくワイヤーを滑り降りてゆく。途中何度か壁を蹴りながら、勢いを殺したため怪我も無い。ケイが何か叫んでいたような気もしたが、着くころには静かになつていたのでよしとする。

「たどり着く前にお前に殺されるかと思つた……」

何度も深呼吸してようやく言つた言葉がそれだ。マントをまといなおし、整えながら突っ込んでやる。

「元気じゃないか」

「マジで死ぬと思つたわい！」

言い返す元氣があるなら大丈夫だろ？。コイはそう判断した。

文句男は無視して扉をこじ開ける。

「行くぞ。早く出る」

「ああわかつたよ、怪獣女」

『破滅』にたどりついたらその場でこの男を斬ろうかと、危うく決心しそうになつたがなんとかこらえる。

外は上と違つた様相だつた。筋肌が露出している。洞窟のように思えた。地下は人の手が入つていないうようだ。自然の地下洞窟を人が地上とつなげたのだろう。

広いが、暗くはない。地上からの光ではなく、壁に生えたコケが光を発しているせいだ。ふわふわとした優しい光がとても美しい。暗視スコープなどという無粋なものは必要ない。

「……すごいな……綺麗だ」

他に言いようがない。何か上手に形容できればいいのだが、この景色のまえでは陳腐な言葉など浮かんでこない。

こんなに綺麗な場所に『破滅』など本当に存在しているのだろうか？

誘われるようになんと進んだ。時折コケが舞い上がり、優しい光が舞う。進むうちに壁の光がぽつんぽつんと途切れ始めた。なんだろうと残念に思いながら壁を見ると、そこには人の手が入つた跡がある。

「呪符……？」

封印の札だ。これを一定の範囲に貼られると、対象が猛獣でも動けなくなる。強弱の差で時間差がつくが、効果は大体同じだ。対象の動きを封じるもの。進むうちにどんどん増えていく。札に書かれている対象の名は魔術文字のため読み取ることが出来ない。本職の魔術師でなければ意味はさっぱりだ。一体何が封じられているのか？期待か、不安か、ぞくぞくしながら歩みを進める。

コケが少くなり、増えるのは封印の札だ。それもえらく強力な呪符である。近付くだけで魔術師でもない一人がビリビリと魔力を

感じるほど。

「上、見てみる」

ケイに促されて頭上を振り仰ぐと、そこには頑丈で大型の銃が見えた。作動はしていないようだが、見ていてぞつとする。アレで撃たれれば人間の体など半分が吹き飛ぶだろう。

「内側を向いている。どうしてだろうな？」

ケイがやりと笑う。意味はコイにも伝わった。

警戒しなければならない何かが内側に存在しているのだ。外からの侵入などより恐ろしいものが、ある。

ここに『破滅』が眠っている！

「進むぞ」

告げてもはや余所見はない。まっすぐに進んでいく。それについて呪符や銃などのじつじつした警戒が増えしていく。全て作動してはいなため、二人は氣にもしなくなつた。

どれくらい歩いたどうか、ケイの息が上がってきたので少し休息したほうがいいかなと考え始めた時だつた。大分コケが少なくなつて闇の密度が上がつてきた通路の先に、扉のようなものがぼんやり見えた。

「！」

着いた、と思った。走り出したくなる気持ちをおさえて慎重に進む。目的地だと安心して警戒を忘れるのは危ない。一步一歩進むにつれて、扉の全貌が見えてくる。

扉は大きかつた。通路と同じくらいの高さと幅がある。もともと洞窟に存在するものではなかった。明らかに人の手で作られた扉だ。

断言できるのは、扉の表面にあらゆる封印方法がされているからである。

全面に呪符が張られ、その上から特殊ワイヤーが張り巡らされている。あげく、パスコード式の機械錠も十個はついていた。コイが視認できたのはとりあえずそのくらいだが、ケイの見た感じではも

つとあるらしー。

「……法王、国王、女王、大統領の寝室でもここまで警備はしてないだろ？」「

なかばあきれてケイが呟く。端末からコードを引き、機械錠に繋げた。

「こつちは俺が解除する。お前は呪符とワイヤーをたたつ斬れ。お前の傘なら反動もやりきれるんだりう？」

「そうだな、分かった」

ケイが端末をいじる気配を背後にユイは刃を抜き放った。前に立つだけで肌にびりびりと来る呪符の威力だ、うまく反動をやり過ごさないと無力化どころか即死する。後ろのケイに反動が及んでもいけない。至極困難なことだが、ユイは迷わなかつた。この程度で死ぬなら世界を滅ぼすことなど出来はしない。開いた傘を盾のように左手に構え、刃を右手に一度深く息を吐いた。凧ぐ水面のように静かな心境だつた。

覚悟はできている。

彼女は刃を振り下ろした。

迷いなく、まっすぐに。

世界を滅ぼすであろうその一刃を。

参考・開放……ツバサ（前書き）

ここから第三章です。

開封の反動はすごかつた。傘をかまえていたユイの両脇の地面がえぐれたほどだ。ケイは彼女の真後ろにいたため影響は受けなかつたが、少しでもユイの背後からずれていたら、今頃は壁に激突して肉団子になつていただろう。

少し遅れて機械錠も解除され、ユイは扉に手をかけた。

……重い。なまなかな力では開かない。

「手伝え、ケイ・カゲツ」

彼女に呼びかけられケイはぎょっとした。

「俺が？」

「ないよりマジだ」

一応男なのだから子供より力はあるだらう、その程度の期待だ。仕方ないとケイも扉に手をかけた。そのまま二人並んで、全力を込めて扉を押してゆく。

重量を感じさせる軋み音をさせながら扉は徐々に開いてきた。

「全部、開ける、ことは、ないだろ？ 隙間でも、入れれば、それでいい、よな」

滑らかにしゃべると力が抜けそうになるので、ケイの声はアクセントに力がこもつている。

「そうだな」

うなずいて、入れるくらいのスペースが開くまで押す。幸いといふか、ユイもケイも体型はすらりとしているのであまり大きく開ける必要はない。

扉を開けるだけで体力を使い果たすなどじめんである。中の『破滅』を目覚めさせるまでは力尽きるわけにはいかない。

「これくらいでいいだろ」

30cmに満たないくらいの隙間だが、体を少し斜めにすれば問題なく入れるだろう。

これまで通り始めにコイが、続いてケイが中に入る。

「…………？」

中は明るかつた。通路と違つてコケなど見える範囲には見当たらぬのに、だ。

一瞬戸惑い、ここは地下のはずだと辺りを見回す。

そして一人は息を呑んだ。

まず見えたのは光。

光は形を成していた。

その真ん中に生まれたままの姿の少女がいた。

コイよりずっと年下に見える。まだ小学年くらいの少女だ。

光は少女の背から現れている。すらりと大きく、柔らかく。

それは宗教画の一枚にありそうな光景だ。

「…………天使…………？ そんな馬鹿な！」

思わずそう呟いてから気がついた。少女は大きなカプセルに入っている。

幾重にも厳重に封をされたカプセルだ。扉にあつた封印と同じくらいいのものがあちこちについている。

その中で何かの液体に浸されて、小さな体は浮かんでいた。

光の翼を持つ少女は目を閉じて眠つているよつにも見える。

「…………生きては、いないよな。これじゃあ…………」

ケイの呟きは同意できるものだつた。少女は全身、頭まで液体に浸かつてゐる。

……まるで標本だ。

近くへ寄つて見てみると、よく見ると翼は背中だけでなく、鳥の尾羽のように腰からも生えていた。それも光で出来てゐる。

「この子は、一体…………？」

答えなど返らない。少女は目を閉じたままだ。おそらくこの先この少女が目を覚ますことなどあるまい。これはホルマリン漬け、すなわち死体を保存しているのだろう。

「これが『厄災』の正体なのか？ この女の子が？」

この少女は一体何者なのか。能力者か魔法士なのだろうが、こんな風に翼が生えている人間など存在するのか？

ケイがカプセルに手を伸ばすのを見て、ユイははとつさに彼を突き飛ばした。

「げふつ」

手加減はしたつもりだったが、ケイには強すぎたらしい。呻いている。

「な、なにすんだ、怪獣女……っ」

「すまん、つい。この子が裸だから」

「っ？！俺は幼女の裸体に興奮するような変態じゃねえっ！」

ケイは断言したが彼が変態ではなくても近寄らせるのはまずい気がした。なんせ少女は裸なのである。

「大体、死体に興奮するような性癖もないぞ？！」

「ああ、まあそうかもしれんが、とにかく寄るな。この子が可哀想だ」

ユイは少女をかばうように背を向けた。カプセルに入れられて、こんな所に封印されている少女がなんだか哀れでならない。

「この子も五皇国の犠牲者なのだと考えるとなおさらだ。

「この子は一体なんなんだろうな」

「分からん。訊くなら俺に調べさせろよ」

「ん~、それはやつぱり嫌だ」

少し考えてみたが、やはり気が進まない。自分でって死んだ後に裸でこんなカプセルに入れられて、あまりされ事細かに調べられたらと思うと嫌だ。

調べる相手がケイならなおさら嫌である。

「なんだ？ 冷酷無比な裏神官サマがずいぶんと甘いことを言つんだな」

とは言つものの、ケイ自身も無理に調べるつもりは無いようだ。先ほどのユイの指摘があつてから微妙に視線を少女から逸らしているところを見ると、案外いいやつなのかもしれない。それと好き嫌いだな

いは別だが。

ユイはため息をついた。ここまで来たのに、見つけたものは羽の生えた女の子の死体だ。

珍しいといえば珍しいが、そんなものに世界を滅ぼす力などあるわけがない。

「他に何かないか？ 機械とか、魔術とか、宝玉とか！」
言い伝えが事実なら、何か他にあるはずだ。事実でなくとも何かあるはずだ。

辺りに視線をやる。むやみに広い室内だ。少女からの光が届かないところに何かあるかもしない。

「探してみるか……」

ケイも力が抜けたらしく、脱力した声でそう答え周りを見渡した。くるりと視線をめぐらせて一回りして ケイは硬直した。彼の視線はユイの背後を指している。目を見張ったその様子にユイはすぐさま自分の背後を振り返った。

彼女の後ろにあるのは少女の入ったカプセルだ。その後ろから何かが現れたのかと思ったのだ。彼女の勘は間違つてはいなかつた。目があつた。

水色の瞳がユイを見ている。

ユイは硬直した。裏神官の彼女が、だ。

先ほどまで閉じられていた瞳が開いていて、今はユイとケイを見ている。

カプセルの中、液体にふわふわと浮きながら、翼の生えた少女はしっかりと目を開けていた。

「？！」

驚きで声も出ない。死後硬直かとケイは一瞬考えたが、すぐに違うと分かつた。

少女の瞳には生氣がある。きらきらと輝いている。

少女はこちらをきちんと認識していて、一人を見ているのだ
息も出来ないだろう液体の中で！

「な、なんだ？！」

「この子、生きているのか！」

叫ぶなり、ユイは体を動かしていた。即座に刃を抜き放ち、カプセルに切りつける。

生きているのなら出してやらなければ！ ひょっとして、この中に入れられたばかりなのかもしれないのだ。

音とともに刃が跳ね返る。ユイの腕と特殊合金製の剣でもカプセルにはほんのわずかの傷がついただけだった。

「くつ！」

ただのカプセルではない。おそらくはユイの剣より頑丈な物質と

魔法で造られている。

少女をここから出してやりたいのに、これでは時間がかかりすぎるので。

手こずっている間に、この子は力尽きるかもしれない。

「ケイ・カゲツ！ どうにかできないか？！」

「お前の馬鹿力でも壊せんのか？ おまけに中の子供は生きてるし、この子が傷つかないように壊さなきゃならんのか」

ケイは難しい顔だ。

「どうにか考える！ それしか能がないんだろうがー！」

「待て、考えてるんだ。黙つてろユイ・ヒガ！」

珍しくあせつているのが伝わってきた。彼も少女を見殺しにする気はないらしい。

考えるのは彼に任せて、ユイはとにかくカプセルに斬りつける事にした。何度もやつていればその内壊せるかもしれない。チャレンジしているうちにケイがもつといい手を考えるかもしないし、とにかく何にしてもやつてみるのが先だ。

「待つてて、今出してあげるからね」

中の少女に笑いかける。少しでも怖がらせないようにと思ったのだが、少女は笑い返してきた。ほんわりと、月のように。

意外なほど穏やかなその表情に、ユイは一瞬見入ってしまった。気付いたのはその一瞬後である。少女がちょっと首をかしげて、ユイのほうに手を伸ばしてきたことに。

「ああ、大丈夫だよ、出してあげるからね」

助けを求めてきたのだと、彼女はそう考えて少女の伸ばした手に元気づけようと自分の手を重ねようとした。カプセルがあるため実際にには触れられない。

そのはずだつたのに。

「？」

ユイはあれ、と思つた。カプセル越しのはずなのに、やわらかい感触がする。

視線をやる。小さな手が自分の手に触れていた。
カプセルを通り越えて。

「?!」

さすがに仰天した。思わずその手をつかんで引っ張つてみたあたり、やはりユイは普通ではないだろう。少女の体は何の抵抗もなくカプセルをすり抜けた。

「なななな？！　おい、ケイ・カゲツ！　通り抜けたぞ？！」

「なにい？！　おわつ、本当だッ？！」

少女はユイに手を引かれ、にこにこしている。そこだけ見ると可

愛らしい女の子なのに、背中と腰には光の羽が生えている。

「えーとえーと……の、能力者なのかな？ 魔法を使った感じはしなかつたし」

魔法なら必ず呪文の詠唱が必要になる。熟練者は何らかの方法で呪文の短縮化を図るが、この少女がそんな方法を使った様子はない。大体すっぱだかである。短縮化できるようなアイテムなど裸の少女が身に着けているわけがない。

となると、可能性としては能力者なのだが。

「物質透過……？ そんなことできるのか？」 できるとしたらかなりのレベルの能力者だぞ。少なくとも各国のトップレベルくらいのケイの指摘に、こんな少女が？ とコイは少女を見下ろした。小柄で、抱きしめたら折れてしまいそうなくらい細身の、とても愛らしい女の子だ。身長などコイの胸までもあるだろうか。

「ええと……大丈夫？ 体、なんともない？」

少女に問いかける。あれだけ厳重に封印されていたカプセルから出た影響はないのか。

少女は首をかしげた。その表情からしてどうやら問い合わせの意味が分かつていいようだ。

不思議そうにコイを見ている。身長差があるのに視線はほぼ同じ位置にあつた。少女は浮いている。

背の翼には本当に浮遊能力があるのか、それとも無意識に能力を使っているのか。

判別は難しい。それでも少女が類まれな能力者であることは間違いない。

「いつからここにいたんだ？」

ケイの問いかけ。そちらを向いて、やはり少女は首をかしげる。

「言葉が通じていない……？」

言つなりケイはいろんな国の言葉で話しかけた。彼が使える言語の全てで同じことを繰り返し尋ねる。どれかに反応があればと期待したが、結果は同じだった。

この少女は話せないのがもしれない。言葉を理解しているかどうかもあやしい。

教育を受けていないのは間違いないだろう。困ったなとケイとコイは顔を見合せた。

早いところ『破滅』を開放したいのに、この子に構つていると時間はどんどん失われていく。かといってほうつておくわけにもいかず、どうしようと思った時だった。

のんびりとした雰囲気を切り裂いてけたたましい警報が鳴り響いたのは。

「！ ばれたか！」

侵入が警備の人間に知れたらしい。

「何故だ？ カモフラージュはつまくいっていただろう」

ユイの言葉に、ケイは頭痛でもしていそうな表情で答えた。

「……エレベーターの惨状が見つかったんだろ」

「あ」

忘れていた。確かにあのままのエレベーターが見つかればいくらなんでも侵入者だと分かる。

「急がないと」

「この部屋のどこかに『破滅』が眠っているはず。とりあえず女子を部屋の隅にでも追いやることはできなかつた。

ガシャン。室内のどこかで音がした。言いようのない予感に突き動かされて、ユイは少女をケイのほうへと押しやる。

「この子を連れて退がつてろ！」

彼女の様子から何かまずいことが起こりそうだと判断したのだろう。ケイは言い返すこともなく少女を抱え、退いた。そのころにはユイはすでに刃を抜き放つている。

ガリガリと床を削る音がした。それは徐々に近付いてくる。視認できる距離まで来たそれは、見たこともないような四足歩行の動物だつた。

「複合生物……！」

背後でケイが呻くように言うのが聞こえた。コイもこれの存在は知っている。どこかの実験で造り出されたであろう、地上には見えない生物だ。不恰好にいろんな動物の特徴が残っているそれが、一匹。ベースは肉食動物のようで、足は太く、つめが鋭い。サルに似た顔にはありえない牙が生えていた。

凶悪このうえないこんなものまで同じ室内にいて、あっさりと開放されたところを見ると、少女のいたカプセルの厳重そうに見えた封印もゆるんでいたのかもしれない。

少女が怖がるとかわいそうだ。こんなものに時間をとられるのもいただけない。

速攻あるのみ。

床を蹴る。空間を切り裂くように駆け、キメイラのもとまで瞬時につめた。やつらは油断していた。自分たちより小さく弱そうな生き物としかこちらを見ていない。

あれなことに知能は並み以下だつたようだ。

コイの動きにあわてて鉤爪を振り上げ、その前足を斬り飛ばされる。怒りの咆哮はすぐに断末魔に変わった。首がぼたりと床に落ちる。

一匹は瞬時に始末したが、もう一匹はコイを警戒すべき相手と理解したらしい。

彼女が動く前に襲いかかってきた。太い前足が頭を狙つて繰り出される。

直撃すればスイカのように彼女の頭は割られただろう。しかしそれは、当たればの話だ。

悠長に待つてやる義理などコイにはない。床を滑るようにスライディングし、キメイラの下をくぐり抜ける。抜けるなり一拳動で跳ね起き、着地したキメイラの背後から跳躍、首の付け根に刃を差し込み、容赦なくひねつた。

痙攣^{けいれん}が強く手に伝わってくる。命の最後の抵抗だ。造られた歪んだ命でも生きようとする。

死にたくない、と。

歪んだ命でも命と言ひう者はいるが、そんな理屈はコイにはない。敵対した以上やらなければやられるのだ。だから彼女に躊躇いはなかつた。キメイラが絶命したことを確かめて、刃を納めずにケイ達のところへ戻る。

「あ

戻つてまず最初に気がついた。少女がシャツを羽織つている。

「服を着せたのか」

ケイを見ると彼は気まずそうに頷いた。彼が持つてきていった上着だろう。少女にはぶかぶかで、出ているのは首から上と、足元だけだ。動きづらそうだが少女は嬉しいのか、袖を振り回してにこにこしている。

コイのほうを見てにこにこした。可愛らしい。背中の翼さえなかつたら、ごく普通の女の子だ。

「濡れてないんだよな。この子」

ケイが呟く。

「カプセル内は液体で満たされているのに、この子の体は乾いてるんだ。何故だろうな？」

言われて見れば、少女の体は濡れてはいない。短い黒髪は濡れたかのような輝きを持つていて美しいが乾いている。

「それに、服着せて分かつたんだが、この翼、物体を通り抜ける」

「服にいちいち穴を開ける必要はないらしい。」

「純粹にエネルギーの固まりみたいなだな。形として具現化しているつてことは相当の力があるぞ。国家間でのトップレベルなんぞ楽勝で抜くくらいだ」

「そんな子がなんでここに。連れて行つてちゃんと教育すれば五皇國の役に立つこと確定だろ」

「俺に聞くなよ。知るわけないだろ」

もつともなので、その話題はそこで終わつた。少女のこととこれ以上時間をかけるわけにはいかない。

「わたしたちは用事があるから」）でお別れだけど、ひとつで出られるよね？」

『破滅』を目覚めさせるのと、この少女を連れて行くわけにはいかない。連れて行けばこの子まで死んでしまう。できれば一人で地上に出て、安全なところにいってほしい。

安全な場所などなくなるようなことをこれからしようとしているのに、馬鹿げたことをいつているなと自分でも思った。

「これから俺たちはとても危ないことをするんだ。だから連れてはいけない。一人で出られるな？」

ケイもそう言って一応少女を説得するが、通じたかどうかは分からぬ。少女はほわあんと不思議そうに一人を見返すばかりだったからだ。

心を鬼にして、少女に背を向けた。広い室内の暗いほうへ向かって歩き出す。そちらにこそ『破滅』が眠っているだろうと見越して。そう思つて歩き出したはずなのに　いつまでたつても暗くならない。

理由は一つ。光源がついてきているからだ。

「…………ついてくるわ」

背後から、ケイが報告してきた。気配を探ると、確かにケイの後方に気配がもう一つ。

振り返ると、生まれたてのひな鳥のように少女はついてきていた。ふわふわと浮いたまま。

「どうする？ ついてくるわ」

彼には珍しく、心底困った様子でケイが言つてくる。心境的にはユイも一緒だ。

連れて行くわけにはいかないが、置いていくのも危険だろう。万一一さつきのようにキメイラが現れたら、こんなに弱い少女はあっけなく食い殺される。惨事は間違いないだろう。

さすがにそれは気分が悪い。ユイが少女を力プセルからひっぱりだしたのだから。

「ううう……でも連れて行くわけにもいかない、よな？」

「当たり前だろ、何がいるのかわからんのに」

お互に困りきった表情で言い合う。まさかこんなところに小さな女の子がいるとは想像していなかつたため、対応に困ってしまう。「まあ、明るくなつて便利は便利だけどなあ……」

亥ぐけいに少女は抱きついてきた。あわてる彼にじやれ付くようになるとわりつき、次はユイへ抱きついてくる。まるで子猫のよつてある。

「わ、わ、わ」

少女はとても楽しそうだ。そんな可愛らしい表情をされたら、拒むのは可哀想になつてくる。かといってこんな危険な場所を連れて歩く気にはなれない。この子が強力な能力者だとしても、子供なんだ。まして言葉も通じないような子である。

「なんとかしる、ユイ・ヒガ。まぎりなりにも女といつ子供を産む

生き物だろうが

「わたしには向いていない」というとくらい想像がつくだろうが。
お前にそその御自慢の脳みそからいいアイディアは浮かんでこない
のか？ ケイ・カゲツ！」

言い合ひ一人をじつと見ていた少女が、不意にユイを指した。

「ゆい？」

「え」

今度はケイを指す。

「けい？」

喋った。たどたどしい発音ではあったが確かに言葉を発した。
「う、うん。わたしはユイ・ヒガで、こっちはケイ・カゲツだよ」
さつきまで言葉などわからないようなそぶりを見せていたのに。
少女はこの短い間に『ユイ』と『ケイ』が二人の名前だということ
は理解したようだ。

「そう言えば……お前、名前は？ あるのか？」

ふと気付いたケイがそう尋ねる。

「ナマハ」

少女はにこにこ。覚えたての言葉が嬉しいのか、輝くよつな笑顔
だ。しかし、会話は通じていない。

「……わかつてないな？」

ケイはユイを見た。お前も何とかしろと、目が語っている。
「え、ええと、名前。わかる？ わたしはユイ。それが名前。あなた
の名前は？」

少女はきょとんとし、ユイを指した。

「ゆい？」

「うん、それが名前

ケイを指す。

「けい？」

「そう。それは俺の名前」

そして少女は自分を指差した。

「なまえ」

さつきとは微妙に発音が変わった。なんとなく、要求されているような気がする。心なしか少女の視線も要求しているように見えた。

「これって……」「

ケイを見ると彼もそう感じているのか、口ひらついた。

「つけるってことか?」

自分に名前をつけてほしいと少女は言いつてこよんだ。

「この子、名前もない……?」

初めてそのことに気がついた。カプセルにはそれらしい名称など一切書かれていなかつたし、少女がいつから閉じ込められていたのが定かではないが、教育すら受けていないのであれば名前がないこともうなずける。

「なまえ」

少女は宙に浮かび上がり、くるんと逆さになつてコイの顔を覗き込んできた。早くつけてとせかされていよいよつで、かえつてあせる。

「え、ええつと、えつと、あー、ツバサ!」

あせりながら考えて、とっさに頭に浮かんだ単語を口にしてしまつた。

「なまえ、ツバサ?」

少女はぱあつと花咲く笑顔を見せた。そんなに喜ばれては、頷くしかない。

「う、うん、ツバサ」

少女の背にある光の翼が頭にあつたせいだろ?。ついそう言つてしまつたとは今更いえない。だがケイにはすぐさまあきれたように指摘された。

「……ひねりがない

「う、うるさい!」

自分で分かつていて、反射的に考えたのだから仕方ない。それでも反発は覚えるので言いつて返してやつた。

「だったらお前が苗字のほうを考えろ!」

ユイのその突つ込みは予想外だつたようで、ケイは数瞬黙つた。少女も今度はケイの頭上に移動し、彼の顔を覗き込む。

「…………ひ、ヒヅキ、とか」

どもりながらもそう答える。その様子から、彼もかなりあわてて考えたと知れた。

一見関連性がないように感じてユイよりはひねつたようにも思えたが、待てよと彼女は少し考えた。

ようは田と月だ。そして、ユイの苗字はヒガ。

ケイの苗字はカゲツ 月である。

気付くなり猛烈な勢いでユイは突つ込んだ。

「わたしとお前の苗字からめただけだろうつー！」

人のことは言えず、ケイもまた単純に頭に浮かんだ単語を口にしただけに違いない。

「お前よりました！ 僕はひねつた！」

「半回転ぐらいしかひねつてない！」

低レベルな会話である。なおもぎやあぎやあ続きそうだった口喧嘩はすぐに止まつた。

「ツバサ・ヒヅキ、ツバサ、ツバサ、ヒヅキ・ツバサ！」

低レベルな争いを止めたのは少女 ツバサの嬉しそうな声だった。あまりにも嬉しそうな顔をするので、ユイもケイもちょっと悔した。もう少し考えて、もっと可愛らしい名前にすればよかつた、と。

もつといい名前がないかなあ、と考えて、気付いた。

それどころではない。ツバサにせがまれつい考えてしまつたが、状況はそんなのんきなものではないのである。早く『破滅』を見つけて目覚めさせなくては警備が追いついてきてしまつ。

「こんなことしてる場合じゃない。急いで『破滅』を見つけないとケイもはつとした。状況を思い出したらしい。ツバサに流されて時間をかなりロスしてしまつた。いそいで視線を走らせるが、部屋が広すぎる。ユイには支障なく見渡せて、どれがそれらしいもの

か見当がつけづらい。見当をつけられるケイには暗いと周りが見えない。だからといって暗視スコープは危なくて使えない。光の翼を

もつツバサのそばで暗視スコープなど使えば反対に目が焼ける。

問題のツバサが一人から離れる様子もない。鳥の雛が思い込むように、刷り込みでもしてしまったかのようだ。名前をつけてあげたせいもあるのだろう、完全になつかれてしまった。

「くそ、せめてもう少し明るければまだ見えるのに」

ケイのぼやきに反応したのはツバサだった。

「けい、みえない？」

たゞたゞしくそう言つて彼女はケイの頭上に移動した。

同時に光が室内にあふれる。驚いてツバサをみると、彼女の光翼と尾羽が大きく広がつていて見えて取れた。先ほどまではツバサの体より少し大きいくらいの大きさだったのが、今は室内全てを覆うくらいの巨大な光だ。どうやら伸縮は自在らしい。

「みえる」

これで見えるでしょ？ と言いたげにツバサは小首をかしげた。

ケイは言葉も返せず啞然としている。

あまりにも非現実的な光景だ。

光の翼を持つ少女。天使のよつな女の子。

「……神学をもつと研究しておくべきだつたかな……」

ケイの呟きにユイも同感だった。天使など神学や伝承、おどき話の中だけの存在だと認識していたのに、実際にその存在を目にすることは。

しかも、『破滅』を求めて訪れた場所で天使に会うとは皮肉もいいところだ。

自分たちは世界を滅ぼしに来たのに。

「つ、ツバサ？ あのね、わたしたちは危ないことしに来たの。お願ひだから邪魔しないでね？」

世界を滅ぼしに来たと、この子が知つたらどうするだろう？ そう考えてぞつとした。

この子が天使なのだとしたら、世界を滅ぼそうとする自分たちを止めるだろう。天使とは世界を護る神の使いだ。神学ではそう言われている。まかり間違つても、世界の滅亡を望んだりはしないだろう。それならば、ツバサは自分たちの敵だ。戦うことになる。

だが、自分にこの子を斬ることが出来るだらうか？
今も無邪気に二コ二コしてユイにすり寄つてくるツバサ。
か弱い女の子だ。可愛らしい女の子だ。弱く、善良な存在だ。護つてやらなければならぬ生き物だ。そして、この子をカプセルから出したのは自分だ。

五皇国の犠牲者のこの子を斬る その覚悟はできるか？
無慈悲な裏神官として、手を下す覚悟はあるか？
考えながら、視線をめぐらせる。『破滅』を見つけたら。
もしもツバサが天使なら。

(……自分たちのこの子を殺さなければならない。)

絶望のまま世界を滅ぼそうとしている一人は、この子供を、殺すのか。

……殺せるのか？

何の罪もなくても、世界を滅ぼすのために殺す。世界が滅んだらどうせみな死ぬのだ。

遅いか早いかの違いだけ、それだけだ。自分に言い聞かせるようにそう考えた。それで納得ができるかどうかは別だったが。

ツバサは機嫌よく浮いている。ときどきユイやケイの顔を覗き込んできては何が楽しいのか微笑んでいた。一人がやることなすこと全てが物珍しいらしく、興味深々で眺めている。

……凄く、やりづらい。無邪気な視線のまえで『破滅』を探すといつ、わけの分からない状態だ。やりづらいことこの上ない。

それでもそのために来たのだ。警備の人間が来てしまったら自分たちは殺される。

警報が鳴り響く中、焦りを押し殺して辺りを探る。ごつごつした機械や、キメイラが閉じ込められている檻おりなどが目に入った。

「ケイ・カゲツ、あの辺の機械とかはどうだ？ 最終兵器っぽくないか？」

「あほ。あれはレーザーだ。あつちはただの銃。あの程度ならイグザイオに普通にある」

どれもこれもケイには目新しい物ではないらしい。『破滅』を呼ぶ最終兵器には到底なりえないものばかりだと彼は言った。

「それよりあのキメイラはどうだ？」

「いや、アレは弱い。『破滅』ではないだろ」

彼が指すキメイラの存在もユイから見たら同レベルのものである。これらのキメイラはとても『破滅』とは思えないくらいの弱さだ。裏神官にたやすく返り討ちにあつような『破滅』などありえない。

首を振ったとき、ガシャンと音がした。同じような音が続く。

……先ほど、キメイラが出てきたときと同じ音だ。

「まさか……」

嫌な予感は的中した。多数の檻からキメイラが続々と現れる。十や二十ではない。さすがに数が多く、コイ一人ではケイとツバサを護りきれないだろう。

「！ まずい……」

ケイが呻くように呟いた。キメイラだけでなく、機械が作動し始めたのがわかつたのである。容赦なくレーザーや銃弾を撃ち込むタイプのもので、完全に侵入者を殺すための兵器だ。キメイラで動きを制限されたところへ、銃やレーザーを撃ち込まれたら避けようがない。ユイだけなら逃げようがあるかもしれないが、ケイはまず間違いなく死ぬ。

どうやら警備陣にここに侵入したことが知られたようだ。キメイラはともかく、機械が起動するには人の手が必要。それを考えると、キメイラの檻を開けたのも警備陣だろう。

確実に侵入者をしとめるために。

「ツバサもいるのに……！」

彼女の存在を切り捨てたのだろうか。それとも彼女は無事逃れることができると見越してのことか。

確かにツバサが逃れることは簡単だろう。彼女には翼があるのでから、それで天井近くまで行けばいいのだ。

「ここまでか……！」

ユイも呻いた。助からないという直感が、痛いほどの絶望感となつて心を覆う。ここまで来て、『破滅』に触ることすらできずに死ぬのか。

この腐った世界を滅ぼしてやりたかった……！

「ツバサ、逃げろ

ケイが頭上のツバサに言い放つ。

「わかるな？ 上まで飛んで、じつとしてるんだ。そうすれば助か

るから」

「そうだよ、こいつの言つことに従つてね、ツバサ」

ユイもケイも、考えもしなかった。思いつきもしなかった。自分たちはここで死ぬのだと、覚悟していた。だから、失念していた。

ツバサもここに『封じられた』ところひとつを。

「だめ」

あどけない声がした。幼い少女の声。ツバサの声だ。ツバサはだめと言った。制止とも思えないくらいの普通の声音だ。そこには怯えはない。恐怖もない。キメイラや兵器に怖がる様子もなく、ツバサはすいとユイの前に出た。

「危ないっ！」

とつさに傘も刀も放り投げて、ツバサを抱え込んでかばったユイの目の前で、キメイラは地面に伏した。暴れる様子もない。凶暴そうな面相とうらはらな従順さで、待てと指示された犬のようにおとなしく伏せている。あつけにとられるゴイの背後でケイも気がついた。

「機械が停止した……？」

さきほどまでしていた作動音が聞こえない。目をやると、あちこちの作動を示す光が消えている。

「なんでだ？」

呆然とする。今何が起こったのだろう。ツバサが駄目と言つたらキメイラがあとなしくなり、機械が止まつた のだろうか？ 確信は持てない。ツバサはユイの腕の中で抱っこされたことにご満悦なのかにこにこしているだけだ。

「？ ツバサ、今なにかしたの？」

「なにか。なあに？」

本人はきょとんとしている。とぼけているようには見えない。こちらからの質問の意味が理解できていない可能性もある。さつきまで言葉も解らないような反応をしていたのだし、ツバサと意思の疎

通を図るのはまだ困難なようだ。

「この子がやつた……？　いまいち確信が持てんが、可能性としてはそれが一番高いのか」

ケイはそう言つてツバサを眺めた。にこおつと満面の笑顔を返される。

「解らん……」

すくなくとも外見からはそんなことができるとは思えない。大体、ツバサがまれなほどの能力者としても、ちから能力を使うのであれば必ず精神の集中が必要なはずだ。どんな能力者であれ例外はない。必ず一定の間集中しなければ能力は発動しない。ツバサが集中をしていたような気配はなかつた。魔法に呪文が必要なように能力には精神集中が必須なのだ。これは常識である。熟練者であれば魔法も能力も短縮の術はあるようだが、今ツバサは短縮して能力を使したのだろうか。

「……ツバサ？　短縮の方法つて知つてるか？」

尋ねるがツバサはやはりきょとんとするのみ。

「たんしゅく。たんしゅく？」

言葉を理解できてはいるようなので、単純に意味を知らないのだろう。やたらと楽しげにケイの言つた言葉を繰り返している。

「だめか。せめて意思の疎通は図りたいよなあ」

「そつー」

「……難しいようだぞ、ケイ・カゲツ」

ユイはツバサから手を離し、放り投げた傘と刀を拾い上げた。ツバサはそのままケイのほうへふわふわ流れてゆく。空気に乗つているかのようだ。

「とにかく、ツバサに助けられたんだろう？　ならお礼を言わない」と。ツバサ、ありがとうね

笑いかける。にこにこしながらツバサは返してきた。

「ありがとー」

「うん。感謝の気持ちだよ

「かんしゃ」

……ひとつひとつ教えていくしかなさそうだ。その時間があればの話ではあるが。

「それにも、『破滅』はどうあるんだ?」「まとわりついてくるツバサの頭をよしよしと自分でやりながら、ケイがぼやく。

いまや室内にあるのは『おそれ』しているキメイラの群れと、動かない機械だけである。

ツバサの光翼はずいぶん縮んで小さくなつており、今は彼女の小さな背を覆うくらいの大きさなので離れた場所は暗くてケイには見えないが、さつきまでの様子で大体のことは頭に入つた。

どれも『破滅』とは思えないものだ。目新しいものなどない。珍しいと思つたのはツバサの存在くらいだ。翼と尾羽の生えた人間など見たことはないが、表現するなら『天使』だらう。『破滅』といふ言葉とは真逆のイメージである。

ここにいたのなら、ツバサが『破滅』の詳細を知つているかもしないが、質問しても意味を解つてくれるかどうか疑問である。この子がもし天使なら、『破滅』のことなど答えてくれはしないだろうとの思いもある。

「ここには、ないのか?」

進退窮^{きわ}まつた。やはり当初考えていたように『破滅』の存在はダメだったのか?

五皇國がつくりだした、架空の存在。それを真に受けでここまで来てしまつた自分たちがひどく間抜けに思える。

「どうする。これ以上ここにいても意味はないぞ」

かといつて外に出てしまえば、警備に殺されるのは明らかだ。逃げようがない。ここに来るまではほほ一本道だつた。

その一本道に銃やいろいろなトラップが配置されているので、避けて通るのは不可能に近い。トラップの類は来るときは作動していくなかつたが、この分では間違いなく作動しているだろう。そのうえ

地上に戻る術はエレベーターのみである。

殺してくれといつてているようなものだ。

もとから命が惜しいとは考えていないが、この状態は悔しかった。せめて『破滅』に触れてでもいればまだ満足して死ねたものを。「他に道はないのか？ ケイ・カゲツ。『破滅』がいそくな隠し場所や隠し通路があつたりはしないか？」

「可能性は薄いけどな……一応調べてみる」

息についてケイは端末を起動させた。その辺の機械に接続して、そこからハッキングをしかける。ユイには何をしているかさっぱり分からぬが、これらの機械の大元に接続して何かするらしい。素早く端末を操作するケイの頭上でツバサが目を輝かせて端末を覗き込んでいる。

「なあに？ なあに？」

「これが？ これは端末。いろいろできる機械だ」

「いろいろきかい」

納得したのかコクコクと頷いている。本当に理解しているのかは不明だが。

それにしても人懐っこい子である。ユイとケイにここまでなつくとは、奇特な子だ。

ユイはあまり表情を表に出さないし、ケイもお世辞にも愛想が良いとはいえない。

特に子供好きでもないうえに、子供に好かれるタイプでもないはずだ。

天使のようなこの子に、どうして自分たちのような腐った人間がなつかれるのか不思議でたまらない。

「ツバサ、ケイの邪魔をしちゃだめ。大事なことしようとしてるらね」

言つて少女を抱えてケイから離す。

「……呼び捨てかよ、おい」

ぼそりとケイがぼやいたのが聞こえた。

意識してはいなかつたので言われて気がついた。

「ああ、そうだな。気にしてなかつた。気に障つたか」

「さわりまくりだ、暴力女」

「そうか。ではこれからずっと呼び捨てにしてやる。喜べ」「嫌がらせ以外のなにものでもない。ケイが嫌がるなりすつといつ呼んでやろう。

「今まで散々言われたイヤミのお返しだ。

「……この女どうにかして殺す方法ないもんかな……ゴキブリ並みの生命力だから洗剤か熱湯かければ一発か？」

ぶちぶち言つてゐる。「ゴキブリ扱いにはさすがにカチンときたので穏やかにやりかえした。

「うわあ、怖いねえツバサ。こんな大人になつちゃダメだよ?」

「ケイ、ダメ?」

「そうだね、ダメだね」

「にこやかにツバサにそう教えていると、ケイは唸つた。

「変なこと教えるなツ」

「わあ、こわい。怖いねツバサ」

わざとらじいまでの朗らかな声でそう言つてやる。

「く……ツ」

無邪気なツバサに言われてはさすがに強く出ることができず、ケイは歯噛みした。珍しく知恵使いやがつてなどと口の中で呴いているのもユイには聞こえていたが、勝つたと思つてるので不快には思わなかつた。

「ケイ、ユイ、なかよし。けんかだめ。ツバサいや。かなしい」
ブルブルと首を振り、ツバサはそう訴えてきた。真剣に一人がけんかするのは悲しいと訴えている少女の様子に、ケンカする気もしほんでしまう。

仕方なくユイはうなずいた。それとなく話を逸らすつもりで。
「う……うん。分かった……ツバサすいぶん喋れるようになつてしまね」

カプセルから出たときより大分語尾が増えてきている。このわずかな時間で、すさまじい学習速度だ。

「ツバサは一体何者なんだろうな」

端末を操作しながらケイは言つ。言われた本人のツバサは不思議そうだ。自分のことを言われていると理解しているようだが、答えは持つていないうでキヨトンとしている。

ツバサがここに封じられていた理由はなんなのだろう。危険な存在とは到底思えないし、危険度ならキメイラや銃のほうがよっぽど高い。

「ツバサはどうしてここにいたの？ 覚えることある？」

ふと思いついてそう訊いてみた。なにがあるはすだ、ツバサがここに封じられる理由が。

だが、ツバサが何か答える前に、物音が答えた。ズン！と腹に響く音だ。

「？！」

音がしたのは扉のほうだ。大分歩いたためツバサの光は扉に届かず、暗闇の中に隠れてしまっている。だから見えたのはユイだけだ。あの重い扉が閉じている。

「しまつた！」

あれだけの重い扉が自然に閉まるわけがない。警備が操作したのだろう。キメイラか銃で侵入者は始末できたと見越したのか。

「まずい。閉じ込められた」

ケイと力を合わせれば何とか開けられるだろうが、開けている間に狙われたらひとたまりもない。『破滅』にたどり着く前に終わるのは嫌だ。

とりあえずケイの検索が終わるまではヒマなので（キメイラも機械銃も動く様子は全くない）扉を安全に開ける方法がないだろうかと試してみる。刀で何度も斬りつけたら穴ぐらには開かないだろうかと考え近付くが、内側にも呪符が貼られているので反動が危ないとあきらめた。

ケイが作業中の今は位置的に彼をかばうのが難しい。ましてツバサもいるのだ。

二人を背にかばつて反動をうまくやり過げには、ケイにツバサを抱えてもらわなければならぬ。ユイの傘はいつぺんに複数を護られるほど大きいサイズではないのである。

「ツバサ、そつち行くな。ここにいてくれ、暗くて見えない」

ケイがツバサを呼んだ。ユイについてこよつとしていたらしい。本当にひな鳥のようだ。

こんな状況なのになんだかほほえましいな、などと感じてしまう。ツバサは本当に『天使』なのかもしれない。殺伐とした空氣もツバサがいると浄化されるような気がした。

ケイのところへ戻つていくツバサを目で追い 必然的にケイの姿も視界に入る。

光源のツバサが近寄り見えるようになつたのだろう。ケイは端末を覗き込み、そして彼の体に緊張が走つたのがユイには分かつた。何かまずいことが起きたとユイは直感する。

「ユイ！ 扉を開ける！ 開けないと俺たちは死ぬぞ！」

ケイの叫びで直感は正しかつたと知れた。

「分かつた、こっちに来い！ 扉の内側にも呪符があるんだ、お前たちがそっちにいると反動が殺しきれない、こっちに来い！」

叫び返すとケイは機械につなげていたコードを引きちぎるようにして離し、ツバサの手を引いてコイのほうへ走ってきた。すぐさま彼女の後ろに隠れる。

「ツバサを抱えてろよ」

「分かつてる」

彼の声には緊張がある。よほどのことを端末から拾つたのだろう。急ぐべきだ。

彼がツバサを抱えたのを気配で察してから、コイは刀を振り下ろした。

バチバチと火花が散り、彼女は愕然がくぜんとする。

呪符からの圧力で扉まで刃が届かない！

「……この！」

歯を食いしばって力を振り絞る。全力で刃を振り下ろそうとするのだが、呪符はそれを許さない。外側のものより内側の呪符のほうが数段強いものらしく、腕力ではびくともしなかった。

バチンと火花がはじける。ユイの刃は弾き返された。

「なんだ？！ だめなのか？！」

「弾かれる！」

特殊な書かれ方をしているのだろう。扉の外側のものはコイの刀でも斬り裂くことができたが、内側のものは物理的な力ではどうにもできないものらしい。すくなくともコイの刀の強度では話にもならないレベルだ。こうなると魔法士でなければどうにもできない。それも並大抵の魔法士では駄目だ。国家間のトッププレベルでないと無理だろう。

「どうにもならないのか？！」

ケイの声には焦りがにじんでいる。

ユイは何度も斬りつけたが結果は同じだった。この呪符には彼女の刃は通用しない。

「くうつ！」

何度も目かの火花が散った時、ユイの耳は音を聞いた。シュー。空気を排出するような音だ。

「！ くそ、終わりか……ッ！」

ケイが絶望に呻く。

「なんだ、この音？」

シュー。シューと音は勢いを増していく。

「消火剤だ」

「？ 火を消すアレか？」

「そうだ。火を消すものだ」

どこからか注がれてくるのだろう。音は強くなるばかりだ。

ケイはツバサを抱えたまま、うつろに言った。

「……酸素を書き消してな」

「！」

それでユイにも理解できた。火が燃えるためには酸素がいる。酸素さえなければ火は燃えることができない。

そして、酸素がなくなるということは呼吸ができなくなるということだ。

扉が閉まつた室内は密閉されている。窓どころか換気口もないのだ。すぐに息が苦しくなってきた。

「くう……！」

呻きながら扉に斬りつける。ここから逃げなければ。

自分たちが逃げることが不可能なら、せめてツバサだけでも！

ユイの背後でケイがのどを抑えてうずくまる。強化されていない普通の人間だ。耐えられる時間は短い。ユイでもさほど長くは耐えられないだろう。いくら強化されていても呼吸は基本だ。それができなくなれば無力化される。

「ツバサ……逃げるッ」

「そうだ、ツバサは通り抜けできるんだよね？　早くここから出で
！　逃げて！」

ケイはツバサから手を離し、コイはツバサを壁のほうへ押しやつ
た。ツバサだけなら逃げられる。

「はやく！」

「行くんだ！」

彼女たちの剣幕にツバサは驚き、そして首をかしげた。苦しそう
なコイたちを見て不思議そなそのしぐさでコイもケイも気づいた。
ツバサは苦しそうではない。キメイラでさえもこうで苦しみにの
たうちまわっている中で、ツバサだけが平然としている。どんどん
空気が薄くなつてきているこの室内で。

呼吸をしていないわけではないだらう。この地上の生物である以
上呼吸は必然的なもののはずだ。

何故？　そう思う間はなかつた。

「あつちいけ」

ツバサが一言呟いた途端、いきなり呼吸が楽になつた。普通に息
ができる。朦朧もうろうとしていた視界が開けて、事態が見えてきた。身を
起こしたコイとケイが見たもの。

自分たちの体を覆うように淡く光る薄い空気の膜がある。シュー
シューという音はいまだ続いていて、消化剤は注がれているようだ。
膜の向こうでキメイラが痙攣しているのがうかがえた。

屈強なキメイラが絶命しかかつていて、自分たちはなんともない。

二人はツバサを見た。彼女たちよりも小さな少女を。

「……これ、ツバサがやつてるの？」

空気の膜を指差しておそれおそれそういう訊いてみる。少女はじつく
りうなずいた。

「コイ、ケイ、くるしい。くるしいのよつてくる。ツバサ、くるし
いのあつちいけした」

そう、胸を張る。ツバサがやつたと思つて間違はないよつだ。

「…………うそだろ…………」

呆然とケイがつぶやく。にわかには信じられない。

消化剤からガードするだけでなく、同時にこの薄い膜内で酸素を造りだしているのだ。不自由なく呼吸ができるように。それもほぼ一瞬で。

とんでもない能力者である。いまさらながらそれが分かつた。

「ユイ、ケイ、くるしい？」

まだ苦しい？ と本人は心配そうだ。

「あ、いや、平気。もう苦しくないよ、大丈夫。ありがと、ツバサ」
ユイが笑いかけるとツバサはほつとしたのかやつと笑い、こう言った。

「ユイ、でたい？」

と、扉を指差す。先ほど必死で扉を斬りつけたので、よほどここから出たいのだと理解したらしい。

「う、ん。一応……」

氣弱に答える。どう反応してよいものか。ユイでも歯が立たなかつた扉だが、ひょっとしたらツバサには簡単に開けられるのではないか。

そう思つた次の瞬間には予想が的中したことを知つた。

ツバサが扉に向けて手を軽く振つただけで、あの重かつた扉がひとりでに音を立てて開いてゆく。

……もはや何もいえない。ぽかんと口を開けるだけだ。アレだけ苦労して一人がかりで扉を押し開けたのに、ツバサはいとも簡単に開けてしまつた。呪符も彼女には意味を成さないらしい。

「…………どうする？」

「どうつて……出るか、とりあえず……」

空気が抜かれていく室内に長居はしたくない。なによりも思考回路が停止してしまつた。

室内へ出た途端、天井に設置されていた銃から弾丸が連射されたが、察知したユイはあっさりとそれを斬りおとした。

続けてツバサが「いや」とひとこと。それで全ての銃が沈黙した。銃だけではなく、さまざまなトラップが全て停止したようだつた。

ツバサがやつたことはもはや明確だが、なにをどうしてこうなるのか。

魔法や能力ちからを行使したようには見えない。呪文どころか精神集中の様子もなかつたのだ。

「いや」のたつたひとことである。

「こ、言靈ことだまか？」でもあれは法曆785年に迷信とオルタ博士が公式発表したはず……ん、いや、それ自体がすでに五皇國の情報操作で、実は隠していた？ それならツバサがここに閉じ込められていたことも説明できる

なにやらケイがぶつぶつ言つている。脳内コンピューターで納得のいく理論を構築しているらしい。

「ことだま？」

聞きなれない単語たんごだったので訊いてみる。侵入した道を戻りながら。

「ああ、言葉ごんばを使っておよそ不可能と思われる」とをやつてしまつた。理論的には魔法に近いが全くの別物で、魔法は元素にしかアクセスできないが、言靈は言葉が及ぶもの全てに影響を与えることができると言っていた。ほほ万能だな

「それはたいそうな力だな。で、ツバサがその言靈使いだと？」

「ことだまー」

わかつていないツバサがふわふわ抱きついてくるのを受け止めて、ユイは会話を続ける。

「でも今、迷信だとか言つてなかつたか」

「それなんだ。高名な研究者が三十年ほど前にありえないと発表している。実際に研究が成功した例も残つてない。でもそれも情報隠滅の可能性がないとは言えないしなあ」

ケイが悩んでいる横でツバサはユイに構つてもうえてご機嫌だ。とてもそんなすごい力の持ち主には見えない。

「で、その『ことだま』ってやつはどうやって発動するんだ?」「何気なくそう訊いたコイにケイはあっさり答える。

「そりゃ言葉でだろ」

「……じゃあ喋れないと発動しない?」

「だろ?」

「ツバサは最初カプセルの中にいたぞ? あの中では喋ることなんて無理じゃないか?」

指摘にケイははつとしたようだ。カプセルを通りぬけてきたツバサを見て最初は能力者ではないかと思ったことを失念していた。

「そうか、そうだな、最初ツバサは言葉も理解していないようだつたし……くそ、お前に指摘されるまで気づかんとは! 頑固だ!」どこまでも腹の立つ男である。ツバサの手前、殴りたくてもできないのでなおさら腹が立つ。

「うーん、じゃあ一体ツバサの力は何に属するものなんだ?」

まだ悩んでいるので死ぬまで悩んでいようとまじめくことじてた。

今はとにかく『破滅』を探すのが先だ。悩んでいるケイはあてにしないでコイは自分で隠し通路などを探すことにして。あの部屋には存在していなかつたことは明らかなので、どこかに隠し通路があるはずだ。

『破滅』が本当に存在していればの話ではあるが、ここまで来て何もなかつたなど納得できない。あれだけの警備を敷いておいてなにもないほうがおかしい。

絶対に何かあるはずなのだ。

視線をめぐらせるコイをまねでいるのか、はたまた単に周りが物珍しいのか、ツバサも一緒にきょろきょろしていた。

通路に生えている光るゴケを触つては感心したようにうなずいている。

浮き上がりつて銃をツンツン触つたり、降りてきて床をじいっと見つめたりと、何でも珍しいらしい。外に出たことがないような態度

だ。そうするといつからあそこにいたのだろうと不思議に思う。どう見てもツバサは小学年ぐらいだ。幼児とはいかないと、言語能力はそれに近かつた。

言葉も知らないような女の子をこんなところに閉じ込めて、五皇國は何をするつもりだったのだろう?

ほめられるようなことではないことは確かだ。

「ツバサ、わたしのそばから離れたら危ないよ。」いつにおりで「よぶと素直に戻つてくる。可愛らしい。なんだか妹ができたみたいで少しくすぐつたいような気もある。こんな感情は初めてだ。

誰かを護りたいと思うことなど今までなかつた。

任務で仕方なく護ることは多々あつたが、自分の意思で何者かを護ろうと思うことなど初体験である。家族もおらず、友人と呼べる存在も作らなかつたので、ツバサのよう無邪気に寄つてこられるのはちよつと照れる。かといって不快ではないのが不思議だ。

ケイも似たような心境なのだろうか。彼のツバサに対する態度もケイと同じように柔らかい。小さな女の子であろうとすげなくするようなタイプだと思つていたのだが、そこまで嫌な奴でもないようだ。

ツバサはケイのほうに浮かんでいつて彼のまねをして腕を組んで首をかしげている。

ほほえましいが状況はそんなに優しいものではない。警報はあいかわらずけたましく鳴つているし、『破滅』は見つからない。

自分たちが追い詰められているのは変わらないのだ。

「ケイ、お前ここに何しに来たのか忘れてないか」

まだ唸つていたケイにやむなく突つ込む。この男の力がないと隠し通路を見つけるのは至難だ。

「あ? ああ、そうだった」

思考の迷路からようやく出る氣になつたらしく、ケイは端末を起動させた。先ほど無理に連結を切つたので、起動に少しかかると言つ。嚴重なプロテクトに押し入り、あげく強引に接続を切つて、そ

れでも壊れていないあたり、さすがに天才の作ったものといえよう。なまじの端末ならとうに壊れている。

「早くしろ」

機械にうといコイには遅いか早いかの違いしか分からない。せかしてうるさいと嫌がられた。

「機械オンチはだまつてろ。なあツバサ？」

ツバサにふられては言い返せない。コイは反撃の言葉を飲み込んだ。ケイがツバサに向かつて言つたのはちょっとまえの仕返しだろう。コイにしてやられたのがよほど悔しかつたらしい。

今度はどうやってやり返してやるうかと考えていたコイのマントをツバサがくいくいと引っ張つた。

「？ どうしたの、ツバサ」

「コイ、くる」

ツバサは通路の先を見ている。何かが来ると言つのか。コイはケイとツバサの前に出た。

警備が来たのだろうか。侵入者の死亡を確認に来たのかも知れない。扉が開けられたことを感知した可能性もある。どちらにせよ歓迎できる相手ではない。

できれば生け捕りにしたいところだ。ここに警備に『破滅』の存在を問いただすのが一番手つ取り早い。

コイはそう考えた。油断なく刀をかまえる。

簡単にことをなせると思っていた。ここまで入り込むのは容易だったからだ。

それが甘い判断だったと、彼女はすぐに知った。

足音もなく現われたのはコイが知っている人間だった。すらりとした肢体に銀色の髪。

五皇國の誰もが知っているだろう高名な 女。

コイは絶望的な気分でその名を呼んだ。

„...הנְּגָמָן... וְהַלְּבָד."

「ここで何をしているのです」「冷たい声が通路に響く。武器を構えている」ひらに對して身構えもしていないのは絶対の自信の表れか。

コイなど自分が手を下すほどの相手でもない、と。

セトラ・オウンゴン セイリオス第壹位の裏神官である。地位だけではなく実力もかねた第壹位だ。コイの戦闘術の師でもあり、彼女がかなわない唯一の相手もある。

「こたえなさい、コイ・ヒガ」

答えも何もここといふこと 자체が答えだ。それはセトラにも分かっているはず。

それでもあえて訊いてくるといふことは、弁解しだいでは殺さないということだろうか？

……いや、セトラはそれほど甘くない。コイはそう理解している。たとえ技を教えた弟子であろうとも、必要となればためらわずに殺す。

セトラがこだわるのは自身が仕える法王の身の安全だけだ。法王を護るためにどんなことでもする女である。法王を狙つた暗殺者は全てセトラに阻まれ、返り討ちにあつている。

それが法王の身内であつても例外はなかつた。数年前、法王の叔父が暗殺をたくらんだことがあつた。実行者は別の人間だったのだが、セトラはいとも簡単に実行者を捕らえて尋問し、黒幕の存在を知るなり暗殺に走つたそうだ。

襲撃からわずか数時間しか経過していなかつたといつ。すさまじいスピードはセトラの有能さと非情さを示している。

コイたちを殺すことなど瞬く間にやつてのけるだろう。セトラこそそれができるのだ。

ましてこちらにはケイとツバサという足手まといがいる。コイ一

人だったとしてもおそらくはまだ勝てない。もう数年もすれば勝てると思っていた相手ではあるが、今はまだ無理だ。ケイとツバサを置いていけば逃げられるかもしれないが、そのつもりは毛頭なかつた。

ケイだけならともかく、何も分からぬツバサを置いていくのは大嫌いな五皇国がやることと同じことだと思うからだ。

弱いものを見捨てるのは　五皇国と同じになるのは死んでも嫌だ！

ユイは手のひらがじつとりと汗ばむのを感じながら口を開いた。

「あなたこそ、何故ここにいるのだ、セトラ・オウン」「ン」

「訊いているのはこちらです。質問に答えなさい」

セトラは無碍もない。隙あらばどうにかして斬りかかるうとユイは構えてはいるものの、無造作に見えるたたずまいには全く隙が見えない。これがユイとセトラの実力の差だろ？

動けない。動けば終わる、それが分かる。

どうすればいい？　ケイには無論のこと頼れない。ツバサに危険なことはさせたくない。

自分がおとりになつてケイとツバサを逃がすことができればいいのだが、セトラを引きつけることができるかどうか。

陽動だとすぐに見抜かれる可能性が高い。セトラは仕事上、ケイのことも知っているはず。彼が戦闘に関しては素人に近いことくらい理解しているだろう。

セトラが陽動だと見抜けばケイもツバサも瞬時に殺される。残つたユイもいわずもがなだ。

生き残ることが無理なら、せめてツバサだけでも逃がしたい。五皇国の犠牲になるのは自分たちだけでたくさんだ。

「ケイ、覚悟を決める」

「……わかるてる」

ケイは小声で答えた。彼もセトラのことは知っているのだ。恐ろしく強い女。おそらくユイでも敵わないとも理解しているだろう。

ケイから見たならユイも充分強い女だが、セトラはその上を行く。

普段セトラは法王の神殿に常駐しているはずなのだ。法王を護る

ために法王から離れない。

そのために、法王の愛人なのではないのかと、下世話な連中に揶揄やゆされるくらいに。

「……！」

雷光のようにケイの脳裏にある想像が浮かんだ。

セトラ・オウンゴン。決して法王から離れない女。法王から絶大の信頼を寄せられている存在。今ここにいるわけがない女性。

その彼女がここにいるということは 法王もここにいるのではないか？

何故？ ぐるぐるとケイの中で思考が回る。

ラグドラリヴ。

『破滅』が眠る地。誰も入るはずがない場所。それなのに地図が存在している。

ここに入る何者かの存在を示唆する地図。^{しき} どこの国にも存在する同じ地図。

それが意味することはなんだ？

法王が、セトラ・オウンゴンが何もないはずのこの地に滞在する理由とは？

「ここにいる理由……まさか」

ケイはセトラを見た。依然として動かない『銀の殺戮者』を。

「あらんだな、ここに。存在しているんだな？！ 『破滅』が！」

セトラは動かない。ただ、その目を細くした。

「賢いというのは不幸ですね。ケイ・カゲツ」

返答でケイは理解した。セトラは『破滅』が存在していると答えたも当然だ。

「あなたは優秀だと聞いていました、ユイ・ヒガも優秀な教え子でした。あなたたちが何を考えてこんなことをしてかしたのか……わたくしには分かりません」

口調は穏やかだが、決して優しくはない声が告げている。

ここでお前たちは死ぬのだと。

「残念です。とても」

セトラが動こうとした。そこまではコイにも分かった。そこからは一瞬だらう、そうも思った。

死ぬ。殺される。せめて一太刀でも浴びせてやりたい……！ セトラが踏み込んでくるタイミングをえ計れれば一撃くらいは叩き込めるはずだ。

コイの刹那の願いはかなわなかつた。

「……」

セトラが動きを止めたからだ。あのセトラが愕然がくぜんとしていた。視線はコイの背後に向いている。そこにいるのはケイと ツバサだ。さつきまでコイのマントに隠れている位置にいたツバサが、コイの肩の辺りまで浮かんできている。

セトラが見ているのはツバサだった。

目を見張つて驚愕に震えている。

「何故……！ どうやって……！」

あきらかにツバサに対して言つている。この小柄な少女に怯えているようにも見えた。

その理由がコイとケイには分からぬ。ツバサは別段何かしようとしたわけでもなく、ほよんと浮いているだけだ。少女がセトラに怯えているような様子もない。まあ、ツバサはセトラのことなど知らないだらうから、怯える理由もないのだろう。

「おまえ、コイとケイいじめるのか」

むつりとツバサは言った。セトラが何者か分からなくてコイ達に危害を加えようとしたのは分かつたらしい。

「つ？！ もう話せるよつに……！ おとなしく眠つていればいいものを！」

叫んでセトラが腕を振った。コイはセトラが使う武器を知っている。透明な極細の鋼線だ。強化された人間がそれを放つと視認する

のはほぼ不可能だということまで知っていた。

防ぐことはできない。ならばこの身をもつて盾とするしかない。

運が良ければマントと制服でなんとか即死はしないだろう。

さすがにコイの体で邪魔されではツバサに鋼線は届かないはずだ。そこからどうするかは考えてはいなかつた。ただ、ツバサを護りたい一心だったのだ。

「おまえ、きらい」

ツバサはセトラに向けてそう言つた。ただの一言。

そのひとことで、盾になつたコイの体にさえセトラの鋼線は届かなかつた。

じゅう。熱した鉄板に水を落としたときのような音。何が起きたのかコイは我が目を疑つた。

魔法的技術を駆使したであらうセトラの武器が、あっけなく無効化されたと氣付くまで数瞬。鋼線が蒸発したのだ。

防ぐとか、そんな問題ではない。

まるでお話にならないほどの無効化だ。ありえない。セトラが使う鋼糸は特注のもので、最高クラスの魔法がかけられているはずだ。生半可な方法で無効化できるはずもない。

それを、ツバサは簡単に蒸発させた。

そばで見ていたケイにもツバサが何をしたかは分からなかつた。

「！！かなわない、というのですか……」

セトラはツバサを見ている。コイもケイも無視して、彼女たちよリさらに幼い少女を警戒している。

田を逸らせばツバサに殺されるとでも言つような警戒振りだ。セトラのような重鎮がツバサの何を一体そこまで恐れるのだろう？この天使のような女の子の一体どこが怖いというのだ。コイには理解できない。

「なんだ？ 何故そこまでこの子を恐れる？ ツバサが一体何をしたって言つんだ」

分からぬ彼女の背後でケイはしばらく考えて、落ち着けども

言つようにユイの背をぽんと叩いてきた。

それから口を開く。

「セトラ・オウンゴン。一つ訊きたい。子供の質問に大人は答える義務がある。そうだろう?」

答えを待たずにたたみかける。

「この子は封じられるような存在か?」

『破滅』が眠るはずの場所でユイとケイはツバサに会った。他には目新しいものは何もなく、なのに厳重な封印がされていた。封印が向けられていたのはどこにだ?

『誰に』だ?

訊きたいことは一つ。

ツバサが五皇國にとつてどういう存在か。

セトラは笑つた。愚かな子供だと言いたげにケイを嘲笑つた。

「知らずにいるのですか? ならば見たものが全てです」
答える必要はない、セトラは言いたかったのだろう。
だがケイにはそれで充分だ。過ぎるほどの情報を得た。
そして確信した。

「なるほど。理解した。切り札ということはな」

その声にセトラは顔色を変えた。失言に気がついたのだろうがもう遅い。

「ツバサ、力を貸してくれ。あの人をどこかへ追つ払うことはできるか?」

そう言つてケイが指差すと、セトラに対していたときとはうつて変わつて上機嫌にツバサはうなずいた。

「できる。ケイ、あいつきらい? ツバサ、いないといできるよ
「そうか。してくれるか?」

「うん」

セトラが動いた。ケイを先に叩くべきだつたと今更ながらに判断したのだろう。

だが、遅い。ツバサはセトラを見た。それだけである。何も言葉

は発しなかつたし、特に念じたようにも見えなかつた。

それだけでセトーラは吹き飛んだ。まるで透明で巨大な手に突き飛ばされたかのように勢いよく吹き飛び、壁に激突するかと思つたら、壁をすり抜けでどこかへ消えた。

— ? ? !

コイにはさうぱり理解できない。唯一わかるのは、どうやらツバサに助けられたということだけだ。能力者や魔法士との戦闘にも熟達しているはずのセトワをあっけなく退けたといふこと。

い、今、一体何が起きた？

振り返る。ツバサは変わりなく浮いていて、ユイにこり笑いかけて抱きついてきた。

「バサが何かしたの？？」

だかひジバカもあーひーちー

ユイとケイが嫌いな人間だからツバサも嫌いになつたと言う。そ

גָּדוֹלָה

「いいいいいつて」

分からぬ。ツバサの今の語尾では説明されてもこちらが理解不能だ。

「編集部」

なるほどな

ケイは理解したようだ。ユイが説明しようと彼を見ると、彼は苦笑した。本当に苦笑みだ。

「今まで気付かなかつたのが不思議でたまらん」「なごみ」

促すと、ケイはツバサを見てまた苦笑した。

「『破滅』となむひ出合つてたつてことだ」

彼の視線は、ユイにじやれついているツバサに向かられている。

「……この子が？」
『破滅』？
『厄災』？

四章・壁……越えるべきもの・2

背中に光翼と尾羽をもつ天使のようなツバサが、世界を滅ぼす『破滅』？

コイは思わずまじまじとツバサを眺めた。あどけなく、無邪気な笑顔が返ってくる。まさしく『天使』のような笑顔だ。

「……ありえないだらうそれは……」

納得できずに咳く。到底信じられる話ではない。

信じろというほうが無理な話だ。

「こんな小さな子供が『破滅』？『厄災』？世界を滅ぼすもの

？ そんなわけがないだらうが」

コイの意見にケイは肩をすくめた。

「俺もそう思う。でもな、セトラほどの中鎮がなんであそこまでツバサを警戒するんだ？」

どうしてツバサはあんな場所に封じられていたんだ？ 考えてみるよ、あそこにあつたものは全て内側に向けられていたんだぞ。内側にあつたのはなんだ？ その中にいたのは誰だ？」

内側に向けての警戒が厳重な施設。通路を進むごとにじつじつとした封印と銃器が増えていった。

あげくのてのあの封印されていた部屋。中にはキメイラの群れと強力な兵器が、これまた内側に向けられていた。

その部屋の中心にあつたカプセル。

その中にいたのは　ツバサだ。死んでいると思っていた彼女は謎の液体の中でも生きていって、あげく厳重な封のされているカプセルからすんなりと抜け出してきた。

少なくとも、並の人間のできることではない。コイとてそのくらいは理解している。

それでも特殊な能力者か、魔法士なのだろうと想像していた。人間外だというのなら『天使』だらうと思つていた。清らかで、美し

く、世界を護るものだと考えていた。

「どう見ても『破滅』を連想するような要素はツバサにはなかつたからだ。」の少女が『破滅』ならばコイにだつて世界は滅ぼせるとも思ひ。

「こんな小さな女の子が『厄災』で『破滅』だなんて……五皇国は頭おかしい集団か。この子に世界が滅ぼせるようならわたしにだつて滅ぼせる気がするぞ？」

「まあ、お前は人間凶器だから破滅といつても嘘ではないけどな」失礼なことを否定せずにつなぎながら、ケイはツバサに手招きした。ツバサは喜んで、じゃれつく子猫のようにケイにくつづいていく。

「ツバサ、ここにはどうやって連れてこられたのか覚えているか？」問うと少女は首をかしげた。覚えていないのかとコイは感じたが、ケイは質問を変えた。

「そうか、じゃあ訊き方を変えよう。ツバサは連れてこられたのか？　それとも最初からここにいたのか？」

「ずっといたよ」

ツバサはあっさりと答えた。自分は連れてこられたのではなく、最初からここにいたのだと。

「ツバサがさいしょ。あいつらきた。ツバサのこときらつた。ケイとユイ、ツバサきらいじゃない。だからツバサ、ケイとユイすき」

そう言つてあどけなく笑う。コイはケイを見た。ケイは真剣な顔で考え込んでいる。今ツバサから得た情報でいろいろなことを予想し、整理しているのだろう。コイには判断できないこともケイにはできるのだろうから、彼が何か言い出すのを待つた。

頭を使うのはケイの役目だ。その視線の前で、何か思いついたのが彼は質問を重ねた。

「……嫌われているのか？　どうして？」

訊かれて少女は困ったように眉を寄せた。

「わかんない」

何故自分が嫌われているのか、その理由は分からぬがとにかく嫌われているのは理解できるらしい。

「分からぬの？ でもどうやってあんなふうに封印されたのかとか、ちょっととは覚えてないの？」

「ツバサ、ねてた。わかんない」

ユイの問いにツバサは怒られたと感じたのかしょんぼりと答える。「ああ、いや、ツバサは悪いことないよ？ そんな顔しなくても大丈夫。嫌いになつたりしてないからね？」

そういうてあげると安心したのか笑顔に戻った。その表情を見てユイもホッとする。やっぱりこの子には笑つていてほしい。「寝てた？ ……あの液体の中で呼吸もしないで生きていられるのか？ いや、仮死状態になつていたということもありえる……？ 純粹に睡眠なんてあの状態で取れるわけがないし……」

ぶつくさ言つているケイは、また自分の思考に入り込んでいるらしい。

ばかりと殴つて引き戻す。

「ツバサを人間外扱いするな。どうからどう見てもかわいい女の子だろうが」

「あほ。別に入外とは言つてない。ただ五皇国の連中が俺やお前のように考えはしないだろうと言つてるんだ。それにツバサはどう考えても普通の能力者ではないぞ。な、ツバサ？」

ツバサはうなずいたが、理解しているかどうかはちょっと怪しい。「で、でも」

まだ納得できないユイにケイは壁を指してひとこと。

「あのセトラをあんな風に退けることが普通の人間にできると思つか？」

説得力のある言葉だつた。さすがにそれには反論できない。ツバサがセトラを退けたのは間違いないだろう。ユイでもケイでもないのだから、ツバサしかいない。

「……『破滅』？」

ツバサを見る。本人はそう呼ばれてもきょとんとしていた。

背中の光翼、尾羽さえなければ普通の女の子で通じる。

それはユイとて同じことだ。

傘から刃を引き抜きさえしなければ、普通の少女で通じる。

ケイだって、口を開きさえしなければ」く普通の少年だ。

特に育つた彼女たちだって歩いている分にはとても裏神官や軍

人には見えない。

ツバサもそれと同じなのだ。ユイはそう思つことにした。

たとえこの子が人間でなくとも、『破滅』であろうとも、ツバサ

はツバサだ。

「で、どうする」

ケイにそう言われ、ユイは眉をひそめた。何を訊かれたのかが分からぬ。

「なにが」

「なにがつて、何しに来たのか忘れたのか？　俺たちは世界を滅ぼすために『破滅』を探してたんだぞ？」で、目の前にその『破滅』がいるんだ。どうする？」

改めて言われてようやく気がついた。そもそもラグドラリヴに潜入したのは世界を滅ぼすためである。この腐りきった世界を消し去るために、自分の命を捨てる覚悟でこんなところまで来たのだ。

……今、目の前には探していた『破滅』があどけない顔で存在している。

ツバサから視線を逸らしてユイは思わず叫んだ。

「宝玉でも魔法でも兵器でも火の神でもミイラでもないじゃないかつ？」

ケイも負けじと言い返す。

「俺に言つてもしょうがねえだろうがッ？」

言い伝えなど微塵も関係ない、可愛らしい女の子の姿だ。さすがにこれは予想していなかつた。こんな事態は考えてもいなかつたため、ユイもケイも動搖が隠せない。

いたいけな少女に世界を滅ぼしてほしいと頼むのははつきり言って気が引ける。

これが兵器だの魔法だのミイラだの宝玉だの火の神だと間違いなく人外の存在とわかるものなら、躊躇なく世界を滅ぼせと命令するなり頼むなりできただろうに、現実は天使のような女の子で、自分たちのような人でなしにさえ子猫みたいになつてくる。

いくら裏神官のコイでも、初めて護りたいと思つた存在に世界を丸ごと滅ぼせとは言えなかつた。

したがつて、

「お前言え」

ユイはケイに押し付けた。

「てめえ、卑怯だぞ？！」

ケイも心境的にはユイと同じらしい。何を見ても大喜びするツバサに、世界を滅ぼせと頼むのは、酷なことを望んでいるのではないかという気がするのだ。少し金があれば誰でも手に入れられる（ケイの物は特注なので他にはないのだが）端末の存在さえ知らなかつたツバサ。自分たちの言つことについちいち楽しそうに反応を返してくれる少女。

おそらくは封じられていたために外の世界を知らないのだろう。言葉も知らず、名前さえなかつたこの子に世界を消し去つてくれとは頼めない。

「どうか、ツバサにそれができるのか？ ひょつとして五皇国の連中がなにか勘違いしているということはないか？」

「ないとは言えんが……ツバサが何らかの力を持つているのは確かだぞ」

「それだつて『ちょっと特殊な能力者』くらいのものかもしれないだろ？！」

どうにかしてツバサが『破滅』ではない可能性を考え始める。今までツバサが一人に見せた力はかなりのレベルのものではあつたが、世界を滅ぼすほどのものではないよう気がする。命を奪うとか、

何かを壊すなどの破壊的な力は使ってはいけない。

作動していた銃器は止めたが、あれも壊すというよりは穏やかに

止めたという感じだつた。

「……確かめる方法はある」

「本當か？ どうするんだ？」

身を乗り出すユイにケイは苦々しく答えた。

「実際頼んでみればいい」

「却下だ！！」

「それしかないだろ、確かめるのは」

ツバサを見る。少女は二人が何を心配しているのか分かつていな
い。きょとんとして一人を見見下ろしていた。

……何も言えない。ツバサの前で睨み合うわけにもいかず、二人
は息をついて妥協した。

「……とりあえず、脱出しよう」

「……そうだな」

とにかくここから脱出するべきだ。セトラはツバサが退けてくれ
たが、他の警備が来ないとは限らない。ここは決して安全な場所で
はないのだ。

四章・壁……越えるべきもの・3

どうやって脱出するかも問題だつた。地下道は一本道で、地上に戻る方法はエレベーターだけ。隠し通路でもないかと端末に残つていたデータで探してみたが、そんなものは一切なかつた。

しかしこのまま進むのは自殺行為だ。エレベーターで上に上がつたところを狙われたらひとたまりもない。出入り口が一つだけの場所では回避のしようがないのだ。

うう、と悩み始めた二人をツバサは不思議そうに眺めている。

「でたい？」

何を悩んでいるのだろうと言いいたげだ。

「うん、でもね、問題があつてね」

「この先には怖い人がたくさん待つてる。このまま行くのは危ないんだ」

説明する一人に、ツバサはコクコクと頷いてから、何か思いついたようだつた。

目を輝かせて天井を指差す。

「ツバサ、できるよ。ユイとケイだしてあげる」

その声につられて見上げた二人の視界が一瞬ぶれた。

「？」

あれだけ鳴つていた警報音も聞こえなくなつたと思い、その上とんでもないことに気が付いたのは二人同時だつた。

「……星……？」

視界一面を埋めるかのような星空。ちょっと今まで、ここは地下だったはずだと気付いて周りを見渡す。

景色は変わつていた。瞬きをするまではどこを見ても地下の岩壁とコケだつた風景が、今は緑生い茂る草原だ。

たつた一瞬。

それこそ瞬きをするそのわずかな間で、自分たちは地上に出た、

らしい。

疑つてしまつような状況だが、ここの大気は澄んでいる。地下の換気もできないようなよどんだ空気とは全く違つた。

「ま、まぼろし……じゃ、ないよな？」

ケイを見る。彼もユイを見た。お互いの目には『信じられない』と太い文字で書かれている。今一体何が起つたのか。自分たちは確かに地下にいた。逃れようがない状態で心底から困つていたはずだ。

それがなにをどうして地上にいるのか。言葉で説明するのは簡単だ。それを意味する言葉は存在している。たつたひとつ『瞬間移動』と。

「ツバサ、だよな、コレは間違いなく」

ツバサがやつしたこと意外に可能性はない。ユイは魔法士ではないし、ケイも能力者ではないのだ。

「……とんでもないな、しかし……」

あきれたようにケイは呟いた。驚くしかない。多人数を連れて、しかもタイム・ラグのない瞬間移動だ。ツバサが精神集中している様子はかけらも見受けられなかつた。だしてあげるといった直後にこれだ。

ありえない。

すくなくとも五皇國に存在している公式記録上で、こんなことができる者は存在していない。裏の記録でも珍しいくらいのレベルだ。今現在存在している魔法士、能力者の誰をとってもこんなことができる者はいないだろう。

それは、ツバサがケイの知つていいどの存在よりも強力な力を持っているということを表している。

「……『厄災』……この子が、『破滅』……」

再び唸り始めるケイである。どうしても納得できない。

その横でユイはぽかんとしていた。

目の前でこんなことをされると、さすがにツバサがとんでもない

力の持ち主と実感する。

当の本人はユイにニコニコ笑いかけていて、自分がどれだけ途方もないことをやつたのかという自覚もないようだったが。

とりあえず、今ユイがやることはツバサをほめてやることくらいしかない。

「あ。ありがとうね、ツバサ」

手を伸ばし、なでてあげると本当に嬉しそうにツバサはにっこり笑う。

こんなにかわいいのに。ヒュイもどうしても納得できない。この子に『破滅』だの『厄災』だのという単語は似つかわしくない。

やつぱり何かの間違いだ。そう心に折り合いをつけたユイに現実は襲いかかってきた。

月だけが穏やかに照らしていたラグドラリヴの草原を、人工的な光が、音が切り裂いてゆく。

どうやら侵入者が屋外に逃げたことが警備に知れたらしい。一体警備の人間が何を感じているのかユイには分からなかつたが、とにかくぼやぼやしていると危険だ。見つかつたら容赦なく殺される。なにせラグドラリヴという土地は、中に入つただけで死刑になるような場所なのだ。のうのうと突つ立つていたらあつという間に蜂の巣にされる。

「逃げるぞ」

「それしかないな」

我に返つたケイとうなづきあつ。とりあえず『破滅』には触れたようだが、世界の滅亡を頼むわけにもいかない『破滅』と分かつた以上、ここで死ぬのは嫌だつた。なによりこの、常識どころか何も知らない『破滅』を放り投げて殺されるわけには行かない。

『破滅』　ツバサを護らなければ！

「どっちの方向に行けばいい？」

「とりあえず、ヒニア方向に逃げよう。そっちが近い」

端末を切り替ながらケイが指示する。

国境を抜けてしまえば、一時的にせよ追っ手はふりきれるはずだ。少しでも時間が稼げたら、どこかに潜入して隠れることができる。

「よし。ツバサ、行こう」

「いく?」

不思議そうにツバサは小首をかしげる。

「そう、逃げるの。外に行くんだよ」

「そと」

「いまいち分かっていないようだが、コイたちについてくる気はあるらしい。」

「ほら、ツバサ、行くぞ」

『破滅』はケイの差し出した手に嬉しそうにしがみついた。それだけでユイにもケイにも充分だった。

この子を護るにはただそれだけで充分だった。

ぬくもりを知らない裏神官と軍人にぬくもりを教えてくれたのだから。

護るものを持たなかつた彼女たちが、初めて護りたいと思うものを得たのだから。

たとえそれが万人に認められないものでも、もはや手放せない。手放すことなど考えたくもなかつた。

世界を滅ぼしに来た先で『破滅』を護りながら逃げることになるとは、皮肉もいいところである。それに気付いてユイは苦笑した。世界を滅ぼすと思っているのに、その気持ちに変わりはないのに、でも、妙に心は晴れやかだ。何故だろう?

『破滅』が目の前にいるからだろうか?

いつでも世界を滅ぼすことができると思つてゐるから?

……そりやないな、と彼女は思つ。

ツバサにその力があるなどと、全く信じていない。できるとは微

塵も思つてない。

万が一ツバサにそんな力があるとしても、コイにもケイにも頼む氣はさらさらないのだ。

この子に腐りきったこの世界を背負わせる氣など毛頭ない。押し付けることなど考えたくもない。もつと他の未来をツバサにあげたい、そう思ひようになっていた。

自身の未来など何一つ求めず、希望も持たなかつた少女と少年は、あろうことか『破滅』に対して未来を、希望を『えてやる』とし始めた。

それは他人から見たならば滑稽なことに見えるだろう。

愚かなことだと笑うものもいるだろう。

けれど、きっと、ほかのどんなことよりも彼女と彼には。

どんなに急いでとも強化されていない者と一緒に走つていれば追いつかれるのは時間の問題だ。まして追っ手は、丈の長い草に邪魔されないフライングカーに乗つているのが独特のエンジン音から判別できた。距離がかなり離れていたが裏神宮のコイには聞き落とさず判別できる。魔法を惜しげもなくつぎ込んだ空飛ぶ車だ。やたらと高価な上、コストがかかるスピードもあまり出ないので、そちらで見られるものではないが、ラグドラリヴの警備には採用されたらしい。足場の悪い草原を四苦八苦して逃げているコイたちにはすこぶる分が悪い。

その上、夜には目立ちすぎる光翼のツバサを連れている。追うのはさぞかし楽だろう。

なにせ他には何もない土地である。遮蔽物がないため、草の上を飛んでいるツバサの光はかなり距離があつても丸見えのはずだ。

「ツバサ、その羽しまえない？」

さほど期待はしていなかつたが、コイは一応訊いてみた。このま

ま走つてゐると追いつかれてしまつのは日に見えてゐる。せめて目印になるツバサの光翼が抑えられるなら、まだ視覚的にはごまかせるのではないだろうか。

「しまう」

ひょんと光が消えた。光源がいきなり消えたので、月の明かりに目が慣れていないケイが足元を取られてすっ転ぶ。

「な、なに？ その羽しまえるのか？！」

起きあがつてそう叫ぶケイの気持ちが悔しくも理解できるユイである。しまえるのなら最初からそうしてもらえば良かつた。

「しまう。できる。だめ？」

ツバサは不思議そうだ。何故か地面に降りてしまつてゐる。

「ううん、だめじやないよ。できれば外に出るまで夜の間はそつしつてほしいな」

ユイがそう言つとツバサは「ククク」うなづいた。

「行くぞ」

とにかくツバサの光が消えたのなら、わずかの時間でも追つ手を「まかすことができそうだ。今のうちに距離を稼ごう」と走り出そうとして、気付いた。

ツバサが飛ぼうとしない。さつきまでユイたちにあわせた速度で飛んでくれていたのに、今はユイたちと同じように地面を走つている。いかに『破滅』とはいえ子供の足だ。速度は格段に落ちていて、まして、ルバサは裸足なのだ。

「……もしかして、ツバサは羽出してないと飛べないのか？」

「とべる」

言うなりホワンと浮かび上がる。が、そのすぐ後に背中に光翼が現れた。

「……ツバサ？ 羽、出てるよ？？」

ユイが指摘すると本人は困った顔になつた。

「むづかしい」

どうやら本人としては光翼が出ている状態が普通らしい。しまう

とかえつて意識してしまい、力を使うのが難しくなるようだ。この分では力の制御方法も知らないのではないだろうか。それはそれで気になることではあるが、安全な場所まで逃れてから改めて心配することだ。

「……仕方ない。わたしが抱っこしていくから、ツバサは羽しまつててね」

時間が惜しいので、ユイはツバサを抱えていくことにした。ケイを抱いでいくよりは百万倍ましである。ツバサは小さくて軽いのでその点でもケイより楽だ。

「行くぞ、ケイ」

「ああ」

さすがにケイも今は毒舌を発揮しなかつた。ユイとしては怪力怪獣女くらいのことは言つてくるかも知れないと予想していて、言つてきたら即座に全力で足を踏んでやろうと準備していたが、彼が何も言つてこなかつたので惨劇は起こらずに済んだ。

そのまま走り出す。ツバサを両手で抱え込んだ状態で追っ手に追いつかれたら対抗の仕様がない。

今のうちになんとかして国境まで近付かなくては。ヒニアはセイリオスとあまり国家間の関係が良くない。今ここにいるのがセイリオスの要人ならヒニアに入ってしまえばそう簡単に手出しきなはずだ。コイはそう考えていた。

甘い予想かもしない。ケイは走りながらそう考えていた。五皇國のどこからでもいける土地、ラグドラリヴ。どこの土地にもある『破滅』の伝承。どれも全て実在の『破滅』であるツバサからは遙かに外れたものではあるが、裏を返せばそれは本物をカモフラージュするためではないのか？

あれだけ外れたものを世間に広めておけば、いざ本物と出会ったときそれが『破滅』とは思えない。

実際ユイとケイはツバサと行動を共にしているのに信じられずにいる。

そして、だからこそヒニアへ逃げること甘い予想ではないかと感じた。

『破滅』の伝承はどこの中にもあるのだ。

それが意味することはすなわち、どの国も『ツバサの存在を知っている』のではないかということ。

セイリオス、イグザイオのみならず、ヒニアやホマレ、シルメリア　五皇國の全てが知つていてツバサの存在を隠しているのではないか。

だとしたら、この件に関して五皇國は結託しているのかも知れなかつた。『破滅』に関するだけは国家間がどうこう言える問題ではない。國家うんぬん言つてゐる間に世界 자체が消えてしまう可能性があるのだから、自國を滅ぼすよりは他の国と手を結ぶほうを選ぶだらう。そう仮定すれば、自分たちが逃げる場所などどこにも

なくなる。

世界の全てが敵になるのだから。

……今更だ。ケイはそう気付いて薄く笑った。世界を滅ぼすつもりでここまで来たのだ。世界が敵に回らうが怯える必要はない。『破滅』であるツバサを護ることを決めるよりも先に自分たちは世界に絶望し、決別したのだ。

滅ぼそうという気持ちに変わりはない。ただ、それをツバサに頼む気がないだけだ。

自分たちに世界を滅ぼす力があれば、とうにやっている。

ただ、それはツバサに会う前限定の話だ。会ってしまった今となつては、ツバサを連れてとにかく生きて逃げることしか考えていなし。命を捨てるつもりでラグドライヴに入ったのに、出るときはどうやってうまく逃げるかを考える羽目になるとは、人生というヤツは分からぬものである。

「…ケイ、止まれ」

思考しながら走るケイの背後からコイは待つたをかけた。

「？ なんだ」

「囮された」

言葉短く彼女に指摘され、ケイは言葉を失つた。

「……本当か」

「間違いない……後ろの連中はこいつの氣を引くためのおとりだったらしい」

苦くコイはそう言つた。草むらに隠れている連中は気配を隠してはいるものの、裏神官の彼女には感じとれる。その数、十数人と見えた。

無論、コイにとつてはたいしたことのない相手である。それでも片付けるまでにはそれなりの時間がかかるだろう。その間に後ろの連中に追いつかれたらそれで終わりだ。

こんな簡単な陽動に引っかかるなんてとコイは唇を噛みしめた。

足を止めた彼女たちの周りに次々とフライングカーが停止する。

それと同時に身を潜めていた追っ手も姿を現した。全ての人間が武器を携帯している。それも確実に人を殺傷する類のものだ。

自分たちを生かして返すつもりはなさそうだ。せめてツバサだけでも逃がしたい。

けれど肝心のツバサは周りを囲まれているというのに光翼を出すそぶりさえ見せない。

武器を向けられているのに、怖がる様子もなかつた。フライングカーを見て、不思議そうにしている。コイは苦笑してツバサを地面に下ろした。

ツバサはどうしたのと言いたげにこちらを見上げてくる。もう駄目なんだよと答えるのはあまりにこの子が可哀想で、コイには答えることができなかつた。

「待て」

追っ手がいまにも発砲しようとしたとき、男性の声がそれを止めた。

追っ手は発砲をやめたが銃口を下ろさうとはせず、道だけを開ける。

まるで質の悪い映画の一シーンのようだ、とケイは考えた。ありがちすぎる。威儀を出すための演出だと、すぐに理解できた。

コイも声を聞いて誰が来るのか確信した。何度も画面越しではあるが聞いた声だったからだ。

開けた人壁の間を歩いてくるのは五皇國の住民なら確実に知っている顔。

「まだ子供ではないか」

そんなことを言いながらコイ達に近付いてくる その男。

法王、リリード・セイリオス。セトラが仕える金髪の男。もう青年というような年齢ではない。けれど中年とあらわすのは気が引ける、そんな感じの男性で女性に人気があるとはコイも知っていた。顔が良いだけではもちろんなくて、政治的手腕もかなりの腕前だとケイ

は知つてゐる。

そんな男がなぜここにいるのだろう。自分たちは侵入者でその上『破滅』を連れているのだ。ここに警備の人間から見れば危険この上ない存在のはずである。

そんな危険な連中の前に、何故、法王は姿を見せたのだろう？
……ユイにもケイにもなんとなく予想はついた。

腐りきつた五皇國。

そのてっはんにいる人間。

普段なら己の保身ばかりを考える人間が、こんな場面で姿を現す理由などたかが知れてくる。

「見ろ、怯えているではないか。ああ、そう怖がらずとも良い、余がそなたたちを護ろう。安心するが良い」

陳腐な言いように、ユイはしらけ、ケイはあきれた。法王が言つてゐるように怯えているわけでは断じてない。あまりにもあからさまなのでかえつて呆れたのだ。

始めから大人に絶望しきつてゐる子供たちに、とつてつけたような薄っぺらい言葉など通用するわけがないのに、法王はそんなことにも気付かず続ける。

「興味本位でここに入つたことも許そう。罪には問わぬ。そなたたちがどこから迷い込んだのか分からぬが、そなたたちもその子も余のほうで保護しよう。さあ、その子をこちらへ」

はー。ユイとケイは同時にため息をついた。予想は的中している。法王の視線はツバサに向いていた。

「……あほか」

ユイが言い、

「……いや、自分は賢いと思つてゐるんだろ
ケイも言つ。

『破滅』が解き放たれたら、まず上の人間はどう出るか。
その見本の二つ目がここにいる。

一人目はセトラだ。彼女は手に負えぬ力を持つものを再び封印し

ようとした。

二人目が法王。彼は多大で強力な力を持つものを手中に収めようとしている。

「……わかりやすいな」

手に取るように考えが分かる。法王はツバサを利用する気満々だ。「法王閣下？ この子はわたしの妹です。迷い込んだのではなく、ここまで一緒にきました。だから一緒に処断してください」

さつくりとユイは言い切つた。ここで法王にツバサを渡す気など毛頭無い。ツバサを渡してしまえば、少女にとつていいことなど何一つないだろうと容易に予想できる。

「何を言つ。処罰などせぬよ。そう警戒せずとも良いだろ？ とにかくこのような場所ではなく、暖かい部屋に入らうではないか。車に乗りなさい」

表面上は優しい声に聞こえた。だが、その視線はツバサからちらと離れない。

警戒と好奇、欲望が見え隠れしているのはよく分かつた。『破滅』に触れるのは恐ろしいが、その力は魅力的なのだ。

ユイの陳腐な嘘など意味がない。向こうはツバサが『破滅』と分かっている。如何にしてユイたちからツバサを引き離すか、それだけを狙っている。ツバサを渡してしまえばユイもケイも用なしだろう。即座に殺されること確実である。

ツバサを渡せば殺される。ユイはそう予想していたのだが、ケイの考えていた予想はもっといやらしいものだった。

「法王閣下。俺……いや、私たちの罪は問わないと仰せですか？」

ケイの問いに法王は鷹揚に頷いた。いかにも懐が深そうに。

「なんと寛大なご処置、いたみります閣下。ですが一つお伺いしたいことがござります」

「なんなりと申してみるが良い」

笑みと余裕をたたえ、法王は質問を促した。

「この子は本当に『厄災』と呼ばれるほどの存在なのでしょうか？」

もしそうならば、一体何をして『厄災』と称されるようになったのです？」

彼の問いに法王は瞬間惑いを見せたが、答えた。

「そなたたちも存じておろう、五百年前のアッパー・ド山脈の崩壊を。あれは史実上では天災といふことになつておるが、実際はその少女が起こしたことなのだ」

「！」

ユイは田を見張つて自分のマントにくつこいでいるツバサを見下ろす。

史上最大の地震で跡形もなくなった山脈のことは、歴史学で必ず一度は習うほどの有名な天災だ。ラグドラリヴの東に数十キロにわたりて存在していた山脈で、それが一夜にして全てなくなつたという。それほどの規模だったにも関わらず、周囲の町などに被害はなかつたため、セリオスの加護だの奇跡だの言われていた。

それが、ツバサがやつたことだというのか？！

「ちょ、ちょっと待て！ ツバサがそれを？ だってこの子は外も見たことないような感じだつたぞ？！ ずっとあのカプセルに封じられていたんじゃないのか？！」

あまりの驚きに敬語も忘れたユイに警備が銃を向けたが、法王はそれを制して続けた。

「そうとも。その子はずつとあの地下にいた。地下でまどろんでおつた。あの天変地異はその眠りを邪魔した当時の人間に向かつて放された寝言のようなものだ」

言葉を失うユイに法王はたたみかける。

「それをようやくあのように厳重に封じたのがわれわれの先祖なんだよ。だがその封も解かれてしまつた。何度も言うが罪には問わぬ。目覚めてしまつたものは仕方がなかろう。如何な『破滅』と言えどその子とて一個の命。再び封じるのは忍びない……不憫でならぬ」とくとくとそう言つ法王に見えぬ角度でケイがユイのわき腹をついてきた。彼が隠し持つてている端末を見ると指図されているよう

だ。法王に気が付かないようにコイは視線の角度をわずかに変えた。画面にケイが打ちこんだらしい文字が見える。

『法王は俺とお前がツバサを制御できると見ている。俺たちを手中にすればツバサも手に入ると思つていてる』

コイはあまりの勝手さにめまいのような怒りを覚えた。法王は『破滅』は欲しいが危険は避けたいのだ。危険を少しでも低くするために、ツバサになつかれているコイたちから先に手なずけるようとしているのだと、ケイはそう指摘している。

その予想は外れてはいなかった。そもそもなれば自分たちが助かる理由がない。

……断じて受けたりするものか。懐柔などされるものか。ツバサは自分たちが護るのだ。

こんな腐った連中にむざむざこの子を渡してなるものか。
つん、とケイが再びコイのわき腹をつつき、何かを押し付けてきた。『それ』を密かに受け取りながら端末に視線をやると、さつきとは違う文字が画面に出てこいる。たつたひとつのこと。

『法王を人質に取れ』

なるほど、とコイは内心うなづいた。この場で一番偉い立場の人間で、他の人間に指図できるのは、目の前でコイたちをなんとか丸め込もうとしている腐った男だ。

さすがケイ、性格が悪いだけあって考えることがエグい。コイは心底感心した。

ひとつつなぎいて、コイはケイの意見を実行に移そうとした。法王さえおさえてしまえば、他のやつらは手出しできまい。法王はごく普通の人間のはずだ。コイなら労せず捕まえられる 動こうとしたとき、コイの中の何かが止めた。それは今まで培つつちかた経験が告げたものだらうか、やばいと彼女の何かが告げている。ケイの襟首をつかみ、ツバサの肩を抱き法王から距離をとる。ケイが、げふつとか言っていたがとりあえず無視した。

「どうした？ 恐がらずとも良い」

法王はそう言つていたが、反応したのは今まで黙つていたツバサだった。

「またきた。やなやつ」

本当に嫌そつたので、コイにも誰をさしているのか理解できた。ツバサと会つてからまだ短いが、短いゆえに少女が嫌いだと公言する相手はたつたひとりだけ。

この嫌な予感はそのせいか。

「セトラ・オウンゴン……」

気配はしない。コイに気配を悟られるようなセトラではないだろう。だがこちらにはツバサがいる。どうやって感知しているのか不明だが、ツバサが言つならセトラはどういかでこちらの行動をうかがつてゐるのだ。法王に手などかけたらその瞬間にバラバラにされる。どうする？ このままではジリ貧だ。法王の要求を受ける気など爪の先どころか細胞のいつぺんほどもない。

「コイ、ケイ、こまつてる？」

ツバサが見上げてきた。ビリもならない雰囲気を感じ取つているのだろう。

「あいつら、じゅま？」

包囲網を指す。ツバサにされて怯えたのか包囲は一步下がつ

た。

「あつちいけする？」

ツバサにあどけなくそう訊かれユイは言葉に詰まつた。たしかにツバサに頼めば、確實に安全に逃げられるような気はする。だが、安易にこの子に頼つてはいけないとも思うのだ。

ツバサには幸せをあげたいから、汚れた自分のように人を害する術^{すべ}を覚えて欲しくない。

地下でケイの頼みをツバサはあつさりとかなえた。ユイが頼んでもかなえてくれるだらう。簡単にツバサに頼むことができるし、ツバサが頼みを聞いてくれるとわかつていいから、なおむろこの子におぶさるような真似はしたくない。

「うつん、いいよ。わたしが何とかするから」

安心させたくて微笑みかける。

「何とかする？　どうしようというのだね。罪は問わぬと言つておるだらう？　警戒することなど……」

なおも何か言おうとする法王をユイは睨みつけた。ツバサへの態度とは真逆である。

さつきまであつた一応の礼儀も捨て去り、彼女にあるのはいまや完全な法王への敵意だ。

殺意ほど強くはないが充分に相手を警戒させるもの。さすがの法王もあからさまな態度に数歩後退した。それで充分に聞命いが取れる。先ほどケイが押し付けてきた品を投げつけると同時にツバサとケイを抱え込んで地面に伏せた。

鼓膜を揺るがす破裂音とうめき声。それからユイは身を起こした。

「ひよーー？」

ツバサが目をぐるぐるさせながら起き上がる。ケイは頭を振つてから起き上がつた。

「……いきなりだな、おい」

「お前が渡してきたんだぞ」

小型の閃光破裂弾である。音と光と衝撃で相手を氣絶させるシロ

モノだ。直撃すればトラでも倒れる。ユイたちは伏せていたし、魔王や包囲の人間が盾になつたようなものなので、多少耳が遠いが無傷であった。

「あんなもの持つてゐるならもつと早く出せ」

ケイに言いながらユイは刃を抜いた。倒れている人間はあと一時間は起きてこない。

「……といつかわたしは余分なものは置いて来いと言わなかつたか？」

「言つてたな。余分じゃなかつたからいいだろ？？」

言いながらケイはツバサを抱えてユイから距離を取つた。その視線の先にはさつきまではなかつた銀色の影がある。

「わたくしと戦うつもりですか？」

「そのほかにどう見える？ セトラ・オウンゴン」

「あなたではわたくしにはかないません。無駄な抵抗はおやめなさい」

「そうだな、多分その通りだ」

セトラにはかなわない。それはセトラが愛用していいる鋼線を使つていた場合なら、だ。その鋼線はツバサが蒸発させた。同じものはないのだろう。セトラは予備の武器なのか、手に剣を持つていた。それはいつもの武器とは全く違つ。

いかにセトラが達人でもそれなりば。

「でも、万が一ということもある。それに」

ユイは自分の背中の気配を感じる。

「わたしには負けられない理由ができる」

そこにはケイがいる。すこぶる嫌なのだがいまでは同じ想いを持つ者だ。

その腕の中にはツバサがいる。何も知らないユイとケイの可愛い『破滅』。

彼女が護るべきもの。なによりもただ、護りたいと思つもの。この世界で唯一輝いていると感じるもの！

「……愚かですね、『それ』はあなたに護られるほど脆弱な存在ではありません」

「やうだらうな

セトラの声にもユイは揺らがない。

「なんせ『破滅』だもんな？ ツバサは」

ケイも言つ。彼も揺らがない。ツバサは分かつていなかの、ケイに抱つこされてご満悦だ。嬉しそうに笑つてゐる。

「そんなもん、確かに護る必要はないんだろう。でも、俺たちはそうしたいからする。理屈なんて知るか」

「理屈男のお前が言つか？ えらい方向転換だな」

ケイをちゃかしながら、ユイはセトラと向き合つた。そこに氣負いはない。地下でセトラと向き合つたときは全く違つた。ツバサがなんなか理解したうえで、自分がこうしたいのだと確信したからだろう。余分な力が入つていない。

化けたな、とケイは思った。今のユイを倒すのは結構骨だらうとなんとなく思う。開き直つただけかもしれない。けれど今のユイは過去の彼女とは違つ。空虚で絶望しか知らなかつたケイと同じものを持つ女。

ラグドラリヴに来て、ケイが変わったようにユイも変わつた。

「ユイ、がんばる

無邪気に応援する『破滅』と出会つて彼女も彼も変わつたのだ。

「がんばるよ

ツバサに答え、ユイは刃を師に向けた。

負けるかもしれない。死ぬかもしれない。昔はそんなことなんて怖くなかった。自分がいつ死んでもなんとも思わなかつたろう。

今は、怖い。死にたくない。生きていたいと思う。

ユイの心に生まれたものはなんなのだ。彼女自身にも分からぬ。

「……その子は人間に見えても人間ではありませんよ。形が似ているだけです。少女の姿をしていても内実は全く違う」

セトラは剣を構えた。落ち着いた声で落ち着いた態度でコイに刃を向ける。

「いわば化け物です。それでも護るというのですか？」

その鋭い眼光にさらされてもコイはひるまなかつた。以前ならこうして向き合つただけでセトラにはかなわないと感じていたのに、不思議だ。

丈の長い草の中で走り回ることは出来ない。リーチでは背の高いセトラのほうが上で、さらに彼女はコイよりも強化されている。薬物だけでなく機械強化も受けているはずだ。まさしく人間兵器である。普通に考えたら勝てる可能性などないに等しい。

「愚問だ、セトラ」

コイの返答にセトラは速く、正確にコイの喉を狙つてきた。もはや問答は不要、処分すべしと判断したのだろう。『破滅』を開放しただけでなく、法王にまで狼藉を働いたコイたちを許すつもりなど最初からないのだ。

そしてコイもセトラのその考えを理解していた。躊躇なく急所を狙つてくるだらうことも予想できる。セトラに迷いが無いようにコイにも迷いはない。刀を突き上げ、火花を散らしながらセトラの剣の先を逸らす。空を切った剣先が戻る前に身を沈め、下方から再び突き上げた。セトラは軽く身をそらしてすんなりと避け、剣を振り下ろしてきた。

月光を裂くような刃の輝きがコイの頭上に落ちてくる。コイは足もとから身を滑らせた。

靴先から小さな刃が飛び出している。逆立ちするような体勢で、つま先を蹴り上げた。

セトラはかるうじてそれをかわしたが、コイは宙で一回転しながら刀を振るい追撃する。刃先はそれでもセトラの頬をかすつただけだ。

「……人間か、あれ

互いに体勢を整え、再び対峙するコイとセトラを眺めながら、ケイは引きつって呟いた。

さすが裏神官のトップクラス。見ているケイの手のひらも、じつとりと汗がにじんできた。

「……わたくしに手傷を負わせられるほどになりましたか……惜しいです、コイ・ヒガ。もう一度考え方直しなさい。あなたほどのものを殺すのは忍びない」

「何を心にもないことを。法王に乱暴を働いたものがあなたが許すわけがない」

セトラが法王に関することを譲らないように、コイにも譲れないものができた。ここで甘言に乗ることはできない。

「あなたが法王を裏切ることがないように、わたしにも裏切れないものができた」

水平に刃を構える。リーチを補えるものは突きしかない。セトラもそれは理解していく、同じように剣を構えた。

コイの意思を阻むように。

「……残念です」

決して相容れない、世界を護ろうとするものと滅ぼそうとするもの。

その意見が交わることは無いのだ。

護ろうとする腐った大人たちと、滅ぼそうとする病んだ子供たちが、互いを理解することは無い。もはや道は分かたれた。

コイは刃を突き出した。

セトラもほぼ同じタイミングで剣を突き出す。

全ての音が消えたのを感じた。セトラの剣が迫つてくる。それはとてもゆっくり見えた。自分の腕もとてもゆっくり進んでいく。こんなこと本の中だけの現象だと思っていたが、実際あるんだと妙にのんきに考えた。

このタイミングのままなら間違いなく先に貫かれるのは自分だ。だが、セトラも死ぬ。剣がユイの目を突くのとわずかに遅れて、刀はセトラの首を裂くだろう。

相討ちか、悪くない。わずかの時間でそう思つた。ツバサはケイが護つてくれるだろう。

この場さえしのげば、ケイはツバサを連れて上手く逃げられる。セトラを道連れにできるのならたいしたものだ。

剣が届くその瞬間にユイは笑つた。

護れるのなら、命を懸けてもいい。そんな存在に最後に出会えた。だから、いい。ひそかな自己満足に浸つた瞬間、聞こえたもの。

「ユイ！」

自分で呼ぶ一種の声。

考えるまでもない、二人の声だ。

ああ、と思つた。

わたし、死ねない。

渴望のような死への誘惑が完全に断ち切れた瞬間だつた。

ユイは身をひねりながら自分でも驚いた。自分にこんな動きができるとは思つていなかつたからだ。セトラの剣はユイの頬を削り、ユイの刃は空を切る。けれどユイは勢いよく身を回転させて、マントを跳ね上げた。

特殊鋼糸が織り込まれたマントは、刃が空振りしたことを見て追撃を重ねてこよυとしたセトラの両目を切り裂いた。

その瞬間に勝負はついて 大人と子供の決別は成された。

四章・壁……越えるべきもの・5（後書き）

次回、Hピローグを載せます。

「……許されることではありますんよ……」

滴る鮮血をおさえながら呻くような聲音でセトラは呪詛を吐いた。両目は完全につぶされた。目が見えなくとも彼女なら戦うことは可能だが、いまは相手が悪い。

生徒は師を超えた。ほんの一瞬だつたとしても、その一瞬が全てを分けた。

セトラはそれを理解していた。

そして、たとえコイを倒したとしてもその後ろには『破滅』がいる。

「その子を……『破滅』を解き放てば、この世界は終わるのです。全てが滅ぶと……理解しているのですか？」

「そのつもりで来た」

コイはあっさりとそう答えた。

「わたしもケイももともと世界を滅ぼすつもりでいた。そうでなければラグドラリヴまで来るわけがない」

『破滅』が世界を滅亡させる終焉しゅうげんを望んでいた。自身の死も含めた一切の終わりを求めてここに来た。世界と一緒に心中するつもりでいた。

「でも。ここにいたのはツバサだ。外を知らない、何も知らない女の子だ」

光翼の少女は心配そうにコイのそばにふよんと飛んで来た。コイの頬から流れる血を見て痛そうに顔をしかめる。それから手を伸ばしてコイの頬にふれた。

「いたいのだめ」

それだけで、かなり深かつた傷は瞬時に消えた。

「ツバサは治癒もできるのか。万能だな」

ケイがそう言つたのでコイはそこで初めて自分の負つた怪我が治

つたことを知った。頬に触れてみる。さつまでの熱のよつた痛みはなく、指先には血もついてこない。
必ず傷跡が残るだらうと思つていたがこの分では跡形もないようだ。

「ありがと、ツバサ」

笑いかけると『破滅』の少女は嬉しそうにへつててきた。

「本気で……言つていいのですか」

セトラが呻く。

「世界を滅ぼすと、本氣でつー。」

「その気だつたさ」

ケイもまた、至極あつさりと言つてのける。

「過去形だけだ」

世界が嫌いなことに代わりはない。今でも吐き気がするくらいこの世界が嫌いだ。滅ぼしたいとも思つ。なくなつてしまえとも思つ。その力を求めてここに来た。

「でも、実際に出会つた『破滅』がツバサだったからな」

「そうだな」

ユイはうなずいた。

「いたのがツバサじやなかつたら確実に世界を滅ぼせと頼んでいたんだが」

それは本心だ。あの場所にいたのがツバサじやなかつたら、ユイたちは迷わず世界を滅ぼしている。

「まあ。世界も俺たちも命拾いしたつてことだ。ツバサをほつて死ぬわけにいかなくなつた」

ツバサに向かつておいでと手を振る。子犬のようにツバサはケイの方へ飛んできてじやれ付いてくる。

「ユイとケイのかわいい『破滅』。」

この子をこんな風に思うのは自分たちだけだらう。他の人間は少女を恐ろしいとしか思わない。利用しようとしたしか思わない。

「行こう」

ユイはケイにそう言つて刃を納めた。セトラが襲つてくる様子はない。こちらの考えが理解できなくて呆然としているのだろう。セトラは護るものであり、滅ぼすものではない。

だからこちらの考えが理解できない。

その気持ちも今のユイたちには分かつた。自分たちがどれだけ馬鹿なことをやろうとしていたのかはよく理解している。

ただ、死にたかったのだ。死に場所を探していたのだ。戻ることなど考えずにラクになろうと思った。この腐った世界で生き続けるのは苦痛だった。

未来は真っ暗だったから、道のないところを歩くのが怖かった。この先に何があるのかも分からないのに、希望など持てなかつた。自分勝手なものだ。全て『破滅』に押し付けて、自分たちだけラクになろうとした。

いまはそれも理解できる。

ユイとケイはツバサを連れてセトラに正面を向け、歩き出した。向かう先にヒニア。

けれどそれから先はどうなるか分からない。

状況は以前より遙かに暗く不透明なのに、今の彼女たちにはそれが重荷ではない。

苦しくつらい未来が待つてているのは確実だ。
なにせ連れているのは『破滅』なのだから明るい未来などありえない。

「これからどうする?」

それなのにケイの声は明るい。

「どうするつて、逃亡生活しかないだろう」

それなのにユイの声も楽しそうだ。

「とーぼー」

ツバサはいつもどおり、分かつていない。少女に苦笑してからケイはユイに訊いた。

「お前、金いくらくらい持ち合わせある? 僕は旅行を裝つてきた

からそれなりに持つてゐる

とりあえずこれからのことを考える。まずはヒーラーに抜けてからどうするか。

何をするにしても金が必要る。

「わたしは給付金が出たばかりだから……」

歩きながらお互の手持ちを言い合つてその時点できがでしきそつか考えた。

幸いというか、ユイもケイも結構な額を持ち歩いていた。これら三人でも一ヶ月は何とかなる。一人とも自国の銀行に口座を持つており、そこには年齢から考へると不相応な額が入つてゐるが、こうなつてしまつた以上、預金を下ろすのはまず不可能だらう。

と、なると無駄遣いはできない。

「まずツバサの服を買わないと。いつまでも上着一枚じゃかわいそうだ」

「俺たちのもだらう。このまま制服着てると田立つ」

言いながらケイは耳のイヤリングを外して投げ捨てた。ユイも髪留めを草むらに放り込む。

五皇國の僕しやくべである証の六芒星がついた制服。多機能で便利ではあるがもう自分たちには必要ない。彼女たちはもはや五皇國の奴隸ではないのだ。

これから、自分たちの足で歩いていく。

他の誰にも真似できない道を、他の誰でもなく　自分たちで。

「当座の金はあるが、飢え死にすることは避けられそうだな、良かつた」

「あー、国境を出たらまず腹ごしらえだな、それから睡眠だ。いい加減疲れた」

夜が明けようとしている。ずっと歩いていたし、徹夜だったのとケイは疲れきつていふようだ。ユイもセトラと戦つたので精神的には疲れてはいたが、体力的には元気である。一晩や二晩でどうにかなるようなら裏神官などやっていない。

「腹が減っているのか？ チョコならあるぞ」

「くれ。疲れたときは糖分だ」

遠慮しないケイにウェストポーチからチョコを出すと、ツバサが興味津々覗き込んできた。

「これはね、チョコレートだよ」

「ちょこ」

ちょうど一枚買っていたので一枚をツバサに手渡す。受け取るとツバサは物珍しそうにひっくり返したりして眺めている。食べ物と分からぬのだろう。

「食べる物。ほらケイが食べててるでしょ？」

半分ほど包み紙を剥いてぱりぱりかじつているケイをさす。

それを見て理解したのか、はたまた単に真似したいだけなのか、ツバサも嬉々として包み紙を剥いでいく。単に紙をはすこと自体が楽しそうにも見えた。

「かじつてごらん。美味しいよ」

うながすとツバサはパクリとかじりついた。

かりぽりとしばらく噛んで、目を輝かせる。ビリやら氣に入ったらしい。

「ちょこー！」

あつという間にパクパクと食べてしまつた。なんだか木の実を食べる小動物を連想してしまつたユイである。可愛らしい。

「ジュースもあるよ」

果汁を買ってあつたことも思い出し、ポーチから出してツバサに渡した。ペットボトルも初めて見たらしいツバサは、大喜びでさまにしたり振つてみたりしている。

飲み物というより遊び道具と思つているのか。そうじゃないんだけどなあと笑つて、

「これはね、飲み物。こいつってふたを開けて、ここから飲むんだよ

ふたを開けてやり、飲み方を教えてやるとちよつといじほしながら

も何とか飲んだ。

「じゅーす！」

「これも気に入つたらしく、嬉しさうに田を輝かせてくる。

「……餌付けしてるみたいだな……」

ケイも苦笑して呟く。それからふと気が付いたようにツバサに注意した。

「ツバサ？ 僕やコイからならいいけど他の人間から食べ物をもらつちゃ駄目だぞ？ 外には食べ物買つてあげるとかいつて連れていこうとする変なやつもいるからな」

「へんなやつ」

「ククク、うなづくツバサである。分かつてゐるのかは非常に怪しい。

常識をいろいろと教える必要がある。なにせ魔王の話ではツバサは五百年も眠つていたのだ。当時の常識と今とではかなり差があるだろうし、そもそも少女は一般常識を持つていないようと思える。

……ゆっくり教えていい。コイはそう思った。

時間はたくさんある。状況は緊迫していても、ツバサとすこす時間はこれからたくさんある。ケイと一人でこの子にいろんなことを教えてあげよう。

常識も言葉も、嬉しいこと、楽しいこと、いろんなことを教えてあげよう。

絶望ではなくて、希望を。暗いものではなくて明るいものを。

そんなことを考えながら、セイリオスの裏神官トイグザイオのヒート軍人は『破滅』を間に進んでいく。

ツバサを解き放つた以上、国には当然戻れまい。禁忌の地で眠っていた『破滅』がこんな少女とは夢にも思つていなかつたが、今となつてはこれで良いような気がしている。

『破滅』は開放されたが、世界はまだ続いている。終わるどころか『破滅』は外の景色に興味津々で日を輝かせて田の昇りかけてきた周りを眺めている。

そのうち飽きれば世界を滅ぼすのかもしれないが、今のツバサを見ていると浮かぶ言葉は『破滅』ではなく『天使』だ。

「しかし……見た目に騙されてる可能性高いぞ？俺たち」

ケイがぼやく。法王に聞いたことが今更ながらによみがえる。

五百年前の天変地異。圧倒的な力。人間ではないもの。

『破滅』。『厄災』。世界を滅ぼすもの。それはこちらの考えでは図りきれないものだろう。人間の考えでは到底理解できないものだ。分かり合えないかもしれない。

「ツバサが気を変えて俺たちをさくっと殺す可能性もある」とは言うもののケイは大して警戒してはいない。

「ツバサになら殺されてもいいって気はするが」「わたしもだ」

なんてことはない。ツバサが世界を滅ぼそうとするならそれでいい。

世界を護ろうとするならそれでいい。

そう考えているだけだ。

ツバサの意思を護ろうと思つた。

この子に世界の滅亡を願うことはできなかつた。

けれどツバサが『破滅』であることは間違いない。それは避けようのない事実だ。

ならば 世界を敵に回してもこの子を護ろう。

世界は醜い。腐つていて、濁んでいて、歪んでいて、病んでいて、汚れていて、壊れている。簡単に絶望する現実がそこかしこに転がっている。

でも。

「あれは？ なあに？」

ツバサが水色の目をキラキラさせて訊いて来る。

こんなに醜い世界でも喜ぶこの子がいるうちは捨てたものではな

いのかもしない。

護りたいと思う何かがある「けいは」

世界の存在を祝おう。

この腐りきった世界でも、輝く何かがあることをコイとケイはは

じめて知った。

終章・やさる」と（後書き）

これにて「みえるもの・できる」とは完結です。
きっと、三人には追つ手がかかるでしょう。それでも、三人とも幸
せに過ぎずでしょ。

ユイとケイはできる」とをみつけ、ツバサは信頼できる相手を見つ
けたのですから。

長らくお付き合いありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4453c/>

みえるもの・できること

2010年10月8日12時19分発行